

野分

夏目漱石



一冊堂青空文庫

野分

夏目漱石

一

白井道也しらいどうやは文学者である。

八年前まえ大学を卒業してから田舎いなかの中学を二三箇所かしよ流して歩いた末、去年の春ひょうげん飄然と東京へ戻つて来た。流すとは門附かどづけに用いる言葉で飄然とは徂徠そらいに拘かかわらぬ意味とも取れる。道也の進退をかく形容するの適否は作者といえども受合うあわぬ。纏もつれたる糸の片端かたはしも眼ちやくを着すればただ一筋の末とあらわるるに過ぎぬ。ただ一筋の出処しゅつしよの裏には十重とえ二十重たえの因縁いんねんが絡からんでいるかも知れぬ。鴻雁こうがんの北に去りて乙鳥いつちようの南に来るさえ、鳥の身になつては相当の弁解があるはずじゃ。

始めて赴任ふにんしたのは越後えちごのどこかであつた。越後は石油の名所である。学校の在ある町を四五町隔へてて大きな石油会社があつた。学校のある町の繁栄は三分二ぶ以上この会社のお蔭おかげで維持は持もたされている。町のものに取つては幾個の中学校よりもこの石油会社の方が遙はる

かにありがたい。会社の役員は金のある点において紳士である。中学の教師は貧乏なところが下等に見える。この下等な教師と金のある紳士が衝突すれば勝敗は誰が眼にも明かである。道也はある時の演説会で、金力と品性と云う題目のもとに、両者の必ずしも一致せざる理由を説明して、暗に会社の役員らの暴慢と、青年子弟の何らの定見もなくしていたさらに黄白万能主義を信奉するの弊とを戒めた。

役員らは生意気な奴だと云った。町の新聞は無能の教師が高慢な不平を吐くと評した。彼の同僚すら余計な事をして学校の位地を危うくするのは愚だと思った。校長は町と会社との関係を説いて、漫に平地に風波を起すのは得策でないと説諭した。道也の最後に望を属していた生徒すらも、父兄の意見を聞いて、身のほどを知らぬ馬鹿教師と云い出した。道也は飄然として越後を去った。

次に渡ったのは九州である。九州を中断してその北部から工業を除けば九州は白紙となる。炭礦の煙りを浴びて、黒い呼吸をせぬ者は人間の資格はない。垢光りのする背広の上へ蒼い顔を出して、世の中がこうの、社会がああ、未来の国民がなんのかのと白銅一個にさえ換算の出来ぬ不生産的な言説を弄するものに存在の権利のあらうはずがない。権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲である。無駄口を叩く学者や、蓄

音機の代理をする教師が露命をつなぐ月々幾片の紙幣は、どこから湧いてくる。手の掌をぼんと叩けば、自から降る幾億の富の、塵の塵の末を舐めさして、生かして置くのが学者である、文士である、さては教師である。

金の力で生きておりながら、金を誂るのは、生んで貰った親に悪体をつくと同じ事である。その金を作ってくれる実業家を軽んずるなら食わずに死んで見るがいい。死ねるか、死に切れずに降参をするか、試めして見ようと云って抛り出された時、道也はまた飄然と九州を去った。

第三に出現したのは中国辺の田舎である。この気風はさほどに猛烈な現金主義ではなかった。ただ土着のものがむやみに幅を利かして、他県のを外国人と呼ぶ。外国人と呼ぶだけならそれまでであるが、いろいろに手を廻わしてこの外国人を征服しようとする。宴会があれば宴会でひやかす。演説があれば演説であてこする。それから新聞で厭味を並べる。生徒にからかわせる。そうしてそれが何のためでもない。ただ他県のものが自分と同化せぬのが気に懸るからである。同化は社会の要素に違ない。仏蘭西のタルドと云う学者は社会は模倣なりとさえ云うくらいだ。同化は大切かも知れぬ。その大切さ加減は道也といえども心得ている。心得ているところではない、高等な教育を

受けて、広義な社会観を有している彼は、凡俗以上に同化の功德くどくを認めている。ただ高いものに同化するか低いものに同化するかが問題である。この問題を解釈しないですらに同化するのには世のためにならぬ。自分から云えば一分いちぶんが立たぬ。

ある時旧藩主が学校を参観に来た。旧藩主は殿様で華族様である。所のものから云えば神様である。この神様が道也の教室へ這入はいつて来た時、道也は別に意にも留めず授業を継続していた。神様の方では無論挨拶あいさつもしなかつた。これから事が六むずかしくなつた。教場は神聖である。教師が教壇に立つて業を授けるのは侍さむらいが物の具ぐに身を固めて戦場に臨むようなものである。いくら華族でも旧藩主でも、授業を中絶させる権利はないとは道也の主張であつた。この主張のために道也はまた飄然ひようぜんとして任地を去つた。去る時に土地のものは彼を目めして頑愚がんぐだと評し合うたそうである。頑愚と云われたる道也はこの嘲罵ちやうばを背に受けながら飄然として去つた。

三みたび飄然と中学を去つた道也は飄然と東京へ戻つたなり再び動く景色けしきがない。東京は日本で一番世地せちがら辛い所である。田舎にいるほどの俸給を受けてさえ樂には暮せない。まして教職を抛なげうつて両手を袂たもとへ入れたままで遣り切るきるのは、立ちながらみいらとなる工夫くふと評するよりほかに賞めほめようのない方法である。

道也には妻がある。妻と名がつく以上は養うべき義務は附随してくる。自からみいらとなるのを甘んじても妻を干乾にする訳には行かぬ。干乾にならぬよほど前から妻君はすでに不平である。

始めて越後を去る時には妻君に一部始終を話した。その時妻君はごもつともでござんと云つて、甲斐甲斐しく荷物の手拵を始めた。九州を去る時にもその顛末を云つて聞かせた。今度はまたですかと云つたぎり何にも口を開かなかつた。中国を出る時の妻君の言葉は、あなたのように頑固ではどこへいらしても落ちつけつこありませんわと云う訓戒的の挨拶に変化していた。七年の間に三たび漂泊して、三たび漂泊するうちに妻君はしだいと自分の傍を遠退くようになった。

妻君が自分の傍を遠退くのは漂泊のためであろうか、俸禄を棄てるためであろうか。何度漂泊しても、漂泊するたびに月給が上がつたらどうだろう。妻君は依然として「あなたのように……」と不服がましい言葉を洩らしたろうか。博士にでもなつて、大学教授に転任してもやはり「あなたのように……」が繰り返されるであろうか。妻君の了解は聞いて見なければ分らぬ。

博士になり、教授になり、空しき名を空しく世間に謳わるるがため、その反響が妻君

の胸に轟いて、急に夫の待遇を変えるならばこの細君は夫の知己とは云えぬ。世の中が夫を遇する朝夕の模様で、夫の価値を朝夕に変える細君は、夫を評価する上において、世間並の一人である。嫁がぬ前、名を知らぬ前、の己れと異なるところがない。従つて夫から見ればあかの他人である。夫を知る点において嫁ぐ前と嫁ぐ後とに変わりがなければ、少なくともこの点において細君らしいところがないのである。世界はこの細君らしいからぬ細君をもつて充滿している。道也は自分の妻をやはりこの同類と心得ているだろうか。至る所に容れられぬ上に、至る所に起居を共にする細君さえ自分を解してくれないのだと悟つたら、定めて心細いだろう。

世の中はかかる細君をもつて充滿していると云つた。かかる細君をもつて充滿しておりながら、皆円満にくらしている。順境にある者が細君の心事をここまで解剖する必要がない。皮膚病に罹ればこそ皮膚の研究が必要になる。病氣も無いのに汚ないものを顕微鏡で眺めるのは、事なきに苦しんで肥柄杓を振り廻すと一般である。ただこの順境が一転して逆落しに運命の淵へころがり込む時、いかな夫婦の間にも気まずい事が起る。親子の羈絆もぼつりと切れる。美くしいのは血の上を薄く蔽う皮の事であつたと気がつく。道也はどこまで気がついたか知らぬ。

道也の三たび去ったのは、好んで自から窮地に陥るためではない。罪もない妻に苦勞を掛けるためではなおさらない。世間が己れを容れぬから仕方がないのである。世が容れぬならなぜこちらから世に容れられようとはせぬ？ 世に容れられようとする刹那に道也は奇麗に消滅してしまうからである。道也は人格において流俗より高いと自信している。流俗より高ければ高いほど、低いものの手を引いて、高い方へ導いてやるのが責任である。高いと知りながらも低きにつくのは、自から多年の教育を受けながら、この教育の結果がもたらした財宝を床下に埋むるようなものである。自分の人格を他に及ぼさぬ以上は、せっかくに築き上げた人格は、築きあげぬ昔と同じく無功力で、築き上げた労力だけを徒費した訳になる。英語を教え、歴史を教え、ある時は倫理さえ教えたのは、人格の修養に附随して蓄えられた、芸を教えたのである。単にこの芸を目的にして学問をしたならば、教場で書物を開いてさえいれば済む。書物を開いて飯を食って満足しているのは綱渡りが綱を渡って飯を食い、皿廻しが皿を廻わして飯を食うのと理論において異なるところはない。学問は綱渡りや皿廻しとは違う。芸を覚えるのは末の事である。人間が出来るのが目的である。大小の区別のつく、軽重の等差を知る、好悪の判然する、善惡の分界を呑み込んだ、賢愚、真偽、正邪の批判を謬まらざる大丈夫が出

来上がるのが目的である。

道也はこう考えている。だから芸を売つて口を糊するのを恥辱とせぬと同時に、学問の根底たる立脚地を離るるのを深く陋劣と心得た。彼が至る所に容れられぬのは、学問の本体に根拠地を構えての上の去就であるから、彼自身は内に顧みて疚しいところもなければ、意気地がないとも思いつかぬ。頑愚などと云う嘲罵は、掌へ載せて、夏の日の南軒に、虫眼鏡で検査しても了解が出来るん。

三度教師となつて三度追い出された彼は、追い出されるたびに博士よりも偉大な手柄を立てたつもりでいる。博士はえらからう、しかしたかが芸で取る称号である。富豪が製艦費を献納して従五位をちようだいするのと大した変りはない。道也が追い出されたのは道也の人物が高いからである。正しき人は神の造れるすべてのうちにて最も尊きものなりとは西の国の詩人の言葉だ。道を守るものは神よりも貴しとは道也が追わるるごとに心のうちで繰り返す文句である。ただし妻君はかつてこの文句を道也の口から聞いた事がない。聞いても分かるまい。

わからねばこそ餓え死にもせぬ先から、夫に対して不平なのである。不平な妻を氣の毒と思わぬほどの道也ではない。ただ妻の歡心を得るために吾が行く道を曲げぬだけが

普通の夫と違うのである。世は単に人と呼ぶ。娶れば夫である。交われば友である。手を引けば兄、引かるれば弟である。社会に立てば先覚者にもなる。校舎に入れば教師に違いない。さるを単に人と呼ぶ。人と呼んで事足るほどの世間なら単純である。妻君は常にこの単純な世界に住んでいる。妻君の世界には夫としての道也のほかには学者としての道もない、志士としての道もない。道を守り俗に抗する道也はなおさらない。夫が行く先き先きで評判が悪くなるのは、夫の才が足らぬからで、到る所に職を辞するのは、自から求むる酔興すいきやうにはかならんとまで考えている。

酔興を三たび重ねて、東京へ出て来た道也は、もう田舎いなかへは行かぬと言い出した。教師ももうやらぬと妻君に打ち明けた。学校に愛想をつかした彼は、愛想をつかした社会状態を矯正するきようせいすには筆の力によらねばならぬと悟つたのである。今まではいずこの果で、どんな職業をしようとも、己れさえ真直であれば曲がつたものは苧殻おがらのように向うで折れべきものと心得ていた。盛名はわが望むところではない。威望もわが欲するところではない。ただわが人格の力で、未来の国民をかたちづくる青年に、向上の眼を開かしむるため、取捨分別しゆしゃふんべつの好例を自家身上に示せば足るとのみ思い込んで、思い込んだ通りを六年余り実行して、見事に失敗したのである。渡る世間に鬼はないと云うから、同

情は正しき所、高き所、物の理窟りくつのよく分かる所に聚あつまると早合点はやがてんして、この年月としつきを今度こそ、今度こそ、と経験の足らぬ吾身わがみに、待ち受けたのは生涯しょうがいの誤りである。世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識かんしのあるものでもない。同情とは強きもの、富めるものにのみ随したがう影にほかならぬ。

ここまで進んでおらぬ世を買い被かぶつて、一足飛いっそくとびに田舎へ行つたのは、地ならしをせぬ地面の上へ丈夫な家を建てようとあせるようなものだ。建てかけるが早いのか、風と云い雨と云う曲者くせものが来て壊こわしてしまふ。地ならしをするか、雨風あめかぜを退治たいじるかせぬうちは、落ちついてこの世に住めぬ。落ちついて住めぬ世に住めるようにしてやるのが天下の士の仕事である。

金かねも勢いきおいもないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。舌たすけの援たすけを藉からねばならぬ。脳味噌のうみそを圧搾あつさくして利他りたの智慧ちえを絞しぼらねばならぬ。脳味噌は涸かれる、舌は爛ただれる、筆は何本でも折れる、それでも世の中が云う事を聞かなければそれまでである。

しかし天下の士といえども食わずには働けない。よし自分だけは食わんで済むとしても、妻は食わずに辛抱しんぼうする氣遣きづかいはない。豊かに妻を養わぬ夫は、妻の眼から見れば大罪

人である。今年の春、田舎から出て来て、芝琴平町しはしんへいまちの安宿へ着いた時、道也と妻君の間にはこんな会話が起った。

「教師をおやめなさるって、これから何をなさるおつもりですか」

「別にこれと云うつもりもないがね、まあ、そのうち、どうかなるだろう」

「その内うちどうかなるだろうって、それじゃまるで雲を攫つかむような話しじゃありませんか」

「そうさな。あんまり判然はんぜんとしちやいない」

「そう呑氣のんきじゃ困りますわ。あなたは男だからそれでようござんしょうが、ちつとは私の身にもなつて見て下さらなくっちゃあ……」

「だからさ、もう田舎へは行かない、教師にもならない事にきめたんだよ」

「きめるのは御勝手ですけども、きめたつて月給が取れなけりや仕方がないじゃありませんか」

「月給がとれなくつても金がとれれば、よかろう」

「金がとれれば……そりやようござんすとも」

「そんなら、いいさ」

「いいさって、御金がとれるんですか、あなた」

「そうさ、まあ取れるだろうと思うのさ」

「どうして？」

「そこは今考え中だ。そう着^{ちやく}、早々^{そうそう}計画が立つものか」

「だから心配になるんですわ。いくら東京にいるときめたって、きめただけの思案^{しあん}じゃ仕方がないじゃありませんか」

「どうも御前^{おまえ}はむやみに心配性でいけない」

「心配もしますわ、どこへいらしても折合^{おりあい}がわるくつちや、おやめになるんですもの。私が心配性なら、あなたはよつぽど癩癩^{かんしゃくも}持ちですわ」

「そうかも知れない。しかしおれの癩癩は……まあ、いいや。どうにか東京で食えるようにするから」

「御兄^{おにい}さんの所へいらしって御頼みなすったら、どうでしょう」

「うん、それも好いがね。兄はいつたい人の世話なんかする男じゃないよ」

「あら、そう何でも一人できめて御^おしまいになるから悪るいんですわ。昨日^{きのう}もあんなに親切にいろいろ言って下さったじゃありませんか」

「昨日か。昨日はいろいろ世話を焼くような事を言った。言ったがね……」

「言ってもいけないんですか」

「いけないないよ。言うのは結構だが……あんまり当^{あて}にならないからな」

「なぜ？」

「なぜって、その内だんだんわかるさ」

「じゃ御友達の方にでも願って、あしたからでも運動をなすったらいいでしょう」

「友達って別に友達なんかありやしない。同級生はみんな散ってしまった」

「だって毎年年始状を御^お寄^よこしになる足^あ立^{だち}さんなんか東京で立派にしていらっしゃるじゃありませんか」

「足立か、うん、大学教授だね」

「そう、あなたのように高くばかり構えていらっしゃるから人に嫌^{きら}われるんですよ。大学教授だねって、大学の先生になりや結構じゃありませんか」

「そうかね。じゃ足立の所へでも行つて頼んで見ようよ。しかし金さえ取れば必ず足立の所へ行く必要はなからう」

「あら、まだあんな事を云つていらっしゃる。あなたはよっぽど強情ね」

「うん、おれはよっぽど強情だよ」

二

午に逼る秋の日は、頂く帽を透して頭蓋骨のなかさえ朗かならしめたかの感がある。公園のロハ台はそのロハ台たるの故をもつてことごとくロハ的に占領されてしまった。高柳君は、どこぞ空いた所はあるまいかと、さつきからちやうど三度日比谷を巡回した。三度巡回して一脚の腰掛も思うように我を迎えないのを発見した時、重そうな足を正門のかたへ向けた。すると反対の方から同年輩の青年が早足に這入って来て、やあと声を掛けた。

「やあ」と高柳君も同じような挨拶をした。

「どこへ行ったんだい」と青年が聞く。

「今ぐるぐる巡って、休もうと思ったが、どこも空いていない。駄目だ、ただで掛けられる所はみんな人が先へかけている。なかなか抜目はないもんだな」

「天気がいいせいだよ。なるほど随分人が出ているね。——おい、あの孟宗藪を回って

噴水の方へ行く人を見たまえ」

「どれ。あの女か。君の知ってる人かね」

「知るものか」

「それじゃ何で見る必要があるのだい」

「あの着物の色さ」

「何だか立派なものを着ているじゃないか」

「あの色を竹藪の傍へ持つて行くと非常にあざやかに見える。あれは、こう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ」

「そうかな」

「そうかなって、君そう感じないか」

「別に感じない。しかし奇麗きれいは奇麗だ」

「ただ奇麗だけじゃ可哀想かわいそうだ。君はこれから作家になるんだろう」

「そうさ」

「それじゃもう少し感じが鋭敏でなくっちゃ駄目だぜ」

「なに、あんな方は鈍くつてもいいんだ。ほかに鋭敏なところが沢山あるんだから」

「ハハハハそう自信があれば結構だ。時に君せっかく逢ったものだから、もう一遍ある
こうじゃないか」

「あるくのは、真平だ。これからすぐ電車へ乗って帰えらないと午食を食い損なう」

「その午食を奢ろうじゃないか」

「うん、また今度にしよう」

「なぜ？ いやかい」

「厭じゃない——厭じゃないが、始終御馳走にばかりなるから」

「ハハハ遠慮か。まあ来たまえ」と青年は否応なしに高柳君を公園の真中の西洋料理屋
へ引っ張り込んで、眺望のいい二階へ陣を取る。

注文の来る間、高柳君は蒼い顔へ両手で突っかい棒をして、さもつかれたと云う風に
往來を見ている。青年は独りで「ふんだいぶ広いな」「なかなか繁昌すると見える」
「なんだ、妙な所へ姿見の広告などを出して」などと半分口のうちで云うかと思つた
ら、やがて洋袴の隠袋へ手を入れて「や、しまった。煙草を買ってくるのを忘れた」と
大きな声を出した。

「煙草なら、ここにあるよ」と高柳君は「敷島」の袋を白い卓布の上へ抛り出す。

ところへ下女が御誂おあつらえを持ってくる。煙草に火を点ける間はなかつた。

「これは樽麦酒たるビールだね。おい君樽麦酒の祝杯を一つ挙げようじゃないか」と青年は琥珀色こはくいろの底から湧き上がる泡あわをぐいと飲む。

「何の祝杯を挙げるのだい」と高柳君は一口飲みながら青年に聞いた。

「卒業祝いさ」

「今頃卒業祝いか」と高柳君は手のついた洋盃コップを下へおろしてしまった。

「卒業は生涯しょうがいにたった一度しかないんだから、いつまで祝ってもいいさ」

「たった一度しかないんだから祝わないでもいいくらいだ」

「僕とまるで反対だね。――姉さん、このフライは何だい。え？ 鮭さけか。ここん所ところへ

君、このオレンジの露をかけて見たまえ」と青年は人指指ひとさしゆびと親指の間からちゅうと黄色

い汁を鮭の衣ころもの上へ落す。庭の面おもてにはらはらと降る時雨しぐれのごとく、すぐ油の中へ吸い込

まれてしまった。

「なるほどそうして食うものか。僕は裝飾についてるのかと思った」

姿見の札幌麦酒さっぽろビールの広告もじの本に、大きくなつて構えていた二人の男が、この時急に大きな破われるような声を出して笑い始めた。高柳君はオレンジをつまんだまま、厭な顔をし

て二人を見る。二人はいつこう構わない。

「いや行くよ。いつでも行くよ。エへへへ。今夜行こう。あんまり気が早い。ハハハハハ」

「エへへへ。いえね、実はね、今夜あたり君を誘つて繰り出そうと思つていたんだ。え？ ハハハハ。なにそれほどでもない。ハハハハ。そら例のが、あれでしょう。だから、どうにもこうにもやり切れないのさ。エへへへ、アハハハハハハ」

土鍋どなべの底のような赭あかい顔が広告の姿見に写つて崩くずれたり、かたまったり、伸びたり縮んだり、傍若無人ぼうじやくふじんに動揺どうごしている。高柳君は一種異様な厭な眼つきを転じて、相手の青年を見た。

「商人だよ」と青年が小声に云う。

「実業家かな」と高柳君も小声に答えながら、とうとうオレンジを絞しぼるのをやめてしまった。

土鍋の底は、やがて勘定を払つて、ついでに下女にからかつて、二階を買い切ったよ
うな大きな声を出して、そうして出て行つた。

「おい中野君」

「むむ？」と青年は鳥の肉を口いっぱい頬張っている。

「あの連中は世の中を何と想ってるだろう」

「何とも思ふものかね。ただああやって暮らしているのさ」

「羨やましいな。どうかして——どうもいかな」

「あんなものが羨しくつちゃ大変だ。そんな考だから卒業祝に同意しないんだろう。さあもう一杯景氣よく飲んだ」

「あの人が羨ましいのじゃないが、ああ云う風に余裕があるような身分が羨ましい。いくら卒業したってこう奔命に疲れちゃ、少しも卒業のありがた味はない」

「そうかなあ、僕なんざ嬉しくつてたまらないがあ。我々の生命はこれからだぜ。今からそんな心細い事を云つちゃあしようがない」

「我々の生命はこれからだのに、これから先が覚束ないから厭になつてしまふのさ」

「なぜ？ 何もそう悲観する必要はないじゃないか、大にやるさ。僕もやる気だ、いっしょにやろう。大に西洋料理でも食って——そらビステキが来た。これでおしまいだよ。君ビステキの生焼は消化がいいって云うぜ。こいつはどうか」と中野君は洋刀を揮って厚切りの一片を中央から切断した。

「なあるほど、赤い。赤いよ君、見たまえ。血が出るよ」

高柳君は何にも答えずにむしやむしや赤いビステキを食い始めた。いくら赤くてもけっして消化がよさそうには思えなかった。

人にわが不平を訴えんとするとき、わが不平が徹底せぬうち、先方から中途半把な慰藉ちゆうはんぱなゐしを与えらるるのは快たしかよくないものだ。わが不平が通じたのか、通じないのか、本当に氣の毒きがるのか、御世辞おせじに氣の毒きがるのか分らない。高柳君はビステキの赤さ加減を眺ながめながら、相手はなぜこう感情が粗大そだいだろうと思つた。もう少し切り込みたいと云う矢先きへ持つて来て、ざああと水を懸かけるのが中野君の例である。不親切な人、冷淡な人ならば始めからそれ相應の用意をしてかかるから、いくら冷たくても驚ろく氣遣きづかいはない。中野君がかような人であつたなら、出鼻をはたかれてもさほどに口惜くやしくはなかつたろう。しかし高柳君の眼に映ずる中野輝一なかのきいちは美しい、賢かい、よく人情を解して事理わきまを弁わえた秀才である。この秀才が折々この癖を出すのは解かいしにくい。

彼らは同じ高等学校の、同じ寄宿舎の、同じ窓に机を並べて生活して、同じ文科に同じ教授の講義を聴いて、同じ年のこの夏に同じく学校を卒業したのである。同じ年に卒業したものは両手の指を二三度屈するほどいる。しかしこの二人ぐらい親しいものはな

かつた。

高柳君は口数をきかぬ、人交りをせぬ、厭世家の皮肉屋と云われた男である。中野君は鷹揚な、円満な、趣味に富んだ秀才である。この兩人が卒然と交を訂してから、傍目にも不審と思われるくらい昵懇な間柄となった。運命は大島の表と秩父の裏とを縫い合せる。

天下に親しきものがただ一人あつて、ただこの一人よりほかに親しきものを見出し得ぬとき、この一人は親でもある、兄弟でもある。さては愛人である。高柳君は単なる朋友をもつて中野君を目してはおらぬ。その中野君がわが不平を残りになく聞いてくれぬのは残念である。途中で夕立に逢つて思う所へ行かずに引き返したようなものである。残りなく聞いてくれぬ上に、呑気な慰藉をかぶせられるのはなおさら残念だ。膿を出してくれと頼んだ腫物を、いい加減の真綿で、撫で廻わされたつてむず痒いばかりである。しかしこう思うのは高柳君の無理である。御雛様に芸者の立て引きがないと云つて攻撃するのは御雛様の恋を解せぬものの言草である。中野君は富裕な名門に生れて、暖かい家庭に育つたほか、浮世の雨風は、炬燵へあたつて、椽側の硝子戸越に眺めたばかりである。友禅の模様はわかる、金屏の冴えも解せる、銀燭の耀きもまばゆく思う。生き

た女の美しさはなおさらに眼に映る。親の恩、兄弟の情、朋友の信、これらを知らぬほどの木強漢ぼくきやうかんでは無論ない。ただ彼の住む半球には今までいつでも日が照っていた。日の照っている半球に住んでいるものが、片足をとんと地に突いて、この足の下に真暗な半球があると気がつくのは地理学を習った時ばかりである。たまには歩いていて、気がつかぬとも限らぬ。しかしさぞ暗い事だろうと身に沁しみてぞつとする事はあるまい。高柳君はこの暗い所に淋しく住んでいる人間である。中野君とはただ大地を踏まえる足の裏が向き合っているというほかに何らの交渉もない。縫い合わされた大島の表と秩父の裏とは覚束おぼつかなき針の目を忍んで繋つなぐ、細い糸の御蔭おかげである。この細いものを、するすると抜けば鹿児島と埼玉県の間には依然として何百里の山河さんがが横よこたわっている。齒を病やんだ事のないものに、齒の痛みを持って行くよりも、早く齒医者に馳かけつけるのが近道だ。そう痛がらんでもいいさと云われる病人は、けっして慰藉を受けたとは思うまい。

「君などは悲観する必要があるから結構だ」と、ビステキを半分で断念した高柳君は敷島をふかしながら、相手の顔を眺めた。相手は口をもがもがさせながら、右の手を首と共に左右に振ったのは、高柳君に同意を表しないと見える。

「僕が悲観する必要がない？ 悲観する必要があるとすると、つまりおめでたい人間と

云う意味になるね」

高柳君は覺えず、薄い唇を動かしかけたが、微かな漣は頬まで広がらぬ先に消えた。相手はなお言葉をつづける。

「僕だって三年も大学にいて多少の哲学書や文学書を読んではいけないか。こう見えても世の中が、どれほど悲觀すべきものであるかぐらいは知ってるつもりだ」

「書物の上でだろう」と高柳君は高い山から谷底を見下ろしたように云う。

「書物の上——書物の上では無論だが、實際だって、これでなかなか苦痛もあり煩悶もあるんだよ」

「だって、生活には困らないし、時間は充分あるし、勉強はしたいだけ出来るし、述作は思う通りにやれるし。僕に較べると君は実に幸福だ」と高柳君今度はさも羨ましそうに嘆息する。

「ところが裏面はなかなかそんな氣楽なんじゃないさ。これでもいろいろな心配があつて、いやになるのだよ」と中野君は強いて心配の所有權を主張している。

「そうかなあ」と相手は、なかなか信じない。

「そう君まで茶かしちゃ、いよいよつまらなくなる。実は今日あたり、君の所へでも出

掛けて、大に同情してもらおうかと思つていたところさ」

「訳をきかせなくっちゃ同情も出来ないね」

「訳はだんだん話すよ。あんまり、くさくさするから、こうやって散歩に来たくらいなものさ。ちつとは察するがいい」

高柳君は今度は公然とにやにやと笑つた。ちつとは察するつもりでも、察しようがないのである。

「そうして、君はまたなんで今頃公園なんか散歩しているんだね」と中野君は正面から高柳君の顔を見たが、

「や、君の顔は妙だ。日の射している右側の方は大變血色がいいが、影になつてゐる方は非常に色沢が悪い。奇妙だな。鼻を境に矛盾が睨めこをしている。悲劇と喜劇の仮面を半々につぎ合せたようだ」と息もつがず、述べ立てた。

この無心の評を聞いた、高柳君は心の秘密を顔の上で読まれたように、はつと思うと、右の手で額の方から額のあたりまで、ぐるりと撫で廻わした。こうして顔の上の矛盾をかき混ぜるつもりなのかも知れない。

「いくら天氣がよくつても、散歩なんかする暇はない。今日は新橋の先まで遺失品を探

がしに行つてその歸りがけにちよつとついだから、ここで休んで行こうと思つて来たのさ」と顔を攪き廻した手を顎の下へかつて依然として浮かぬ様子をする。悲劇の面と喜劇の面をまぜ返えたから通例の顔になるはずであるのに、妙に濁つたものが出来上つてしまった。

「遺失品で、何を落したんだい」

「昨日電車の中で草稿を失つて——」

「草稿？ そりや大変だ。僕は書き上げた原稿が雑誌へ出るまでは心配でたまらない。実際草稿なんてものは、吾々に取つて、命より大切なものだからね」

「なに、そんな大切な草稿でも書ける暇があるようだといんだけど——駄目だと自分を輕蔑したような口調で云う。

「じゃ何の草稿だい」

「地理教授法の訳だ。あしたまでに届けるはずにしてあるのだから、今なくなつちや原稿料も貰えず、またやり直さなくつちやならず、実に厭になつちまう」

「それで、探がしに行つても出て来ないのかい」

「来ない」

「どうしたんだろう」

「おおかた車掌が、うちへ持つて行つて、はたきでも拵こしらえたんだろう」

「まさか、しかし出なくっちゃ困るね」

「困るなあ自分の不注意と我慢するが、その遺失品係りの厭いやな奴やつだ事つて——実に不親切で、形式的で——まるで版行はんこうにおしたような事をぺらぺらと一通り述べたが以上、何を聞いても知りません知りませんで持ち切っている。あいつは廿世紀の日本人を代表している模範的人物だ。あすこの社長もきつとあんな奴やつに違ちがひない」

「ひどく癩しやくに障さわつたものだね。しかし世の中はその遺失品係りのようなものばかりじゃないからいいじゃないか」

「もう少し人間らしいのがいるかい」

「皮肉な事を云う」

「なに世の中が皮肉なのさ。今の世のなかは冷酷の競進きやうしん会かい見たようなものだ」と云いながら呑みかけの「敷島」を二階の欄干てすりから、下へ抛なげる途端とたんに、ありがとうと云う声が出て、ぬつと門口かどぐちを出た二人連ふたりづれの中折帽の上へ、うまい具合に燃殻もえがらが乗つかった。男は帽子から煙を吐いて得意になつて行く。

「おい、ひどい事をするぜ」と中野君が云う。

「なに過ちだ。あやまち——ありや、さっきの実業家だ。構うもんか抛ほうつて置け」

「なるほどさっきの男だ。何で今までぐずぐずしていたんだろう。下で球たまでも突いていたのか知らん」

「どうせ遺失品係りの同類だから何でもするだろう」

「そら気がついた——帽子を取つてはたいている」

「ハハハハ滑稽こっけいだ」と高柳君は愉快そうに笑った。

「随分人が悪いなあ」と中野君が云う。

「なるほど善くないね。偶然とは申しながら、あんな事で仇かたきを打つのは下等だ。こんな真似をして嬉しがるようでは文学士の価値ねうちもめちやめちやだ」と高柳君は瞬時にしてまた元の浮かぬ顔にかえる。

「そうさ」と中野君は非難するような賛成するような返事をする。

「しかし文学士は名前だけで、その実は筆耕ひつこうだからな。文学士にもなって、地理教授法の翻訳しんぱんの下働きをやつてるようじゃ、心細い訳わけだ。これでも僕が卒業したら、卒業したらって待つてくれた親もあるんだからな。考えると気の毒なものだ。この様子じゃい

つまで待つてくれたって仕方がない」

「まだ卒業したばかりだから、そう急に有名にはなれないさ。そのうち立派な作物さくぶつを出して、大に本領おほんを発揮する時に天下は我々のものとなるんだよ」

「いつの事やら」

「そう急せいたって、いけない。追々新陳代謝してくるんだから、何でも気を永くして尻を据すえてかからなくっちゃ、駄目だ。なに、世間じゃ追々我々の真価を認めて来るんだからね。僕なんぞでも、こうやって始終しじゅう書いていると少しは人の口に乗るからね」

「君はいいさ。自分の好きな事を書く余裕があるんだから。僕なんか書きたい事はいくらでもあるんだけど落ちついて述作なぞをする暇はとてもない。実に残念でたまらない。保護者でもあって、気楽に勉強が出来ると名作も出して見せるがな。せめて、何でもいいから、月々きまつて六十円ばかり取れる口があるといいのだけれども、卒業前から自活はしていたのだが、卒業してもやっぱりこんなに困難するだろうとは思わなかった」

「そう困難じゃ仕方がない。僕のうちの財産が僕の自由になると、保護者になってやるんだがな」

「どうか願います。——実に厭いやになってしまふ。君、今考えると田舎の中学の教師の口だつて、容易にあるもんじゃないな」

「そうだろうな」

「僕の友人の哲学科を出たものなんか、卒業してから三年になるが、まだ遊あそんでるぜ」
「そうかな」

「それを考えると、子供の時なんか、訳もわからずに悪い事をしたもんだね。もつとも今とその頃とは時勢が違ふから、教師の口も今ほど払底ふっていでなかったかも知れないが」

「何をしたんだい」

「僕の国の中学校に白井道也しらいどうやと云う英語の教師がいたんだがね」

「道也た妙な名だね。釜かまの銘めいにありそうじゃないか」

「道也どうやと読むんだか、何だか知らないが、僕は道也、道也と呼んだものだ。その道也先生がね——やっぱり君、文学士だぜ。その先生をとうとうみんなして追い出してしまった」

「どうして」

「どうしてつて、ただいじめて追い出しちまったのさ。なに良い先生なんだよ。人物や

何かは、子供だからまるでわからなかったが、どうも悪い人じゃなかったらしい……」

「それで、なぜ追い出したんだい」

「それがさ、中学校の教師なんて、あれでなかなか悪い奴がいるもんだぜ。僕らあ煽^{せん}動^{どう}されたんだね、つまり。今でも覚えているが、夜^よる十五六人で隊を組んで道也先生^{うち}の家の前へ行^うってワ^うーって呐喊^{とっかん}して二つ三つ石を投げ込んで来るんだ」

「乱暴だね。何だって、そんな馬鹿な真似^{まね}をするんだい」

「なぜだかわからない。ただ面白いからやるのさ。おそらく吾々の仲間でなぜやるんだか知^しってたものは誰もあるまい」

「気楽だね」

「実に気楽さ。知^しってるのは僕^{せんど}らを煽^{せん}動^{どう}した教師ばかりだろう。何でも生意氣^{なまいき}だからやれって云^いうのさ」

「ひどい奴だな。そんな奴が教師にいるかい」

「いるとも。相手が子供だから、どうしても云^いう事を聞^きくからかも知れないが、いるよ」

「それで道也先生どうしたい」

「辞職しちまつた」

「可哀想に」
かわいそう

「実に気の毒な事をしたもんだ。定めし転任先をさがす間活計に困つたろうと思つてね。今度逢つたら大に謝罪の意を表するつもりだ」
おおい

「今どこにいるんだい」

「どこにいるか知らない」

「じゃいつ逢うか知らないじゃないか」

「しかしいつ逢うかわからない。ことによると教師の口がなくて死んでしまったかも知れないね。——何でも先生辞職する前に教場へ出て来て云つた事がある」

「何て」

「諸君、吾々は教師のために生きべきものではない。道のために生きべきものである。道は尊いものである。この理窟がわからないうちは、まだ一人前になつたのではない。諸君も精出してわかるようにおなり」
たつと
りくつ

「へえ」

「僕らは不相変教場内でワーッと笑つたあね。生意氣だ、生意氣だつて笑つたあね。——」
あいかわらず

―どっちが生意気か分りやしない―

「随分田舎の学校などにや妙な事があるものだね」

「なに東京だって、あるんだよ。学校ばかりじゃない。世の中はみんなこれなんだ。つまらない」

「時にだいぶ長話しをした。どうだ君。これから品川の妙花園^{みょうかえん}まで行かないか」

「何しに」

「花を見にさ」

「これから帰って地理教授法を訳さなくっちゃならない」

「一日^{いちにち}ぐらい遊んだってよかろう。ああ云う美しい所へ行くと、好い心持ちになつて、翻訳もはかが行くぜ」

「そうかな。君は遊びに行くのかい」

「遊^{あそび}かたがたさ。あすこへ行つて、ちよつと写生して来て、材料にしようと思つてるんだがね」

「何の材料に」

「出来たら見せるよ。小説をかいているんだ。そのうちの一章に女が花園^{はなぞの}のなかに立つ

て、小さな赤い花を余念なく見詰めていると、その赤い花がだんだん薄くなってしまうに真白になってしまおうと云うところを書いて見たいと思うんだがね」

「空想小説かい」

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいような気持のするものが書きたい。うまく感じが出ればいいが。まあ出来たら読んでくれたまえ」

「妙花園なんぞ、そんな参考にやならないよ。それよりかうちへ帰ってホルマン・ハントの画でも見る方がいい。ああ、僕も書きたい事があるんだがな。どうしても時がない」

「君は全体自然がきらいだから、いけない」

「自然なんて、どうでもいいじゃないか。この痛切な二十世紀にそんな気楽な事が云つていられるものか。僕のは書けば、そんな夢見たようなものじゃないんだからな。奇麗でなくつても、痛くつても、苦しくつても、僕の内面の消息にどこか、触れていればそれで満足するんだ。詩的でも詩的でなくつても、そんな事は構わない。たとい飛び立つほど痛くつても、自分で自分の身体を切つて見て、なるほど痛いなと云うところを充分書いて、人に知らせてやりたい。呑気なものや気楽なものはどうてい夢にも想像し得ら

れぬ奥の方にこんな事実がある、人間の本体はここにあるのを知らないかと、世の道楽ものに教えて、おやそうか、おれは、まさか、こんなものとは思っていなかったが、云われて見るとなるほど一言ごひんもない、恐れ入ったと頭を下げさせるのが僕の願なんだ。君とはだいぶ方角が違う」

「しかしそんな文学は何だか心持ちがわるい。――そりや御随意だが、どうだい妙花園みょうかうえんに行く気はないかい」

「妙花園へ行くひまがあれば一頁ぺーじでも僕の主張をかくがなあ。何だか考えると身体がむずむずするようだ。実際こんなに呑氣のんきにして、生焼なまやきのビステッキなどを食っちゃいられないんだ」

「ハハハハまたあせる。いいじゃないか、さっきの商人見たような連中れんじゆうもいるんだから」

「あんなのがいるから、こっちはなお仕事がしたくなる。せめて、あの連中の十分一ぶの金と時があれば、書いて見せるがな」

「じゃ、どうしても妙花園は不賛成かね」

「遅くなるもの。君は冬服を着ているが、僕はいまだに夏服だから帰りに寒くなって風

でも引くといけない」

「ハハハハ妙な逃げ路を発見したね。もう冬服の時節だあね。着換えればいい事を。君は万事無精だよ」

「無精で着換えないんじゃない。ないから着換えないんだ。この夏服だって、まだ一文も払っていやしない」

「そうなのか」と中野君は氣の毒な顔をした。

午飯ひるめしの客は皆去り尽して、二人が椅子いすを離れた頃はところどころの卓布たくふの上に麵麩屑パンくずが淋しく散らばっていた。公園の中は最前よりも一層賑にぎやかである。ロハ台は依然として、どこの何某なにがしか知らぬ男と知らぬ女で占領されている。秋の日は赫かつとして夏服の背中を通す。

三

檜ひのきの扉とびらに銀のような瓦かわらを載せた門のを這入はいると、御影みかげの敷石に水を打って、斜ななめに十歩ばかり歩あゆませる。敷石の尽きた所に擦すり硝子ガラスの開き戸が左右から寂然じやくねんと鎖とぎされて、秋の

更くるに任すがごとく邸内は物静かである。

磨き上げた、柱の柱に象牙の臍をちよつと押すと、しばらくして奥の方から足音が近づいてくる。がちやと鍵をひねる。玄関の扉は左右に開かれて、下は鏡のようなたたきとなる。右の方に周囲一尺余の朱泥まがいの鉢があつて、鉢のなかには棕櫚竹が二三本靡くべき風も受けずに、ひそやかに控えている。正面には高さ四尺の金屏に、三条の小鍛冶が、異形のを相槌に、靈夢に叶う、御門の太刀を丁と打ち、丁と打っている。

取次に出たのは十八九のしとやかな下女である。白井道也と云う名刺を受取つたまま、あの若旦那様で？ と聞く。道也先生は首を傾けてちよつと考えた。若旦那にも大旦那にも中野と云う人に逢うのは今が始めてである。ことによるとまるで逢えないで帰るかも計られん。若旦那か大旦那かは逢つて始めてわかるのである。あるいは分らないで生涯それぎりになるかも知れない。今まで訪問に出懸けて、年寄か、小供か、跛か、眼つかちか、要領を得る前に門前から追い還された事は何遍もある。追い還されさえしなければ大旦那か若旦那かは問うところでない。しかし聞かれた以上はどつちか片づけなければならん。どうでもいい事を、どうでもよくないように決断しろと逼らるる事は賢者が愚物に対して払う租税である。

「大学を御卒業になった方の……」とまで云ったが、ことによると、おやじも大学を卒業しているかも知れんと心づいたから

「あの文学をおやりになる」と訂正した。下女は何とも云わずに御辞儀をして立つて行く。白足袋しろたびの裏だけが目立ってよごれて見える。道也先生の頭の上には丸く鉄を鑄い抜いた、かな灯籠とうろうがぶら下がっている。波に千鳥をすかして、すかした所に紙が張つてある。このなかへ、どうしたら灯ひがつけられるのかと、先生は仰向あおむいて長い鎖くさりを眺めながら考えた。

下女がまた出てくる。どうぞこちらへと云う。道也先生は親指の凹くぼんで、前緒まえおのゆるんだ下駄を立派な沓脱くつぬぎへ残して、ひよろ長い糸瓜へちまのようなからだを下女の後ろから運んで行く。

応接間は西洋式に出来ている。丸い卓テーブルには、薔薇ばらの花を模様もように崩くずした五六輪を、淡い色で織り出したテーブル掛かけを、雑作ぞうさもなく引き被かぶせて、末は同じ色合の絨毯じゅうたんと、続つづくがごとく、切れたるがごとく、波を描えがいて床ゆかの上に落ちてゐる。暖炉だんろは塞ふさいだままの一尺前に、二枚折にまいおりの小屏風こびょうぶを穴隠しに立ててある。窓掛は緞子どんすの海老茶色えびちやいろだから少々全体の装飾上調和を破るようだが、そんな事は道也先生の眼には入いらない。先生は生れてか

らいまだかつてこんな奇麗な室へ這入った事はないのである。

先生は仰いで壁間の額を見た。京の舞子が友禅の振袖に鼓を調べている。今打って、鼓から、白い指が弾き返されたばかりの姿が、小指の先までよくあらわれている。しかし、そんな事に氣のつく道也先生ではない。先生はただ氣品のない画を掛けたものだと思つたばかりである。向の隅にヌーボー式の書棚があつて、美しい洋書の一部が、窓掛の隙間から洩れて射す光線に、金文字の甲羅を干している。なかなか立派である。しかし道也先生これには毫も辟易しなかつた。

ところへ中野君が出てくる。紬の綿入に縮緬の兵子帯をぐるぐる巻きつけて、金縁の眼鏡越しに、道也先生をまぼしそうに見て、「や、御待たせ申しまして」と椅子へ腰をおろす。

道也先生は、あやしげな、銘仙の上を蔽うに黒木綿の紋付をもつてして、嘉平次平の下へ両手を入れたまま、

「どうも御邪魔をします」と挨拶をする。泰然たるものだ。

中野君は挨拶が済んでからも、依然としてまぼしそうにしていたが、やがて思い切つた調子で

「あなたが、白井道也とおっしゃるんで」と大なる好奇心をもって聞いた。聞かんでも名刺を見ればわかるはずだ。それをかように聞くのは世馴れぬ文学士だからである。

「はい」と道也先生は落ちついている。中野君のあては外れた。中野君は名刺を見た時はっと思つて、頭のなかは追い出された中学校の教師だけになっている。可哀想だと云う念頭に尾羽うち枯らした姿を目前に見て、あなたが、あの中学校で生徒からいじめられた白井さんですかと聞き糺したくてならない。いくら気の毒でも白井違いで気の毒がつたのでは役に立たない。気の毒がるためには、聞き糺すためには「あなたが白井道也とおっしゃるんで」と切り出さなくてはならなかった。しかしせっかくの切り出しようにも泰然たる「はい」のために無駄死をしまった。初心なる文学士は二の句をつぐ元氣も作略もないのである。人に同情を寄せたいと思うとき、向が泰然の具足で身を固めていては芝居にはならん。器用なものはこの泰然の一角を針で突き透しても思を遂げる。中野君は好人物ながらそれほど人を取り扱い得るほど世の中を知らない。

「実は今日御邪魔に上がったのは、少々御願があつて参つたのですが」と今度は道也先生の方から打つて出る。御願は同情の好敵手である。御願を持たない人には同情する張り合がない。

「はあ、何でも出来ます事なら」と中野君は快く承知した。

「実は今度江湖雜誌こうこざっしで現代青年の煩悶はんもんに対する解決と云う題で諸先生方の御高説を發表する計画がありまして、それで普通の大家ばかりでは面白くないと云うので、なるべく新しい方もそれぞれ訪問する訳になりましたので——そこで実はちよつと往つて来てくれと頼まれて来たのですが、御差支おさしつかえがなければ、御話を筆記して参りたいと思います」

道也先生は静かに懷ふから手帳と鉛筆を取り出した。取り出しはしたものの別に筆記したい様子もなければ強しいて話させたい景色けしきも見えない。彼はかかる愚ぐな問題を、かかる青年の口から解決して貰もらいたいとは考えていない。

「なるほど」と青年は、耀かがやく眼を挙あげて、道也先生を見たが、先生は宵越よいじしの麦酒ビールのごとく氣の抜けた顔をしているので、今度は「さよう」と長く引つ張つて下を向いてしまった。

「どうでしょう、何か御説はありますまいか」と催促を義理づくめにする。ありませんと云つたら、すぐ歸る氣かも知れない。

「そうですね。あつたつて、僕のようなものの云う事は雜誌へ載のせる価値はありませんよ」

「いえ結構です」

「全体どこから、聞いていらしたんです。あまり突然じゃ纏まとった話の出来るはずがな
いですから」

「御名前は社主が折々雑誌の上で拝見するそうで」

「いえ、どうしまして」と中野君は横を向いた。

「何でもよいですから、少し御話し下さい」

「そうですね」と青年は窓の外を見て躊躇ちゅうちよしている。

「せっかく来たものですか」

「じゃ何か話しましょう」

「はあ、どうぞ」と道也先生鉛筆を取り上げた。

「いったい煩悶と云う言葉は近頃だいぶはやるようだが、大抵は当座のもので、いわゆる三日坊主みっかぼうずのものが多し。そんな種類の煩悶は世の中が始まってから、世の中がなくなるまで続くので、ちつとも問題にはならないでしょう」

「ふん」と道也先生は下を向いたなり、鉛筆を動かしている。紙の上を滑すべらす音が耳立って聞える。

「しかし多くの青年が一度は必ず陥る、また必ず陥るべく自然から要求せられている深刻な煩悶が一つある。……」

鉛筆の音がする。

「それは何だと云うと——恋である……」

道也先生はぴたりと筆記をやめて、妙な顔をして、相手を見た。中野君は、今さら気がついたようにちよつとしよげ返ったが、すぐ気を取り直して、あとをつづけた。

「ただ恋と云うと妙に御聞きになるかも知れない。また近頃はあまり恋愛呼ばりをするのを人が遠慮するようであるが、この種の煩悶は大きな事実であつて、事実の前にはいかなるものも頭を下げねばならぬ訳だからどうする事も出来ないのである」

道也先生はまた顔をあげた。しかし彼の長い蒼白い相貌の一微塵^{いちみじん}だも動いておらんから、彼の心のうちは無論わからない。

「我々が生涯を通じて受ける煩悶のうちで、もっとも痛切なものと深刻な、またもっとも劇烈な煩悶は恋よりほかにないだろうと思うのです。それですね、こう云う強大な威力のあるものだから、我々が一度びこの煩悶の炎火のうちに入ると非常な変形をうけるのです」

「変形？　ですか」

「ええ形を変ずるのです。今まではただふわふわ浮いていた。世の中と自分の関係がよくわからないで、のんびんぐらりんに暮らしていたのが、急に自分が明瞭めいりょうになるんです」

「自分が明瞭とは？」

「自分の存在がです。自分が生きているような心持ちが確然と出てくるのです。だから恋は一方から云えば煩悶さんもんに相違ないが、しかしこの煩悶を経過しないと自分の存在を生涯さい悟さとる事が出来ないのです。この淨罪界に足を入れたものでなければ、つして天国へは登れまいと思うのです。ただ樂天だつてしようがない。恋の苦くるみを嘗なめて人生の意義を確かめた上の樂天でなくっちゃ、うそです。それだから恋の煩悶は、つして他の方法によつて解決されない。恋を解決するものは恋よりほかにないです。恋は吾人ごじんをして煩悶せしめて、また吾人をして解脱げだつせしむるのである。……」

「そのくらいなところで」と道也先生は三度目に顔を挙げた。

「まだ少しあるんですが……」

「承うけたまわるのはいいですが、だいたい多数の意見を載せるつもりですから、かえつてあとか

ら削除さくじょすると失礼になりますから」

「そうですか、それじゃそのくらいにして置きましよう。何だかこんな話をするのは始めてですから、さぞ筆記しにくかったでしょう」

「いいえ」と道也先生は手帳ていふを懐ふくへ入れた。

青年は筆記者が自分の説を聴いて、感心の余り少しは賛辞でも呈するかと思つたが、相手は例のごとく泰然としてただいいえと云つたのみである。

「いやこれは御邪魔をしました」と客は立ちかける。

「まあいいでしょう」と中野君はとめた。せめて自分の説を少々でも批評して行つて貰いたいのである。それでなくても、せんだつて日比谷で聞いた高柳君の事をちよつと好奇心から、あたつて見たいのである。一言いちごんにして云えば中野君はひまなのである。

「いえ、せっかくですが少々急ぎますから」と客はもう椅子いすを離れて、一步テールを退しりぞいた。いかにひまな中野君も「それでは」とついに降参して御辞儀おじぎをする。玄関まで送つて出た時思い切つて

「あなたは、もしや高柳周作たかやなぎしゅうさくと云う男を御存じじゃないですか」と念晴ねんばらしのため聞いて見る。

「高柳？　どうも知らんようです」と沓脱くつぬぎから片足をタタキへおろして、高い背を半分後ろへ振ねじ向けた。

「ことし大学を卒業した……」

「それじゃ知らん訳だ」と両足ともタタキの上へ運んだ。

中野君はまだ何か云おうとした時、敷石をがらと車の軋きしる音がして梶棒かじぼうは硝子ガラスの扉とびらの前にとまった。道也先生が扉を開く途端とたんに車上の人はひらり厚い雪駄せったを御影みかげの上に落した。五色の雲がわが眼を掠かすめて過ぎた心持ちで往来へ出る。

時計はもう四時過ぎである。深い碧みどりりの上へ薄いセピヤを流した空のなかに、はつきりせぬ鳶とびが一羽舞っている。雁かりはまだ渡つて来ぬ。向むかから袴はかまの股立ももだちを取った小供が唱歌うたを謡いながら愉快そうにあるいて来た。肩かたに担かついだ笹ささの枝には草の穂で作った梟ふくろうが踊りながらぶら下がって行く。おおかた雑子ぞうしヶ谷やへでも行つたのだらう。軒の深い菓物屋くだものやの奥の方に柿ばかりがあかるく見える。夕暮に近づくとは何となくうそ寒い。

薬王寺前に来たのは、帽子の底ひたしの下から往来の人の顔がしかと見分けのつかぬ頃である。三十三所じよと彫ほつてある石標せきひょうを右に見て、紺屋こんやの横町を半丁ほど西へ這入はいるとわが家の門口かどぐちへ出る、家のなかは暗い。

「おや御帰り」と細君が台所で云う。台所も玄関も大した相違のないほど小さな家である。

「下女はどうかへ行つたのか」と二畳の玄関から、六畳の座敷へ通る。

「ちよつと、柳町まで使に行きました」と細君はまた台所へ引き返す。

道也先生は正面の床の片隅に寄せてあつた、洋灯を取つて、椽側へ出て、手ずから掃除を始めた。何か原稿用紙のようなもので、油壺を拭き、ほやを拭き、最後に心の黒い所を好い加減になすくつて、丸めた紙は庭へ棄てた。庭は暗くなつて様子が頓とわからない。

机の前へ坐つた先生は燐寸を擦つて、しゅつと云う間に火をランプに移した。室はたちまち明かになる。道也先生のために云えばむしろ明かるくならぬ方が増しである。床はあるが、言訳ばかりで、現に幅も何も懸つておらん。その代り累々と書物やら、原稿紙やら、手帳やらが積んである。机は白木の三宝を大きくしたくらいな単簡なもので、インキ壺と粗末な筆硯のほかには何物をも載せておらぬ。装飾は道也先生にとって不要であるのか、または必要でもこれに耽る余裕がないのかは疑問である。ただ道也先生がこの一点の温気なき陋室に、晏如として筆硯を呵するの勇氣あるは、外部より見て争

うべからざる事実である。ことによると先生は装飾以外のあるものを目的にして、生活しているのかも知れない。ただこの争うべからざる事実を確めれば、確かめるほど細君は不愉快である。女は装飾をもつて生れ、装飾をもつて死ぬ。多数の女はわが運命を支配する恋さえも装飾視して憚^{はば}からぬものだ。恋が装飾ならば恋の本尊たる愛人は無論装飾品である。否^{いな}、自己自身すら装飾品をもつて甘んずるのみならず、装飾品をもつて自己を目^{もく}してくれぬ人を評して馬鹿と云う。しかし多数の女はしかく人世を觀^{かん}ずるにもかかわらず、しかく觀ずるとはけつして思わない。ただ自己の周囲を纏綿^{てんめん}する事物や人間がこの装飾用の目的に叶^{かな}わぬを発見するとき、何となく不愉快を受ける。不愉快を受けると云うのに周囲の事物人間が依然として旧態をあらためぬ時、わが眼に映ずる不愉快を左右前後に反射して、これでも改めぬかと云う。ついにはこれでもか、これでもかと念入りの不愉快を反射する。道也の細君がここまで進歩しているかは疑問である。しかし普通一般の女性であるからには装飾気なきこの空氣のうちに生息^{せいそく}する結果として、自然この方向に進行するのが順当であらう。現に進行しつつあるかも知れぬ。

道也先生はやがて懷^ふから例の筆記帳を出して、原稿紙の上へ写し始めた。袴^{はかま}を着けたままである。かしこまったままである。袴を着けたまま、かしこまったまま、中野輝^{なかのきい}

一の恋愛論を筆記している。恋とこの室、恋とこの道也とはどうい調和しない。道也は何と違って浄書しているかしらん。人は様々である、世も様々である。様々の世に、様々の人が動くのもまた自然の理である。ただ大きく動くものが勝ち、深く動くものが勝たねばならぬ。道也は、あの金縁の眼鏡を掛けた恋愛論よりも、小さくかつ浅いと自覚して、かく慎重に筆記を写し直しているのであろうか。床の後ろで※（虫十車）が鳴いている。

細君が襖をすうと開けた。道也は振り向きもしない。「まあ」と云ったなり細君の顔は隠れた。

下女は帰ったようである。煮豆が切れたから、てつか味噌を買って来たと云っている。豆腐が五厘高くなつたと云っている。裏の専念寺で夕の御務めをかあんかあんやつている。

細君の顔がまた襖の後ろから出た。

「あなた」

道也先生は、いつの間にやら、筆記帳を閉じて、今度はまた別の紙へ、何か熱心に認めている。

「あなた」と妻君は二度呼んだ。

「何だい」

「御飯です」

「そうか、今行くよ」

道也先生はちよつと細君と顔を合せたぎり、すぐ机へ向つた。細君の顔もすぐ消えた。台所の方でくすくす笑う声がある。道也先生はこの一節をかき終るまでは飯も食いたくないのだろう。やがて句切りのよい所へ来たと見えて、ちよつと筆を擱いて、傍へ積んだ草稿をはぐつて見て「二百三十一頁」と独語した。著述でもしていると見える。立つて次の間へ這入る。小さな長火鉢に平鍋がかかつて、白い豆腐が煙りを吐いて、ぷるぷる顫えている。

「湯豆腐かい」

「はあ、何にもなくて、御氣の毒ですが……」

「何、なんでもいい。食つてさえいれば何でも構わない」と、膳にして重箱をかねたるごとき四角なものの前へ坐つて箸を執る。

「あら、まだ袴を御脱ぎなさないの、随分ね」と細君は飯を盛った茶碗を出す。

「忙^{いそ}がしいものだから、つい忘れた」

「求めて、忙^{おも}がしい思^{おも}をしていらっしやるのだから、……」と云ったぎり、細君は、湯豆腐の鍋^{なべ}と鉄瓶^{てつびん}とを懸^かけ換^かえる。

「そう見えるかい」と道也先生は存外平気である。

「だって、楽で御金の取れる口は断っておしまいなすって、忙^{いそ}がしくって、一文にもならない事ばかりなさるんですもの、誰^{たれ}だって酔興^{すいきょう}と思^{おも}いますわ」

「思^{おも}われてもしようがない。これがおれの主義^{しゆぎ}なんだから」

「あなたは主義^{しゆぎ}だからそれでいいでしょうさ。しかし私^{わたくし}は……」

「御前は主義^{しゆぎ}が嫌^{きら}だと云うのかね」

「嫌^{すき}も好^{すき}もないんですけれども、せめて——人並^{ひとなみ}には——なんぼ私^{わたし}だって……」

「食^くえさえすればいいじゃないか、贅沢^{ぜいたく}を云^いや誰^{たれ}だって際限^{さいげん}はない」

「どうせ、そうでしょう。私^{わたし}なんざどんなになっても御構^{おかま}いなすっちゃ下^{くだ}さらないのでしよう」

「このてっか味噌^{みそ}は非常に辛^{から}いな。どこで買^かって来^きたのだ」

「どこですか」

道也先生は頭をあげて向の壁を見た。鼠色の寒い色の上に大きな細君の影が写っている。その影と妻君とは同じように無意義に道也の眼に映じた。

影の隣りに糸織かとも思われる、女の晴衣が衣紋竹につるしてかけてある。細君のものにしては少し派出過ぎるが、これは多少景気のいい時、田舎で買ってやったものだと今だに記憶している。あの時分は今とはだいぶ考えも違っていた。己れと同じような思想やら、感情やら持っているものは珍らしくあるまいと信じていた。したがって文筆の力で自分から卒先して世間を警醒しようと云う気にもならなかった。

今はまるで反対だ。世は名門を謳歌する、世は富豪を謳歌する、世は博士、学士までも謳歌する。しかし公正な人格に逢うて、位地を無にし、金銭を無にし、もしくはその学力、才芸を無にして、人格そのものを尊敬する事を解しておらん。人間の根本義たる人格に批判の標準を置かずして、その上皮たる附属物をもってすべてを律しようとする。この附属物と、公正なる人格と戦うとき世間は必ず、この附属物に雷同して他の人格を蹂躪せんと試みる。天下一人の公正なる人格を失うとき、天下一段の光明を失う。公正なる人格は百の華族、百の紳商、百の博士をもつてするも償いがたきほど貴きものである。われはこの人格を維持せんがために生れたるのほか、人世において何らの意義

をも認め得ぬ。寒に衣し、餓に食するはこの人格を維持するの便法に過ぎぬ。筆を呵し硯を磨するのまたこの人格を他の面上に貫徹するの方策に過ぎぬ。――これが今の道也の信念である。この信念を抱いて世に処する道也は細君の御機嫌ばかり取つてはおれぬ。

壁に掛けてあつた小袖を眺めていた道也はしばらくして、夕飯を済ましながら、「どこぞへ行つたのかい」と聞く。

「ええ」と細君は二字の返事を与えた。道也は黙つて、茶を飲んでゐる。末枯るる秋の時節だけにすこぶる閑静な問答である。

「そう、べんべんと真田の方を引つ張つとく訳にも行きませず、家主の方もどうかしなければならず、今月の末になると米薪の払でまた心配しなくっちゃありませんから、算段に出掛けたんです」と今度は細君の方から切り出した。

「そうか、質屋へでも行つたのかい」

「質に入れるようなものは、もうありやしませんわ」と細君は恨めしそうに夫の顔を見る。

「じゃ、どこへ行つたんだい」

「どこって、別に行く所ありませんから、御兄おあにいさんの所へ行きました」

「兄この所？ 駄目だめだよ。兄あにいの所なんぞへ行つたって、何になるものか」

「そう、あなたは、何でも始から、けなしておしまいなさるから、よくないんです。いくら教育が違ふからって、氣性きしょうが合わないからって、血を分けた兄弟じゃありませんか」

「兄弟は兄弟さ。兄弟でないとは云わん」

「だからさ、膝ひざとも談合と云うじゃありませんか。こんな時には、ちつと相談にいらつしやるがいいじゃありませんか」

「おれは、行かんよ」

「それが瘦我やせがまん慢ですよ。あなたはそれが癖なんですよ。損じゃあ、ありませんか、好んで人に嫌きらわれて……」

道也先生は空然くうぜんとして壁に動く細君の影を見ている。

「それで才覚が出来たのかい」

「あなたは何でも一足飛いっそくとびね」

「なにが」

「だって、才覚が出来る前にはそれぞれ魂胆こんたんもあれば工面くめんもあるじゃありませんか」

「そうか、それじゃ最初から聞き直そう。で、御前が兄のうちへ行つたんだね。おれに内所ないしょで」

「内所だって、あなたのためじゃありませんか」

「いいよ、ためがいいよ。それから」

「で御兄おあにいさんに、御目に懸かつていろいろ今までの御無沙汰ごぶさたの御詫おわびやら、何やらして、それから一部始終いちぶしじゆうの御話をしたんです」

「それから」

「すると御兄おあにいさんが、そりゃ御前には大変気の毒だって大変私わたくしに同情して下さって：

…

「御前に同情した。ふうん。——ちよつとその炭取を取れ。炭をつがないと火種ひだねが切れ
る」

「で、そりゃ早く整理しなくっちゃ駄目だ。全体なぜ今まで抛ほうつて置いたんだっておつ
しやるんです」

「旨い事うまいことを云わあ」

「まだ、あなたは御兄おにいさんを疑っていらつしやるのね。罰があたりますよ」

「それで、金でも貸したのかい」

「ほらまた一足飛いっそくとびをなさる」

道也先生は少々おかしくなったと見えて、にやりと下を向きながら、黒く積んだ炭を吹き出した。

「まあどのくらいあれば、これまでの穴が奇麗きれいに埋うまるのかと御聞きになるから、——よつぽど言い悪にくかったんですけれども——とうとう思い切つてね……」でちよつと留めた。道也はしきりに吹いている。

「ねえ、あなた。とうとう思い切つてね——あなた。聞いていらつしやらないの」

「聞きいてるよ」と赫かっき気で赤くなつた顔をあげた。

「思い切つて百円ばかりと云つたの」

「そうか。兄は驚おどろろいたろう」

「そうしたらね。ふうんて考えて、百円と云う金は、なかなか容易に都合がつく訳のものじゃない……」

「兄の云いそうな事だ」

「まあ聞いていらつしやい。まだ、あとが有るんです。——しかし、ほかの事とは違うから、是非なければ困ると云うならおれが保証人になって、人から借りてやってもいいって仰しやるんです」

「あやしいものだ」

「まあさ、しまいまで御聞きなさい。——それで、ともかくも本人に逢つて篤と了簡を聞いた上にしようと云うところまでに漕ぎつけて来たのです」

細君は大功名をしたように頬骨の高い顔を持ち上げて、夫を覗き込んだ。細君の眼つきが云う。夫は意気地なしである。終日終夜、机と首つ引をして、兀々と出精しながら、妻と自分を安らかに養うほどの働きもない。

「そうか」と道也は云つたぎり、この手腕に対して、別段に感謝の意を表しようともせぬ。

「そうかじゃ困りますわ。私がここまで拵えたのだから、あとは、あなたが、どうとも為さなくなつちゃあ。あなたの楯のとりようでせつかくの私の苦心も何の役にも立たなくなりますわ」

「いいさ、そう心配するな。もう一カ月もすれば百や貳百の金は手に這入る見込がある

から」と道也先生は何の苦もなく云つて退けた。

江湖雜誌の編輯で二十円、英和字典の編纂で十五円、これが道也のきまつた収入である。但しこのほかに仕事はいくらでもする。新聞にかく、雑誌にかく。かく事においては毎日毎夜筆を休ませた事はないくらいである。しかし金にはならない。たまさか二円、三円の報酬が彼の懷に落つる時、彼はかえつて不思議に思うのみである。

この物質的に何らの功能もない述作的労力の裡には彼の生命がある。彼の気魄が滴々の墨汁と化して、一字一画に満腔の精神が飛動している。この断篇が読者の眼に映じた時、瞳裏に一道の電流を呼び起して、全身の骨肉が刹那に震えかしと念じて、道也は筆を執る。吾輩は道を載す。道を遮ぎるものは神といえども許さずと誓つて紙に向う。誠は指頭より迸つて、尖る毛穎の端に紙を焼く熱気あるがごとき心地にて句を綴る。白紙が人格と化して、淋漓として飛騰する文章があるとすれば道也の文章はまさにこれである。されども世は華族、紳商、博士、学士の世である。附属物が本体を踏み潰す世である。道也の文章は出るたびに黙殺せられている。妻君は金にならぬ文章を道楽文章と云う。道楽文章を作るものを意気地なしと云う。

道也の言葉を聞いた妻君は、火箸を灰のなかに刺したまま、

「今でも、そんな御金が這入る見込があるんですか」と不思議そうに尋ねた。

「今は昔より下落したと云うのかい。ハハハハハ」と道也先生は大きな声を出して笑った。妻君は毒気を抜かれて口をあける。

「どうりや一勉強やろうか」と道也は立ち上がる。その夜彼は彼の著述人格論を二百五十頁までかいた。寝たのは二時過である。

四

「どこへ行く」と中野君が高柳君をつらまえた。所は動物園の前である。太い桜の幹が黒ずんだ色のなかから、銀のような光りを秋の日に射返して、梢を離れる病葉は風なき折々行人の肩にかかる。足元には、ここかしこに枝を辞したる古い奴ががさついている。

色は様々である。鮮血を日に曝して、七日の間日ごとにその変化を葉裏に印して、注意なく一枚のなかに畳み込めたら、こんな色になるだろうと高柳君はさつきから眺めていた。血を連想した時高柳君は腋の下から何か冷たいものが襯衣に伝わるような気分が

した。ごほんと取り締りのない咳を一つする。

形も様々である。火にあぶったかき餅の状は千差万別であるが、我も我もとみんな反り返る。桜の落葉もがさがさに反り返って、反り返ったまま吹く風に誘われて行く。水気のないものには未練も執着もない。飄々としてわが行末を覚束ない風に任せて平気なのは、死んだ後の祭りに、から騒ぎにはしゃぐ了簡かも知れぬ。風にめぐる落葉と攫われて行くかなな屑とは一種の氣狂である。ただ死したるものの氣狂である。高柳君は死と氣狂とを自然界に点綴した時、瘡せた両肩を聳やかして、またごほんと云ううつろな咳を一つした。

高柳君はこの瞬間に中野君からつまえられたのである。ふと氣がついて見ると世は太平である。空は朗らかである。美しい着物をきた人が続々行く。相手は薄羅紗の外套に恰好のいい姿を包んで、願の下に真珠の留針を輝かしている。――高柳君は相手の姿を見守ったなり黙っていた。

「どこへ行く」と青年は再び問うた。

「今図書館へ行った帰りだ」と相手はようやく答えた。

「また地理学教授法じゃないか。ハハハハ。何だか不景気な顔をしているね。どうかし

たかい」

「近頃は喜劇の面をどこかへ遺失してしまった」

「また新橋の先まで探がしに行つて、拳突を喰つたんじゃないか。つまらない」

「新橋どころか、世界中探がしてあるいても落ちていそうもない。もう、御やめだ」

「何を」

「何でも御やめだ」

「万事御やめか。当分御やめがよからう。万事御やめにして僕といっしょに来たまえ」

「どこへ」

「今日はそこに慈善音楽会があるんで、切符を二枚買わされたんだが、ほかに誰も行き手が無いから、ちようどいい。君行きたまえ」

「いらない切符などを買うのかい。もつたいない事をするんだな」

「なに義理だから仕方がない。おやじが買ったんだが、おやじは西洋音楽なんかわからないからね」

「それじゃ余つた方を送つてやればいいのに」

「実は君の所へ送ろうと思つたんだが……」

「いいえ。あすこへさ」

「あすことは。——うん。あすこか。何、ありや、いいんだ。自分でも買ったんだ」

高柳君は何とも返事をしないで、相手を真正面から見ている。中野君は少々恐縮の微笑を洩らし、右の手に握ったままの、山羊の手袋で外套の胸をぴしゃぴしゃ敲き始めた。

「穿めもしない手袋を握ってあるのは何のためだい」

「なに、今ちよつと隠袋から出したんだ」と云いながら中野君は、すぐ手袋をかくしの裏に収めた。高柳君の癩癧はこれで少々治まったようである。

ところへ後ろからエーイと云う掛声がして蹄の音が風を動かしてくる。兩人は足早に道傍へ立ち退いた。黒塗のランドーの蓋を、秋の日の暖かきに、払い退けた、中には絹帽が一つ、美しい紅いの日傘が一つ見えながら、兩人の前を通り過ぎる。

「ああ云う連中が行くのかい」と高柳君が顎で馬車の後ろ影を指す。

「あれは徳川侯爵だよ」と中野君は教えた。

「よく、知ってるね。君はあの人の家来かい」

「家来じゃない」と中野君は真面目に弁解した。高柳君は腹のなかでまたちよつと愉快

を覚えた。

「どうだい行こうじゃないか。時間がおくれるよ」

「おくれると逢えないと云うのかね」

中野君は、すこし赤くなった。怒ったのか、弱点をつかれたためか、恥ずかしかったのか、わかるのは高柳君だけである。

「とにかく行こう。君はなんでも人の集まる所やなにかを嫌ってばかりいるから、一人坊^ぼつちになつてしまふんだよ」

打つものは打たれる。参るのは今度こそ高柳君の番である。一人坊^ぼつちと云う言葉を聞いた彼は、耳がしいんと鳴つて、非常に淋しい氣持がした。

「いやかい。いやなら仕方がない。僕は失敬する」

相手は同情の笑を湛^{たた}えながら半歩踵^{くびす}をめぐらしかけた。高柳君はまた打たれた。

「いこう」と單簡^{たんかん}に降参する。彼が音楽会へ臨むのは生れてから、これが始めてである。

玄關にかかった時は受付が右へ左りへの案内で忙殺^{ぼうさつ}されて、接待掛りの胸につけた、青いリボンを見失うほど込み合っていた。突き当りを右へ折れるのが上等で、左りへ曲

がるのが並等である。下等はないそうだと。中野君は無論上等である。高柳君を顧みながら、こつちだよと、さも物馴れたさまに云う。今日に限って、特別に下等席を設けて貰って、そこへ自分だけ這入って聴いて見たいと一人坊っちの青年は、中野君のあとをつきながら階段を上ぼりつつ考えた。己れの右を上る人も、左りを上る人も、またあとからぞろぞろついて来るものも、皆異種類の動物で、わざと自分を包围して、のつぴきさせず二階の大広間へ押し上げた上、あとから、慰み半分に手を拍って笑う策略のように思われた。後ろを振り向くと、下から緑りの滴たる束髪の脳巔が見える。コスメチックで奇麗な一直線を七分三分の割合に鍊り出した頭蓋骨が見える。これらの頭が十も二十も重なり合って、もう高柳周作は一步でも退く事はならぬとせり上がってくる。

樂堂の入口を這入ると、霞に酔うた人のようにぼうつとした。空を隠す茂みのなかを通り抜けて頂に攀じ登った時、思いも寄らぬ、眼の下に百里の眺めが展開する時の感じはこれである。演奏台は遙かの谷底にある。近づくためには、登り詰めた頂から、規則正しく排列された人間の間を一直線に縫うがごとくに下りて、自然と逼る播鉢の底に近寄らねばならぬ。播鉢の底は半円形を劃して空に向って広がる内側面には人間の塀が段々に横輪をえがいている。七八段を下りた高柳君は念のために振り返って播鉢の側面

を天井^{てんじょう}まで見上げた時、目がちらちらしてちよつと留つた。excuse me と云つて、大きな異人が、高柳君を蔽^{おほ}いかぶせるようにして、一段下へ通り抜けた。駝鳥^{だちよう}の白い毛が鼻の先にふらついて、品のいい香りがふんとする。あとから、脳巔^{のうてん}の禿^はげた大男が絹帽^{シルクハット}を大事そうに抱えて身を横にして女につきながら、二人を擦^すり抜ける。

「おい、あすこに椅子が二つ空^あいている」と物馴^{ものな}れた中野君は階段を横へ切れる。並んでいる人は席を立つて二人を通す。自分だけであつたら、誰も席を立つてくれるものはあるまいと高柳君は思った。

「大変な人だね」と椅子に腰をおろしながら中野君は満場を見廻わす。やがて相手の服装に気がついた時、急に小声になつて、

「おい、帽子をとらなくっちゃ、いけないよ」と云う。

高柳君は卒然として帽子を取つて、左右をちよつと見た。三四人の眼が自分の頭の上に注^{そそ}がれていたのを發見した時、やつぱり包圍攻撃だなと思った。なるほど帽子を被^{かぶ}つていたものはこの広い演奏場に自分一人である。

「外套^{がいとう}は着^きていてもいいのか」と中野君に聞いて見る。

「外套は構^{かま}わないんだ。しかしあつ過ぎるから脱^{だつ}ごうか」と中野君はちよつと立ち上

がつて、外套の襟を三寸ばかり颯と返したら、左の袖がするりと抜けた、右の袖を抜くとき、領のあたりをつまんだと思つたら、裏を表てに、外套ははや畳まれて、椅子の背中を早くも隠した。下は仕立ておろしのフロックに、近頃流行る白いスリッパが胴衣の胸開を沿うて細い筋を奇麗にあらわしている。高柳君はなるほどいい手際だと羨ましく眺めていた。中野君はどう云ものか容易に坐らない。片手を椅子の背に凭たせて、立ちながら後ろから、左右へかけて眺めている。多くの人の視線は彼の上に落ちた。中野君は平気である。高柳君はこの平気をまた羨ましく感じた。

しばらくすると、中野君は千以上陳列せられたる顔のなかで、ようやくあるものを物色し得たごとく、豊かなる双頬に愛嬌の渦を浮かして、軽く何人にか会釈した。高柳君は振り向かざるを得ない。友の挨拶はどの辺に落ちたのだろうか、こそばゆくも首を振じ向けて、斜めに三段ばかり上を見ると、たちまち目つかった。黒い髪のただ中に黄の勝った大きなリボンの蝶を颯とひらめかして、細くうねる頸筋を今真直に立て直す女の姿が目つかった。紅いは眼の縁を薄く染めて、潤った眼睫の奥から、人の世を夢の底に吸い込むような光りを中野君の方に注いでいる。高柳君はすわやと思つた。

わが穿く袴は小倉である。羽織は染めが剥げて、濁った色の上に垢が容赦なく日光を

反射する。湯には五日前に這入^{はい}ったぎりだ。襯衣^{シヤツ}を洗わざる事は久しい。音楽会と自分とはとうてい両立するものでない。わが友と自分とは？——やはり両立しない。友のハイカラ姿とこの魔力ある眼の所有者とは、千里を隔てても無線の電気がかかるべく作られている。この一堂の裡^{うち}に綺羅^{きら}の香りを嗅^かぎ、和楽^{あたら}の温かみを吸うて、落ち合うからは、二人の魂は無論の事、溶^とけて流れて、かき鳴らす箏^{こと}の線^{いと}の細きうちにも、めぐり合わねばならぬ。演奏会は数千の人を集めて、数千の人はことごとく双手^{そうしゅ}を挙げながらこの二人を歓迎している。同じ数千の人はことごとく五指^しを弾^{はじ}いて、われ一人を排斥している。高柳君はこんな所へ来なければよかったと思った。友はそんな事を知りようがない。

「もう時間だ、始まるよ」と活版に刷った曲目を見ながら云う。

「そうか」と高柳君は器械的に眼を活版の上に落した。

一、バイオリン、セロ、ピアノ合奏とある。高柳君はセロの何物たるを知らぬ。二、ソナタ……ベートーベン作とある。名前だけは心得ている。三、アダジヨ……パァージャル作とある。これも知らぬ。四、と読みかけた時拍手^{はくしゅ}の音が急に梁^{はり}を動かして起った。演奏者はすでに舞台上に現われている。

やがて三部合奏曲は始まった。満場は化石したかのごとく静かである。右手の窓の外に、高い樅もみの木が半分見えて後ろは遐はるかの空の国に入る。左手の碧みどりりの窓掛けを洩もれて、澄み切った秋の日が斜ななめに白い壁を明らかに照らす。

曲は静かなる自然と、静かなる人間のうちに、快よく進行する。中野は絢爛けんらんたる空氣の振動を鼓膜こまくに聞いた。声にも色があると嬉うれしく感じている。高柳は樅の枝を離るとぎる鳶とびの舞う様さまを眺めていた。鳶が音楽に調子を合せて飛んでいる妙だなど思った。

拍手がまた盛さかんに起る。高柳君ははっと気がついた。自分はやはり異種類の動物のなかに一人坊ひとりばつちでおったのである。隣りを見ると中野君は一生懸命に敲たたいている。高い高い鳶とびの空から、己おのれをこの窮屈きゆうくつな谷底に呼び返したものの一人は、われを無理矢理にこへ連れ込んだ友達である。

演奏は第二に移る。千余人の呼吸は一度にやむ。高柳君の心はまた豊かになった。窓の外を見ると鳶はもう舞っておらぬ。眼を移して天井てんじやうを見る。周囲一尺もあろうと思われる梁の六角形に削けずられたのが三本ほど、樂堂を豎たてに貫ぬいている、後ろはどこまで通っているか、頭かしらを回めぐらさないから分らぬ。所々に模様くずに崩した草花が、長い蔓つると共に六角を絡からんでいる。仰向あおむいて見ていると広い御寺のなかへでも這入はいった心持になる。そ

うして黄色い声や青い声が、梁を纏う唐草のように、纏れ合つて、天井から降つてくる。高柳君は無人の境に一人坊つちで佇んでいる。

三度目の拍手が、断わりもなくまた起る。隣りの友達は一倍增けたたましい敲き方をする。無人の境におつた一人坊つちが急に、霰のごとき拍手のなかに包囲された一人坊つちとなる。包囲はなかなか已まぬ。演奏者が闇を排してわが室に入らんとする間際になおなお烈しくなつた。ヴァイオリンを温かに右の腋下に護りたる演奏者は、ぐるりと戸側に体を回らして、薄紅葉を点じたる裾模様を台上に動かして来る。狂うばかりに咲き乱れたる白菊の花束を、飄える袖の影に受けとつて、なよやかなる上軀を聴衆の前に、少しかがめたる時、高柳は感じた。——この女の樂を聴いたのは、聴かされたのではない。聴かさぬと云うを、ひそかに忍び寄りて、偷み聴いたのである。

演奏は喝采のどよめきの静まらぬうちにまた始まる。聴衆はとつさの際にことごとく死んでしまう。高柳君はまた自由になつた。何だか広い原にただ一人立つて、遙かの向うから熟柿のような色の暖かい太陽が、のつと上つてくる心持ちがする。小供のうちはこんな感じがよくあつた。今はなぜこう窮屈になつたろう。右を見ても左を見ても人は我を擯斥しているように見える。たつた一人の友達さえ肝心のところで無残の手をぱち

ぱちたたく。たよる所がなければ親の所へ逃げ帰れと云う話もある。その親があれば始からこんなにはならなかったろう。七つの時おやじは、どこかへ行つたなり帰つて来ない。友達はそのから自分と遊ばなくなつた。母に聞くと、おとっさんは今に帰る今に帰ると云つた。母は帰らぬ父を、帰ると云つてだましたのである。その母は今でもいる。住み古るふるした家を引き払つて、生れた町から三里の山奥に一人ひとり佗たびしく暮らしている。卒業をすれば立派になつて、東京へでも引き取るのが子の義務である。逃げて帰れば親子共とも餓えて死ななければならん。——たちまち拍手の声が一面に湧わき返る。

「今のは面白かつた。今までのうち一番よく出来た。非常に感じをよく出す人だ。——どうだい君」と中野君が聞く。

「うん」

「君面白くないか」

「そうさな」

「そうさなじゃ困つたな。——おいあすこの西洋人の隣りにいる、細こまかい友禪ゆうぜんの着物を着ている女があるだろう。——あんな模様が近頃流行はやるんだ。派出はでだろう」

「そうかなあ」

「君はカラー・センスのない男だね。ああ云う派出な着物は、集会の時や何かにはごくいいのだね。遠くから見て、見醒めがしない。うつくしくつていい」

「君のあれも、同じようなのを着ているね」

「え、そうかしら、何、ありや、いい加減かげんに着ているんだろう」

「いい加減に着ていれば弁解になるのかい」

中野君はちよつと会話をやめた。左の方に鼻眼鏡はなめがねをかけて揉上もみあげを容赦ようしやなく、耳の上で剃り落した男が帳面を出してしきりに何か書いている。

「ありや、音楽の批評でもする男かな」と今度は高柳君が聞いた。

「どれ、——あの男か、あの黒服を着た。なあに、あれはね。画工えかきだよ。いつでも来る

男だがね、来るたんびに写生帖を持って来て、人の顔を写している」

「断わりなしにか」

「まあ、そうだろう」

「泥棒だね。顔泥棒だ」

中野君は小さい声でくくと笑った。休憩時間は十分ぶんである。廊下へ出るもの、喫煙に行くもの、用を足たして帰るもの、が高柳君の眼に写る。女は小供の時見た、豊国とよくにの田舎いなか

源氏げんじを一枚一枚はぐつて行く時の心持である。男は芳年よしとしの書いた討ち入り当夜の義士が動いてるようだ。ただ自分が彼らの眼にどう写るであらうかと思うと、早く帰りたくなる。自分の左右前後は活動している。うつくしく活動している。しかし衣食のために活動しているのではない。娯楽のために活動している。胡蝶こちょうの花に戯たわむるがごとく、浮藻うきもの漣さざなみに靡なびくがごとく、実用以上の活動を示している。この堂に入るものは実用以上に余裕のある人でなくてはならぬ。

自分の活動は食うか食わぬかの活動である。和煦わくの作用ではない肅殺しゅくさつの運行である。儼げんたる天命に制せられて、無条件に生を享うけたる罪業ざいごうを償つぐなわんがために働らくのである。頭から云えば胡蝶のごとく、かく翩へん々たる公衆のいづれを捕とらえ来きたつて比較されても、少しも恥はづかしいとは思わぬ。云いたき事、云うて人が点頭うなずく事、云うて人が尊たつとぶ事はないから云わぬのではない。生活の競争にすべての時間を捧ささげて、云うべき機会を与えてくれぬからである。吾われが云いたくて云われぬ事は、世が聞きたくても聞かれぬ事は、天がわが手を縛ばくするからである。人がわが口を箝かんするからである。巨万の富をわれに与えて、一銭も使うなかれと命ぜられたる時は富なき昔むかしの心安きに帰る能あたわずして、命めいを下せる人を逆さかしまに詛のろわんとす。われは呪のろい死にに死なねばならぬか。――た

ちまち咽喉のどが塞ふさがつて、ごほんごほんと咳せき入る。袂たもとからハンケチを出して痰たんを取る。
買った時の白いのが、妙な茶色に変わっている。顔を挙げると、肩から観世かんぜよりのように
細い金鎖きんぐさりを懸かけて、朱に黄まじを交えた厚板の帯の間に時計を隠した女が、列のはずれに
立って、中野君に挨拶あいさつしている。

「よう、いらっしやいました」と可愛らしい二重瞼ふたえまがたを細めに云う。

「いや、だいぶ盛会ですね。冬田さんは非常な出来でしたな」と中野君は半身を、女の方へ向けながら云う。

「ええ、大喜びで……」と云い捨てて下りて行く。

「あの女を知ってるかい」

「知るものかね」と高柳君は拳突けんつを喰わす。

相手は驚ろいて黙ってしまった。途端とたんに休憩後の演奏は始まる。「四葉よつばの苜蓿花うまごやし」とか云うものである。曲の続く間は高柳君はうつらうつらと聴いている。ぱちぱちと手が鳴ると熱病の人が夢から醒さめたように我に帰る。この過程を二三度繰り返して、最後の幻覚から喚よび醒よまされた時は、タンホイゼルのマーチで銅鑼どらを敲たたき大喇叭おおらっぱを吹くところであつた。

やがて、千余人の影は一度に動き出した。二人の青年は揉まれながらに門を出た。日はようやく暮れかかる。図書館の横手に聳える松の林が緑りの色を微かに残して、しだいに黒い影に変わって行く。

「寒くなったね」

高柳君の答は力の抜けた咳二つであつた。

「君さつきから、咳をするね。妙な咳だぜ。医者にでも見て貰ったら、どうだい」

「何、大丈夫だ」と云いながら高柳君は尖つた肩を二三度ゆすぶつた。松林を横切つて、博物館の前に出る。大きな銀杏に墨汁を点じたような滴々の烏が乱れている。暮れて行く空に輝くは無数の落葉である。今は風さえ出た。

「君二三日前に白井道也と云う人が来たぜ」

「道也先生？」

「だろうと思うのさ。余り沢山ある名じゃないから」

「聞いて見たかい」

「聞こうと思ったが、何だかきまりが悪るかつたからやめた」

「なぜ」

「だって、あなたは中学校で生徒から追い出された事はありませんかとも聞けまいじゃないか」

「追い出されましたかと聞かなくつてもいいさ」

「しかし容易に聞きにくい男だよ。ありや、困る人だ。用事よりほかに云わない人だ」

「そんなになつたかも知れない。元来何の用で君の所へなんぞ来たのだい」

「なあと、江湖雜誌こうこざっしの記者だって、僕の所へ談話の筆記に来たのさ」

「君の談話をかい。——世の中も妙な事になるものだ。やっぱり金が勝つんだね」

「なぜ」

「なぜって。——可哀想かわいそうに、そんなに零落れいらくしたかなあ。——君道也先生、どんな、服装なふりをしていた」

「そうさ、あんまり立派じゃないね」

「立派でなくつても、まあどのくらいな服装をしていた」

「そうさ。どのくらいとも云い悪いが、そうさ、まあ君ぐらいなところだろう」

「え、このくらいか、この羽織ぐらいなところか」

「羽織はもう少し色が好いいよ」

「袴はかまは」

「袴もめんは木綿じゃないが、その代りもつと皺しわ苦茶だ」

「要するに僕と伯仲はくちゆうの間か」

「要するに君と伯仲の間だ」

「そうかなあ。——君、背せいの高い、ひよろ長い人だぜ」

「背の高い、顔の細長い人だ」

「じゃ道也先生に違ない。——世の中は随分無慈悲むじひなものだなあ。——君番地を知ってるだろう」

「番地は聞かなかった」

「聞かなかった？」

「うん。しかし江湖雜誌かうこざしで聞けばすぐわかるさ。何でもほかの雑誌や新聞にも関係しているかも知れないよ。どこかで白井道也しらい だいちと云う名を見たようだ」

音楽会の帰りの馬車や車は最前さいぜんから絡繹らくえきとして二人を後ろから追い越して夕暮を吾家わがやへ急ぐ。勇ましく馳かけて来た二挺ちようの人力じんりきがまた追い越すのかと思つたら、大仏を横に見て、西洋軒のなかに掛声ながら引き込んだ。黄昏たそがれの白き靄もやのなかに、逼せまり来る暮色を弾はじ

き返すほどの目覚しき衣は由ある女に相違ない。中野君はぴたりと留まつた。

「僕はこれで失敬する。少し待ち合せている人があるから」

「西洋軒で会食すると云う約束か」

「うんまあ、そうさ。じゃ失敬」と中野君は向へ歩き出す。高柳君は往来の真中へたつた一人残された。

淋しい世の中を池の端へ下る。その時一人坊っちの周作はこう思った。「恋をする時間があれば、この自分の苦痛をかいいて、一篇の創作を天下に伝える事が出来るだろうに」

見上げたら西洋軒の二階に奇麗な花瓦斯がついていた。

五

ミルクホールに這入る。上下を擦り硝子にして中一枚を透き通しにした腰障子に近く据えた一脚の椅子に腰をおろす。焼麵包を噛って、牛乳を飲む。懷中には二十円五十銭ある。ただ今地理学教授法の原稿を四十一頁渡して金に換えて来たばかりである。一頁

五十銭の割合になる。一頁五十銭を超ゆべからず、一カ月五十頁を超ゆべからずと申し渡されてある。

これで今月はどうか、どうか食える。ほかからくれる十円近くの金は故里の母に送らなければならぬ。故里はもう落鮎の時節である。ことによると崩れかかった藁屋根に初霜が降ったかも知れない。鶏が菊の根方を暴らしている事だろう。母は丈夫かしら。向うの机を占領している学生が二人、西洋菓子を食べながら、団子坂の菊人形の収入について大に論じている。左に蜜柑をむきながら、その汁を牛乳の中へたらしている書生がある。一房絞つては、文芸倶楽部の芸者の写真を一枚はぐり、一房絞つては一枚はぐる。芸者の絵が尽きた時、彼はコップの中を匙で攪き廻して妙な顔をしている。酸で牛乳が固まったので驚ろいているのだろう。

高柳君はそこに重ねてある新聞の下から雑誌を引きずり出して、あれこれと見る。目的の江湖雑誌は朝日新聞の下に折れていた。折れてはいるがまだ新らしい。四五日前に出たばかりのである。折れた所は六号活字で何だか色鉛筆の赤い圈点が一面についている。僕の恋愛観と云う表題の下に中野春台とある。春台は無論輝一の号である。高柳君は食い欠いた焼麵包を皿の上へ置いたなり「僕の恋愛観」を見ていたがやがて、にやり

と笑った。恋愛観の結末に同じく色鉛筆で色情狂※と書いてある。高柳君は頁をはぐった。六号活字はだいぶ長い。もつともいろいろの人の名前が出ている。一番始めには現代青年の煩悶はんもんに対する諸家の解決とある。高柳君は急に読んで見る気になった。――

――第一は静心せいしんの工夫くふうを積みと云う注意だ。積みとはどう積むのかちつともわからない。第二は運動をして冷水摩擦れいすいまさつをやれと云う。簡単なものである。第三は読書もせず、世間も知らぬ青年が煩悶はんもんする法がないと論じている。無いと云つても有れば仕方がない。第四は休暇ごとに必ず旅行せよと勧告している。しかし旅費の出処は明記してない。――

高柳君はあとを読むのが厭いやになった。颯さつと引っくりかえして、第一頁をあける。「解脱げだつと拘泥こうでい……憂世子ゆうせいし」と云うのがある。標題が面白いのでちよつと目を通す。

「身体からだの局部がどこぞ悪いと気にかかる。何をしていても、それがゴダワつて来る。ところが非常に健康な人は行住坐臥ぎようじゆうざがともにわが身体からだの存在を忘れている。一点の局部だにわが注意を集注かんしよすべき患所かんしよがないから、かく安々と胖ゆたかなのである。瘡やせて蒼あおい顔をしている人に、君は胃が悪いだろうと尋ねて見た事がある。するとその男が答えて、胃は少しも故障がない、その証拠には僕はこの年になるが、いまだに胃がどこにあるか知らないと云うた。その時は笑って済んだが、後で考えて見ると大に悟おおいつた言葉である。こ

の人は全く胃が健康だから胃に拘泥^{こうでい}する必要がある、必要がないから胃がどこにあつても構わないのと見える。自在^{じざい}飲^{いん}、自在^{じざい}食^{しょく}、いっこう平氣である。この男は胃において悟^{さと}を開いたものである。……」

高柳君はこれは少し妙だよと口のなかで云った。胃の悟りは妙だと云った。

「胃について道^いい得べき事は、惣身^{そうしん}についても道^いい得べき事である。惣身^{そうしん}について道^いい得べき事は、精神^{しん}についても道^いい得べき事である。ただ精神生活においては得失の両面において等しく拘泥^{こうでい}を免^{まぬ}かれぬところが、身体^{からだ}より煩^{わづら}いになる。

「一能^{いちのう}の士^しは一能^{こうでい}に拘泥^{こうでい}し、一芸^{いちげい}の人は一芸^{いちげい}に拘泥^{こうでい}して己^{おの}れを苦しめている。芸能は氣の持ちようではすぐ忘れる事も出来る。わが欠点に至つては容易^{げだつ}に解脱^{げだつ}は出来ぬ。

「百円や二百円もする帯をしめて女が音楽会へ行くとこの帯が妙に氣になつて音楽が耳に入らぬ事がある。これは帯に拘泥^{こうでい}するからである。しかしこれは自慢の例じや。得意の方は前云う通り崇^{たた}りを避^{やす}け易い。しかし不面目^{ふめんぼく}の側はなかなか強情^{たう}に崇^{たた}る。昔しさる所で一人の客に紹介された時、御互に椅子の上で礼をして双方共頭^{かしろ}を下げた。下げながら、向うの足を見るとその男の靴足袋^{くつたび}の片々^{かたかた}が破れて親指の爪が出ている。こちらが頭を下げると同時に彼は満足な足をあげて、破^やれ足袋^{たび}の上に加えた。この人は足袋の穴に

拘泥していたのである。……」

おれも拘泥している。おれのからだは穴だらけだと高柳君は思いながら先へ進む。

「拘泥は苦痛である。避けなければならぬ。苦痛そのものは避けがたい世であろう。しかし拘泥の苦痛は一日で済む苦痛を五日、七日に延長する苦痛である。いらざる苦痛である。避けなければならぬ。

「自己が拘泥するのは他人が自己に注意を集注すると思うからで、つまりは他人が拘泥するからである。……」

高柳君は音楽会の事を思いだした。

「したがって拘泥を解脱するには二つの方法がある。他人がいくら拘泥しても自分は拘泥せぬのが一つの解脱法である。人が目を峙^{そばた}てても、耳を聳^{そび}やかしても、冷評しても罵^{のの}詈^りしても自分だけは拘泥せずにさっさと事を運んで行く。大久保彦左衛門は盥^{たらひ}で登城^{とじょう}した事がある。……」

高柳君は彦左衛門が羨^{うらや}ましくなった。

「立派な衣装^{いしやう}を馬士^{まじ}に着せると馬士はすぐ拘泥してしまう。華族や大名はこの点において解脱の方を得ている。華族や大名に馬士の腹掛^{はらがけ}をかけさすと、すぐ拘泥してしまう。

釈迦しやかや孔子こうしはこの点において解脱を心得ている。物質界おもきに重を置かぬものは物質界に拘泥する必要がないからである。……」

高柳君は冷めさかかった牛乳をぐつと飲んで、ううと云った。

「第二の解脱法は常人じょうじんの解脱法である。常人の解脱法は拘泥まぬを免かるのではない、拘泥せねばならぬような苦しい地位に身を置くのを避けるのである。人の視聴ひを惹くひの結果、われより苦痛が反射せぬようにと始めから用心するのである。したがって始めより流俗りゆうぞくに媚こびて一世に附和ふわする心底しんていがなければ成功せぬ。江戸風な町人はこの解脱法を心得ている。芸妓げいぎ通客つうかくはこの解脱法を心得ている。西洋のいわゆる紳士ゼントルマンはもつともよくこの解脱法を心得たものである。……」

芸者ゼントルマンと紳士がいつしよになつてゐるのは、面白いと、青年はまた焼麵やき麴めんの一片ぺんを、横合から半円形に食い欠いた。親指についた牛酪バターをそのまま袴はかまの膝ひざへなすりつけた。

「芸妓、紳士、通人つうじんから耶蘇ヤソ孔子こうし釈迦しやかを見れば全然たる狂人である。耶蘇、孔子、釈迦から芸妓、紳士、通人を見れば依然として拘泥こうでいしている。拘泥のうちに拘泥を脱し得たりと得意なるものは彼らである。両者の解脱げだつは根本義において一致すべからざるものである。……」

高柳君は今まで解脱の二字においてかつて考えた事はなかった。ただ文界に立つて、ある物になりたい、なりたいたがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄つてたかつて己れを苦しめる、残念だ無念だとばかり思っていた。あとを読む気になる。

「解脱は便法に過ぎぬ。下れる世に立つて、わが真を貫徹し、わが善を標榜し、わが美を提唱するの際、※泥帯水の弊をまぬがれ、勇猛精進の志を固くして、現代下根の衆生より受くる迫害の苦痛を委却するための便法である。この便法を証得し得ざる時、英霊の俊児、またついに鬼窟裏に墮在して彼のいわゆる芸妓紳士通人と得失を較するの愚を演じて憚らず。国家のため悲しむべき事である。」

「解脱は便法である。この方便門を通じて出頭し来る行為、動作、言説の是非は解脱の関するところではない。したがって吾人は解脱を修得する前に正鵠にあたる趣味を養成せねばならぬ。下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹するは学人の恥辱である。彼らが貴重なる十年二十年を挙げて故紙堆裏に兀々たるは、衣食のためではない、名聞のためではない、ないし爵禄財宝のためではない。微かなる墨痕のうちに、光明の一炬を点じ得て、点じ得たる道火を解脱の方便門より担い出して暗黒世界を遍照せんがためであ

る。

「このゆえに真に自家証得底の見解あるものために、拘泥の煩を払って、でき得る限り彼らをして第一種の解脱に近づかしむるを道徳と云う。道徳とは有道の士をして道を行わしめんがために、吾人がこれに対して与うる自由の異名である。この大道徳を解せざるものを俗人と云う。

「天下の多数は俗人である。わが位に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。わが富に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。下れるものは、わが酒とわが女に着するがためにこの大道徳を解し得ぬ。

「光明は趣味の先駆である。趣味は社会の油である。油なき社会は成立せぬ。汚れたる油に廻転する社会は墮落する。かの紳士、通人、芸妓の徒は、汚れたる油の上を滑つて墓に入るものである。華族と云い貴顕と云い豪商と云うものは門閥の油、権勢の油、黄白の油をもつて一世を逆しまに廻転せんと欲するものである。

「真正の油は彼らの知るところではない。彼らは生れてより以来この油について何らの工夫も費やしておらん。何らの工夫を費やさぬものが、この大道徳を解せぬのは許す。光明の学徒を圧迫せんとするに至っては、俗人の域を超越して罪人の群に入る。

「三味線しやみせんを習うにも五六年はかかる。巧拙こうせつを聴き分くるさえ一カ月の修業では出来ぬ。趣味の修養が三味しやみの稽古けいこより易いやすと思うのは間違っている。茶の湯を学ぶ彼らはいらざる儀式に貴重な時間を費やして、一々に師匠の云う通りになる。趣味は茶の湯より六むずかしいものじゃ。茶坊主に頭を下げる謙徳けんとくがあるならば、趣味の本家ほんけたる学者の考はなおさら傾聴せねばならぬ。

「趣味は人間に大切なものである。楽器を壊こぼつものは社会から音楽を奪う点において罪人である。書物を焼くものは社会から学問を奪う点において罪人である。趣味を崩くずすものは社会そのものを覆くつえす点において刑法の罪人よりもはなだしき罪人である。音楽はなくとも吾人は生きている、学問がなくても吾人は生きていく。趣味がなくとも生きておられるかも知れぬ。しかし趣味は生活の全体に渉わたる社会の根本要素である。これなくして生きんとするは野に入つて虎と共に生きんとすると一般である。

「ここに一人いちにんがある。この一人が単に自己の思うようにならぬと云う原因のもとに、多勢たせいが朝に晩に、この一人を突つき廻わして、幾年の後のちこの一人の人格を墮落せしめて、下劣なる趣味に誘い去りたる時、彼らは殺人より重い罪を犯したのである。人を殺せば殺される。殺されたものは社会から消えて行く。後患こうかんは遺さのこさない。趣味の墮落したものは

は依然として現存する。現存する以上は墮落した趣味を伝染せねばやまぬ。彼はペストである。ペストを製造したものはもちろん罪人である。

「趣味の世界にペストを製造して罰せられんのは人殺しをして罰せられんのと同様である。位地の高いものはもつともこの罪を犯し^{おか}やすい。彼らは彼らの社会的地位からして、他に働きかける便宜^{べんぎ}の多い場所に立っている。他に働きかける便宜を有して、働きかける道を弁^わえぬものは危険である。

「彼らは趣味において専門の学徒に及ばぬ。しかも学徒以上他に働きかけるの能力を有している。能力は権利ではない。彼らのあるものはこの区別さえ心得ておらん。彼らの趣味を教育すべくこの世に出現せる文学者を捕えてすらこれを逆^{さか}しまに吾意のごとくせんとする。彼らは単に大道徳を忘れたるのみならず、大不道徳を犯して恬然^{てんぜん}として社会に横行しつつあるのである。

「彼らの意のごとくなる学徒があれば、自己の天職を自覚せざる学徒である。彼らを教育する事の出来ぬ学徒があれば腰の抜けたる学徒である。学徒は光明を体せん事を要す。光明より流れ出ずる趣味を現実せん事を要す。しかしてこれを現実^{げんじつ}せんがために、拘泥^{こうでい}せざらん事を要す。拘泥^{こうでい}せざらんがために解脱^{げだつ}を要す」

高柳君は雑誌を開いたまま、茫然^{ぼうぜん}として眼を挙げた。正面の柱にかかっている、八角時計がぼうんと一時を打つ。柱の下の椅子^{いす}にぼつ然^{ねん}と腰を掛けていた小女郎^{こじやう}が時計の音と共に立ち上がった。丸テーブルの上には安い京焼^{きやうやき}の花活^{はないき}に、浅ましく水仙を突きさして、葉の先が黄ばんでいるのを、いつまでもそのままに水をやらぬ気と見える。小女郎は水仙の花にちよつと手を触れて、花活^{はないき}のそばにある新聞をとり上げた。読むかと思つたら四つに疊^{かたわら}んで傍に置いた。この女は用もないのに立ち上がったのである。退屈^{たいくつ}のあまり、ぼうんを聞いて器械的に立ち上がったのである。羨^{うらや}ましい女だと高柳君はすぐ思う。

菊人形の収入についての議論は片づいたと見えて、二人の学生は煙草^{たばこ}をふかして往來を見ている。

「おや、富田^{とみた}が通る」と一人が云う。

「どこに」と一人が聞く。富田君は三寸ばかり開いていた硝子戸^{ガラスど}の間をちらと通り抜けたのである。

「あれは、よく食う奴^{やつ}じゃな」

「食う、食う」と答えたところによるとよほど食うと見える。

「人間は食う割に肥らんものだな。あいつはあんなに食う癖にいつこう肥えん」

「書物は沢山読むが、ちつとも、えろうならんのがおると同じ事じゃ」

「そうよ。御互に勉強はなるべくせん方がいいの」

「ハハハハ。そんなつもりで云ったんじゃない」

「僕はそう云うつもりにしたのさ」

「富田は肥らんがなかなか敏捷だ。やはり沢山食うだけの事はある」

「敏捷な事があるものか」

「いや、この間四丁目を通ったら、後ろから出し抜けに呼ぶものがあるから、振り反ると富田だ。頭を半分刈ったままで、大きな敷布のようなものを肩から纏うている」

「元来どうしたのか」

「床屋から飛び出して来たのだ」

「どうして」

「髪を刈っておったら、僕の影が鏡に写ったものだから、すぐ馳け出したんだそうだ」

「ハハハハそいつは驚ろいた」

「おれも驚ろいた。そうして尚志会の寄附金を無理に取って、また床屋へ引き返した

ぜ」

「ハハハハなるほど敏捷びんしょうなものだ。それじゃ御互になるべく食う事にしよう。敏捷にせんと、卒業してから困るからな」

「そうよ。文学士のように二十円くらいで下宿に屏息へいそくしていては人間と生れた甲斐かいはないからな」

高柳君は勘定をして立ち上った。ありがとうと云う下女の声に、文芸倶楽部の上につつ伏していた書生が、赤い眼をとろつかせて、睨にらめるように高柳君を見た。牛の乳のなかの酸に中毒でもしたのだろう。

六

「私は高柳周作たかやなぎしゅうさくと申すもので……」と丁寧ていねいに頭を下げた。高柳君が丁寧ていねいに頭を下げた事は今まで何度もある。しかしこの時のように快よく頭を下げた事はない。教授の家を訪問しても、翻訳を頼まれる人に面会しても、その他の先輩に対しても皆丁寧ていねいに頭をさげる。せんだって中野のおやじに紹介された時などはいよいよもって丁寧ていねいに頭をさげた。

しかし頭を下げるうちにいつでも圧迫を感じている。位地、年輩、服装、住居が睥睨して、頭を下げぬか、下げぬかと催促されてやむを得ず頓首するのである。道也先生に対しては全く趣が違ふ。先生の服装は中野君の説明したごとく、自分と伯仲の間にある。先生の書斎は座敷をかねる点において自分の室と同様である。先生の机は白木なるの点において、丸裸なるの点において、またもつとも無趣味に四角張つたる点において自分の机と同様である。先生の顔は蒼い点において瘡けた点において自分と同様である。すべてこれらの諸点において、先生と弟たりがたく兄たりがたき間柄にありながら、しかも丁寧に頭を下げるのは、逼られて仕方なしに下げるのではない。仕方あるにもかかわらず、こつちの好意をもつて下げるのである。同類に対する愛憐の念より生ずる真正の御辞儀である。世間に対する御辞儀はこの野郎がと心中に思いながらも、公然には反比例に丁寧に極めたる虚偽の御辞儀でありますと断わりたいくらいに思つて、高柳君は頭を下げた。道也先生はそれと覺つたかどうか知らぬ。

「ああ、そうですか、私が白井道也で……」とつくろつた景色もなく云う。高柳君にはこの挨拶振りが気に入った。兩人はしばらくの間黙つて控えている。道也は相手の来意がわからぬから、先方の切り出すのを待つのが当然と考える。高柳君は昔しの關係を残

りなく打ち開けて、一刻も早く同類相憐むの間柄になりたい。しかしあまり突然であるから、ちよつと言ひ出しかねる。のみならず、一昔し前の事とは申しながら、自分達がいじめて追ひ出した先生が、そのためにかく零落したのではあるまいかと思うと、何となく気がひけて云ひ切れない。高柳君はこんなところになるとすこぶる勇氣に乏しい。謝罪かたがた尋ねはしたが、いよいよと云う段になると少々怖くて罪滅しが出来かねる。心にいろいろな冒頭を作つて見たが、どれもこれもきまりがわるい。

「だんだん寒くなりますね」と道也先生は、こつちの了簡を知らないから、超然たる時候の挨拶をする。

「ええ、だいぶ寒くなつたようで……」

高柳君の脳中の冒頭はこれでまるで打ち壊されてしまった。いつその事自白はこの次にしようという気になる。しかし何だか話して行きたい気がする。

「先生御忙がしいですか……」

「ええ、なかなか忙がしいんで弱ります。貧乏閑なしで」

高柳君はやり損なつたと思う。再び出直さねばならん。

「少し御話を承りたいと思つて上がったんですが……」

「はあ、何か雑誌へでも御載せになるんですか」

あてはまたはずれる。おれの態度がどうしても向には酌み取れないと見えると青年は心中少しく残念に思った。

「いえ、そうじゃないので——ただ——ただっちゃ失礼ですが。——御邪魔ならまた上がつてもよろしゅうございますが……」

「いえ邪魔じゃありません。談話と云うからちよつと聞いて見たのです。——わたしのうちへ話なんか聞きにくるものはありませんよ」

「いいえ」と青年は妙な言葉をもつて先生の辞を否定した。

「あなたは何の学問をなさるですか」

「文学の方を——今年大学を出たばかりです」

「はあそうですか。ではこれから何かおやりになるんですね」

「やれば、やりたいのですが、暇がなくて……」

「暇はないですね。わたしなども暇がなくて困っています。しかし暇はかえつてない方がいいかも知れない。何ですね。暇のあるものはだいぶいるようだが、余り誰も何もやっていないようじゃありませんか」

「それは人に依りはしませんか」と高柳君はおれが暇さえあればと云うところを暗にほめかした。

「人にも依るでしょう。しかし今の金持ちと云うものは……」と道也は句を半分で切つて、机の上を見た。机の上には二寸ほどの厚さの原稿がのつている。障子には洗濯した足袋の影がさす。

「金持ちは駄目です。金がなくなつて困つてゐるものが……」

「金がなくなつて困つてゐるものは、困りなりにやればいいのです」と道也先生困つてゐる癖に太平な事を云う。高柳君は少々不満である。

「しかし衣食のために勢力をとられてしまつて……」

「それでいいのですよ。勢力をとられてしまつたら、ほかに何にもしないで構わないのです」

青年は啞然として、道也を見た。道也は孔子様のように真面目である。馬鹿にされてるんじやたまらないと高柳君は思う。高柳君は大抵の事を馬鹿にされたように聞き取る男である。

「先生ならいいかも知れません」とつるつると口を滑らして、はつと言ひ過ぎたと下を

向いた。道也は何とも思わない。

「わたしは無論いい。あなただって好いですよ」と相手までも平氣に捲き込もうとする。

「なぜですか」と二三歩逃げて、振り向きながら佇む狐のように探りを入れた。

「だって、あなたは文学をやったと云われたじゃありませんか。そうですか」

「ええやりました」と力を入れる。すべて他の点に関しては断乎たる返事をする資格のない高柳君は自己の本領においては何人の前に出てもひるまぬつもりである。

「それならいい訳だ。それならそれでいい訳だ」と道也先生は繰り返して云った。高柳君には何の事か少しも分らない。また、なぜですと突き込むのも、何だか伏兵に罹る氣持がして厭である。ちよつと手のつけようがないので、黙って相手の顔を見た。顔を見ているうちに、先方でどうか解決してくれるだろうと、暗に催促の意を籠めて見たのである。

「分りましたか」と道也先生が云う。顔を見たのはやっぱり何の役にも立たなかつた。

「どうも」と折れざるを得ない。

「だってそうじゃありませんか。——文学はほかの學問とは違ふのです」と道也先生は

凜然^{りんぜん}と云い放った。

「はあ」と高柳君は覺えず応答をした。

「ほかの學問はですね。その學問や、その學問の研究を阻害^{そがい}するものが敵である。たとえば貧^{ひん}とか、多忙^{ひん}とか、圧迫^{ひん}とか、不幸^{ひん}とか、悲酸^{ひさん}な事情^{ひさん}とか、不和^{ひん}とか、喧嘩^{けんか}とかですね。これがあると學問が出来ない。だからなるべくこれを避けて時と心の余裕を得ようとする。文學者も今まではやはりそう云う了簡^{りようけん}でいたのです。そう云う了簡^{りようけん}どころではない。あらゆる學問のうちで、文學者が一番呑氣^{のんき}な閑日月^{かんじつげつ}がなくてはならんように思われていた。おかしいのは当人自身までがその氣でいた。しかしそれは間違^{まちが}です。文學は人生そのものである。苦痛^{くるう}にあれ、困窮^{きんきゆう}にあれ、窮愁^{きゆうしゆう}にあれ、凡^{およ}そ人生の行路^{ぎやうろ}にあたるものはすなわち文學で、それらを嘗^なめ得たものが文學者である。文學者と云うのは原稿紙を前に置いて、熟語字典を参考して、首をひねっているような閑人^{ひまじん}じゃありません。円熟して深厚な趣味を体して、人間の万事を臆面^{おくめん}なく取り捌^{さば}いたり、感得^{かんとく}したりする普通以上の吾々^{われら}を指^さすのであります。その取り捌^{さば}き方や感得^{かんとく}し具合を紙に写したのが文學書になるのです、だから書物は読まないでも實際その事にあたれば立派な文學者です。したがってほかの學問ができ得る限り研究を妨害する事物を避けて、しだいに人世

に遠かるに引き易かえて文学者は進んでこの障害のなかに飛び込むのであります」

「なるほど」と高柳君は妙な顔をして云った。

「あなたは、そうは考えませんか」

そう考えるにも、考えぬにも生れて始めて聞いた説である。批評的の返事が出るときは大抵用意のある場合に限る。不意撃ふいうちに应ずる事が出来れば不意撃ではない。

「ふうん」と云つて高柳君は首を低たれた。文学は自己の本領である。自己の本領について、他人が答弁さえ出来ぬほどの説を吐はくならばその本領はあまり鞏固きようこなものではない。道也先生さえ、こんな見すばらしい家に住んで、こんな、きたならしい着物をきているならば、おれは当然二十円五十銭の月給で沢山だと思つた。何だか急に広い世界へ引き出されたような感じがする。

「先生はだいぶ御忙おいそがしいようですが……」

「ええ。進んで忙しい中へ飛び込んで、人から見ると酔興すいきような苦勞をします。ハハハハ」と笑う。これなら苦勞が苦勞にたたない。

「失礼ながら今はどんな事をやっておいで……」

「今ですか、ええいろいろな事をやりますよ。飯を食う方と本領の方と両方やろうとす

るからなかなか骨が折れます。近頃は頼まれてよく方々へ談話の筆記に行きますがね」

「随分御面倒でしょう」

「面倒と云いや、面倒ですがね。そう面倒と云うよりむしろ馬鹿ばか気げています。まあいい加減に書いては来ますが」

「なかなか面白い事を云うのがおりましたよ」と暗あんに中野春台なかのしゅんたいの事を釣り出そうとする。

「面白いの何のつて、この間はうま、うまの講釈を聞かされました」

「うま、うまですか？」

「ええ、あの小供こどもが食物たべものの事をうまうまと云いましょう。あれの来歴ですね。その人の説によると小供が舌が回り出してから一番早く出る発音がうまうまだそうです。それでその時分は何を見てもうまうま、何を見なくつてもうまうまだからつまりは何なににもつけなくてもいいのだそうだが、そこが小供に取って一番大切なものは食物だから、とうとう食物の方で、うまうまを専有してしまったのだそうです。そこで大人おとなもその癖くせのこつて、美味なものをうまいと云うようになった。だから人生じんせいの煩悶はんもんは要するに元へ還かえつてうまうまの二字に帰着すると云うのです。何だか寄席よせへでも行ったようじゃない

ですか」

「馬鹿にしていますね」

「ええ、大抵は馬鹿にされに行くんですよ」

「しかしそんなつまらない事を云うって失敬ですね」

「なに、失敬だっていいでさあ、どうせ、分らないんだから。そうかと思うとね。非常に真面目^{まじめ}だけれどもなかなか突飛^{とっぴ}なのがあつてね。この間は猛烈な恋愛論を聞かされました。もつとも若い人ですがね」

「中野じゃありませんか」

「君、知ってますか。ありや熱心なものだった」

「私の同級生です」

「ああ、そうですね。中野春台とか云う人ですね。よっぽど暇があるんでしょう。あんな事を真面目に考えているくらいだから」

「金持ちです」

「うん立派な家^{うち}にいますね。君はあの男と親密なのですか」

「ええ、もとはごく親密でした。しかしどうもいかんです。近頃は——何だか——未来

の細君か何か出来たんで、あんまり交際してくれないのです」

「いいでしょう。交際しなくつても。損にもなりそうもない。ハハハハハ」

「何だかしかし、こう、一人坊^{ひとりぼ}つちのような気がして淋しくつていけません」

「一人坊^{ひとりぼ}つちで、いいでさあ」と道也先生またいいでさあを^{かつ}担ぎ出した。高柳君はもう「先生ならいいでしょう」と突き込む勇気が出なかった。

「昔から何かしようと思えば大概は一人坊^{ひとりぼ}つちになるものです。そんな一人の友達をたよりにするようじゃ何も出来ません。ことによると親類とも仲^{なかつ}違になる事が出来て来ます。妻にまで馬鹿にされる事があります。しまいに下女までからかいます」

「私はそんなになったら、不愉快で生きていられないだろうと思います」

「それじゃ、文学者にはなれないです」

高柳君はだまって下を向いた。

「わたしも、あなたぐらいの時には、ここまでとは考えていなかった。しかし世の中の事実は実際ここまでやって来るんです。うそじゃない。苦しんだのは耶蘇^{ヤソ}や孔子^{こうし}ばかりで、吾々文学者はその苦しんだ耶蘇や孔子を筆の先でほめて、自分だけは呑^{のん}氣に暮^きして行けばいいのだなどと考えてるのは偽^{にせ}文学者^{ぶんがくしや}ですよ。そんなものは耶蘇や孔子をほめる

権利はないのです」

高柳君は今こそ苦しいが、もう少し立てば喬木きようぼくにうつる時節があるだろうと、苦しいうちに絹糸ほどな細い望みを繋つないでいた。その絹糸が半分ばかり切れて、暗い谷から上へ出るたよりは、生きているうちは容易に来そうに思われなくなった。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知ってますか」と道也先生は淋さびし氣げに笑った。

「知ってるつもりですけど、いつまでもこう苦しくっちゃ……」

「やり切れませんか。あなたは御両親おあが御在ありか」

「母だけ田舎いなかにいます」

「おっかさんだけ？」

「ええ」

「御母おつかさんだけでもあれば結構だ」

「なかなか結構でないです。——早くどうかしてやらないと、もう年を取っていますから。私が卒業したら、どうか出来るだろうと思つてたのですが……」

「さよう、近頃のように卒業生が殖えちや、ちよつと、口を得るのが困難ですね。——どうです、田舎の学校へ行く気はないですか」

「時々は田舎へ行こうとも思ふんですが……」

「またいやになるかね。——そうさ、あまり勧められもしない。私も田舎の学校はだいぶ経験があるが」

「先生は……」と言いかけたが、また昔の事を云い出しにくくなった。

「ええ？」と道也は何も知らぬ気である。

「先生は——あの——江湖雑誌を御編輯になると云う事ですが、本当にそうなんで」

「ええ、この間から引き受けてやっています」

「今月の論説に解脱と拘泥と云うのがありました、あの憂世子と云うのは……」

「あれは、わたしです。読みましたか」

「ええ、大変面白く拝見しました。そう申しちゃ失礼ですが、あれは私の云いたい事を五六段高くして、表出したようなもので、利益を享けた上に痛快に感じました」

「それはありがたい。それじゃ君は僕の知己ですね。恐らく天下唯一の知己かも知れない。ハハハハ」

「そんな事はないでしょう」と高柳君はやや真面目に云った。

「そうですか、それじゃなお結構だ。しかし今まで僕の文章を見てほめてくれたものは一人もない。君だけですよ」

「これから皆んな賞めるつもりです」

「ハハハハそう云う人がせめて百人もいてくれると、わたしも本望だが——随分頓珍漢な事がありますよ。この間なんか妙な男が尋ねて来てね。……」

「何ですか」

「なあに商人ですがね。どこから聞いて来たか、わたしに、あなたは雑誌をやっておいでだそうだが文章を御書きなさるだろうと云うのです」

「へえ」

「書く事は書くともあ云ったんです。するとねその男がどうぞ一つ、眼薬の広告をかいてもらいたいと云うんです」

「馬鹿な奴ですな」

「その代り雑誌へ眼薬の広告を出すからは非一つ願いたいって——何でも点明水てんめいすいとか云う名ですがね……」

「妙な名をつけて——。御書きになったんですか」

「いえ、とうとう断わりましたがね。それでまだおかしい事があるのですよ。その薬屋で売出しの日に大きな風船を揚げるんだと云うのです」

「御祝いのためですか」

「いえ、やはり広告のために。ところが風船は声も出さずに高い空を飛んでいるのだから、仰向けあおむば誰にでも見えるが、仰向けせなくっちゃいけないでしょう」

「へえ、なるほど」

「それでわたしにその、仰向けせの役をやってくれって云うのです」

「どうするのです」

「何、往来をあるいていても、電車へ乗っていてもいいから、風船を見たら、おや風船だ風船だ、何でもありや点明水の広告に違いないって何遍も何遍も云うのだそうです」

「ハハハ随分思い切って人を馬鹿にした依頼ですね」

「おかしくもあり馬鹿馬鹿しくもあるが、何もそれだけの事をするにはわたしでなくて

もよからう。車引でも雇えば訳ないじゃないかと聞いて見たのです。するとその男がね。いえ、車引なんぞばかりでは信用がなくなつていけません。やつぱり髭でも生やしてもつともらしい顔をした人に頼まないと、人がだまされませんからと云うのです」

「実に失敬な奴ですね。全体何物でしょう」

「何物つてやはり普通の人間ですよ。世の中をだますために人を雇いに來たのです。呑気なものさハハハハ」

「どうも驚ろいちまう。私なら撲ぐつてやる」

「そんなのを撲つた日にや片っ端から撲らなくっちゃあならない。君そう怒るが、今の世の中はそんな男ばかりで出來てるんですよ」

高柳君はまさかと思つた。障子にさした足袋の影はいつしか消えて、開け放つた一枚の間から、靴刷毛の端が見える。椽は泥だらけである。手の平ほどな庭の隅に一株の菊が、清らかに先生の貧を照らしている。自然をどうでもいいと思つている高柳君もこの菊だけは美しく感じた。杉垣の遙か向に大きな柿の木が見えて、空のなかへ五分珠の珊瑚をかためて嵌め込んだように奇麗に赤く映る。鳴子の音がして鳥がぱつと飛んだ。

「閑静な御住居ですね」

「ええ。蛸寺たこでらの和尚おしょうが鳥を追っているんです。毎日がらんがらん云わして、鳥ばかり追っている。ああ云う生涯しょうがいも閑静でいいな」

「大変たくさん柿が生なっていますね」

「渋柿ですよ。あの和尚は何が惜しくて、ああ渋柿の番ばかりするのか。——君妙な咳せきを時々するが、身体からだは丈夫ですか。だいぶ瘠やせてるようじゃありませんか。そう瘠せてちやいかん。身体が資本だから」

「しかし先生だって随分瘠せていらっしやるじゃありませんか」

「わたし？ わたしは瘠せている。瘠せてはいるが大丈夫」

七

白き蝶ちようの、白き花に、

小き蝶ちさの、小き花に、

みだるるよ、みだるるよ。

長き憂^{うれい}は、長き髪に、
暗き憂は、暗き髪に、

みだるるよ、みだるるよ。

いたずらに、吹くは野分^{のわき}の、

いたずらに、住むか浮世に、

白き蝶も、黒き髪も、

みだるるよ、みだるるよ。

と女はうたい了^{おわ}る。銀椀^{ぎんわん}に珠^{たま}を盛りて、白魚^{しらうお}の指^{うこ}に揺かしたらば、こんな声がでよう
と、男は聴^ききとれていた。

「うまく、唱^{うた}えました。もう少し稽古^{けいこ}して音量が充分に出ると大きな場所で聴いても、
立派に聴けるに違いない。今度演奏会のためにやって見ませんか」

「厭^{いや}だわ、ためしだなんて」

「それじゃ本式に」

「本式にやなおできませんわ」

「それじゃ、つまりおやめと云う訳^{わけ}ですか」

「だってたくさん人のいる前なんかで、——恥ずかしくって、声なんか出やしませんわ」

「その新体詩はいいでしょう」

「ええ、わたし大好き」

「あなたが、そうやって、唱つてるところを写真に一つ取りましようか」

「写真に？」

「ええ、厭ですか」

「厭じゃないわ。だけれども、取って人に御見せなさるでしょう」

「見せてわるければ、わたし一人で見ています」

女は何にも云わずに眼を横に向けた。こぼれ梅を一枚の半襟はんえりの表おもてに掃き集めた真中まんなかに、明星みょうじょうと見まがうほどの留針とめばりが的てきと耀かがやいて、男の眼を射る。

女の振り向いた方には三尺の台を二段に仕切って、下には長方形の交趾こうちの鉢はちに細き蘭らんが揺るがんとして、香かうの煙りのたなびくを待っている。上段にはメロスの愛神ヴィーナスの模像を、ほの暗き室へやの隅に夢かとはかり据すえてある。女の眼は端はしなくもこの裸体像の上に落ちた。

「あの像は」と聞く。

「無論模造です。本物は巴^{パリ}理のルーヴルにあるそうです。しかし模造でもみごとですね。腰から上の少し曲ったところと両足の方向とが非常に釣合がよく取れている。――これが全身完全だと非常なものですが、惜しい事に手が欠けてます」

「本物も欠けてるんですか」

「ええ、本物が欠けてるから模造もかけてるんです」

「何の像でしょう」

「ヴィーナス。愛の神です」と男はことさらに愛と云う字を強く云った。

「ヴィーナス！」

深い眼^{まつげ}睫の奥から、ヴィーナスは溶^とけるばかりに見詰められている。冷^{ひや}やかなる石^{せつこう}膏^{こう}の暖^なまるほど、丸^{まる}き乳^{ちく}首^びの、呼^こ吸^そにつれて、かすかに動くかと疑^{あや}しまるるほど、女は瞳^{ひとみ}を凝^こらしている。女自身も艶^{えん}なるヴィーナスである。

「そう」と女はやがて、かすかな声で云う。

「あんまり見ているとヴィーナスが動き出しますよ」

「これで愛の神でしょうか」と女はようやく頭^{かしら}を回^{めく}らした。

あなたの方が愛の神らしいと云おうとしたが、女と顔を見合した時、男は急に躊躇した。云えば女の表情が崩れる。この、訝るがごとく、訴うるがごとく、深い眼のうちに我を頼るがごとき女の表情を一瞬たりとも、我から働きかけて打ち壊すのは、メロスのヴィーナスの腕を折ると同じく大なる罪科である。

「気高過ぎて……」と男の我を援けぬをもどかしがつて女は首を傾けながら、我からと顔の上なる姿を変えた。男はしまったと思う。

「そう、すこし堅過ぎます。愛と云う感じがあまり現われていない」

「何だか冷めたいような心持がしますわ」

「その通りだ。冷めたいと云うのが適評だ。何だか妙だと思っていたが、どうも、いい言葉が出て来なかつたんです。冷めたい——冷めたい、と云うのが一番いい」

「なぜこんなに、拵らえたんでしよう」

「やっぱりフー・1 - 6 - 8 4 ジアス式だから厳格なんでしよう」

「あなたは、こう云うのが御好き」

女は石像をさえ、自分と比較して愛人の心を窺つて見る。ヴィーナスを愛するものは、自分を愛してはくれまいと云う掛念がある。女はヴィーナスの、神である事を忘れ

ている。

「好きって、いいじゃありませんか、古今の傑作ですよ」

女の批判は直覚的である。男の好尚は半ば伝説的である。なまじいに美学などを聴いた因果で、男はすぐ女に同意するだけの勇気を失っている。学問は己れを欺くとは心づかぬと見える。自から学問に欺かれながら、欺かれぬ女の判断を、いたずらに誤まれりとのみ見る。

「古今の傑作ですよ」と再び繰り返したのは、半ば女の趣味を教育するためであつた。

「そう」と女は云つたばかりである。石火を交えざる刹那に、はつと受けた印象は、学者の一言のために打ち消されるものではない。

「元来ヴィーナスは、どう云うものか僕にはいやな聯想がある」

「どんな聯想なの」と女はおとなしく聞きつつ、双の手を立ちながら膝の上に重ねる。手頭からさが二寸ほど白く見えて、あとは、しなやかなる衣のうちに隠れる。衣は薄紅に銀の雨を濃く淡く、所まだらに降らしたような縞柄である。

上になった手の甲の、五つに岐れた先の、しだいに細まりてかつ丸く、つやある爪に蔽われたのが好い感じである。指は細く長く、すらりとした姿を崩さぬほどに、柔らか

な肉を持たねばならぬ。この調^{とじの}える姿が五本ごとに異ならねばならぬ。異なる五本が一つにかたまつて、纏^{まと}まる調子をつくらねばならぬ。美しくしき手を持つ人は、美しくしき顔を持つ人よりも少ない。美しくしき手を持つ人には貴^{たつと}き飾りが必要である。

女は燦^{さん}たるものを、細き肉に戴^{いた}いている。

「その指輪は見馴^{みな}れませんね」

「これ？」と重ねた手は解^とけて、右の指に耀^{かがや}くものをなぶる。

「この間父様に買^{ダイヤモンド}っていたいたいの」

「金剛石ですか」

「そうですね。天賞堂から取^とったんですから」

「あんまり御父さんを苛^{いじ}めちゃいけませんよ」

「あら、そうじゃないのよ。父様の方から買^とって下さったのよ」

「そりや珍らしい現象ですね」

「ホホホ本当ね。あなたその訳^{わけ}を知^しつてて」

「知るものですか、探^{たんでい}偵^{てい}じゃあるまいし」

「だから御存じないでしょうと云うのですよ」

「だから知りませんよ」

「教えて上げましょうか」

「ええ教えて下さい」

「教えて上げるから笑っちゃいけませんよ」

「笑やしません。この通り真面目まじめでさあ」

「この間ね、池上いけがみに競馬があつたでしょう。あの時父様があすこへいらしてね。そうして……」

「そうして、どうしたんです。——拾つて来たんですか」

「あら、いやだ。あなたは失敬ね」

「だって、待つてもあとをおっしゃらないですもの」

「今云うところなのよ。そうして賭かけをなすつたんですって」

「こいつは驚ろいた。あなたの御父さんもやるんですか」

「いえ、やらないんだけど、試ためしにやって見たんだって」

「やっぱりやつたんじゃないませんか」

「やった事はやったの。それで御金を五百円ばかり御取りになつたんだって」

「へえ。それで買って頂いたのですか」

「まあ、そうよ」

「ちよつと拝見」と手を出す。男は耀くものを軽く抑えた。

指輪は魔物である。沙翁は指輪を種に幾多の波瀾を描いた。若い男と若い女を目に見えぬ空裏に繋ぐものは恋である。恋をそのまま手にとらすものは指輪である。

三重にうねる細き金の波の、環と合うて膨れ上るただ中を穿ちて、動くなよと、安らかに据えたる寶石の、眩ゆさは天が下を射れど、毀たねば波の中より奪いがたき運命は、君ありての妾、妾故にの君である。男は白き指もろ共に指輪を見詰めている。

「こんな指輪だったのか知らん」と男が云う。女は寄り添うて同じ長椅子を二人の間に分つ。

「昔しさる好事家がヴィーナスの銅像を掘り出して、吾が庭の眺めにと橄欖の香の濃く吹くあたりに据えたそうです」

「それは御話？ 突然なのね」

「それから或日テニスをしていたら……」

「あら、ちつとも分らないわ。誰がテニスをするの。銅像を掘り出した人なの？」

「銅像を掘り出したのは人足で、テニスをしたのは銅像を掘り出さした主人の方です」

「どっちだって同じじゃありませんか」

「主人と人足と同じじゃ少し困る」

「いいえさ、やっぱり掘り出した人がテニスをしたんでしよう」

「そう強情を御張りになるなら、それでよろしい。――では掘り出した人がテニスをする……」

「強情じゃない事よ。じゃ銅像を掘り出さした方がテニスをするの、ね。いいでしょう」

「どっちでも同じでさあ」

「あら、あなた、御怒りなすったの。だから掘り出さした方だって、あやまっているじゃありませんか」

「ハハハあやまらなくてもいいです。それでテニスをしているとね。指輪が邪魔になつて、ラケットが思うように使えないんです。そこで、それはずしてね、どこかへ置こうと思ったが小さいものだから置きなくすといけない。――大事な指輪ですよ。結納の指輪なんです」

「誰と結婚をなさるの？」

「誰とって、そいつは少し——やっぱりさる令嬢とです」

「あら、お話しになってもいいじゃありませんか」

「隠す訳じゃないが……」

「じゃ話してちょうだい。ね、いいでしょう。相手はどなたなの？」

「そいつは弱りましたね。実は忘れちゃった」

「それじゃ、ずるいわ」

「だって、メリメの本を貸しちまってちよつと調べられないですもの」

「どうせ、御貸しになったんでしようよ。ようございます」

「困ったな。せつかくのところで名前を忘れたもんだから進行する事が出来なくなっ

た。——じゃ今日は御やめにして今度その令嬢の名を調べてから御話をしましょう」

「いやだわ。せつかくのところですよしたり、なんかして」

「だって名前を知らないんですもの」

「だからその先を話してちょうだいな」

「名前はなくてもいいのですか」

「ええ」

「そうか、そんなら早くすればよかった。——それでいろいろ考えた末、ようやく考えついて、ヴィーナスの小指へちよつとはめたんです」

「うまいところへ気がついたのね。詩的じゃありませんか」

「ところがテニスが済んでから、すっかりそれを忘れてしまつて、しかも例の令嬢連れに田舎へ旅行してから気がついたのです。しかしいまさかどうかする事が出来ないから、それなりにして、未来の細君にはちよつとしたでき合の指環を買つて結納にしたのです」

「厭な方ね。不人情だわ」

「だって忘れたんだから仕方がない」

「忘れるなんて、不人情だわ」

「僕なら忘れないんだが、異人だから忘れちまつたんです」

「ホホホ異人だつて」

「そこで結納も滞りなく済んでから、うちへ帰つていよいよ結婚の晩に——」でわざと句を切る。

「結婚の晩にどうしたの」

「結婚の晩にね。庭のヴィーナスがどたりどたりと玄関を上がつて……」

「おおいやだ」

「どたりどたりと二階を上がつて」

「怖いわ」

「寢室の戸をあけて」

「気味がわるいわ」

「気味がわるければ、そこいらで、やめて置きましょう」

「だけれど、しまいにどうなるの」

「だから、どたり、どたりと寢室の戸をあけて」

「そこは、よしてちょうだい。ただしまいにどうなるの」

「では間を抜きましょう。——あした見たら男は冷めたくなくて死んでたそうです。

ヴィーナスに抱きつかれたところだけ紫色に変わってたと云います」

「おお、厭^{いや}だ」と眉^{まゆ}をあつめる。艶^{えん}なる人の眉をあつめたるは愛嬌^{あいぎょう}に醋^すをかけたようなものである。甘き恋に酔^えい過ぎたる男は折々のこの酸味^{さんみ}に舌を打つ。

濃くひける新月の寄り合いて、互に頭を擡げたる、うねりの下に、朧に見ゆる情けの波のかがやきを男はひたすらに打ち守る。

「奥さんはどうしたでしょう」女を憐むものは女である。

「奥さんは病氣になって、病院に這入るのです」

「癒るのですか」

「そうさ。そこまでは覚えていない。どうしたっけかな」

「癒らない法はないでしょう。罪も何もないのに」

薄きにもかかわらず豊なる下唇はふりと動いた。男は女の不平を愚かなりとは思わず、情け深しと興がる。二人の世界は愛の世界である。愛はもつとも真面目なる遊戲である。遊戲なるが故に絶体絶命の時には必ず姿を隠す。愛に戯むる余裕のある人は至幸である。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戲である。遊戲であるから浮いている。深くして浮いているものは水底の藻と青年の愛である。

「ハハハハ心配なさらんでもいいです。奥さんはきつと癒ります」と男はメリメに相談もせず受合った。

愛は迷である。また悟りである。愛は天地万有をその中に吸収して刻下に異様の生命を与える。故に迷である。愛の眼を放つとき、大千世界はことごとく黄金である。愛の心に映る宇宙は深き情けの宇宙である。故に愛は悟りである。しかして愛の空気を呼吸するものは迷とも悟とも知らぬ。ただおのずから人を引きまた人に引かる。自然は真空を忌み愛は孤立を嫌う。

「わたし、本当に御氣の毒だと思えますわ。わたしが、そんなになつたら、どうしようと思うと」

愛は己れに対して深刻なる同情を有している。ただあまりに深刻なるが故に、享樂の満足ある場合に限りて、自己を貫き出でて、人の身の上にもまた普通以上の同情を寄せゐる事ができる。あまりに深刻なるが故に失恋の場合において、自己を貫き出でて、人の身の上にもまた普通以上の怨恨を寄せる事が出来る。愛に成功するものは必ず自己を善人と思う。愛に失敗するものもまた必ず自己を善人と思う。成敗に論なく、愛は一直線である。ただ愛の尺度をもつて万事を律する。成功せる愛は同情を乗せて走る馬車馬である。失敗せる愛は怨恨を乗せて走る馬車馬である。愛はもつともわがままなるものである。

もつともわがままなる善人が二人、美しく飾りたる室に、深刻なる遊戯を演じている。室外の天下は蕭寥たる秋である。天下の秋は幾多の道也先生を苦しめつつある。幾多の高柳君を淋しがらせつつある。しかして二人はあくまでも善人である。

「この間の音楽会には高柳さんとごいつしよでしたね」

「ええ、別に約束した訳でもないんですが、途中で逢ったものですから誘ったのです。何だか動物園の前で悲しそうに立って、桜の落葉を眺めているんです。気の毒になつてね」

「よく誘つて御上げになつたのね。御病氣じゃなくつて」

「少し咳をしていたようです。たいした事じゃないでしょう」

「顔の色が大変御わるかつたわ」

「あの男はあんまり神経質だもんだから、自分で病氣をこしらえるんです。そうして慰めてやると、かえつて皮肉を云うのです。何だか近來はますます変になるようです」

「御氣の毒ね。どうなすつたんでしょう」

「どうしたって、好んで一人坊っちになつて、世の中をみんな敵のように思うんだから、手のつけようがないです」

「失恋なの」

「そんな話もきいた事もないですがね。いつそ細君でも世話をしたらいいかも知れない」

「御世話をして上げたらいいでしょう」

「世話をするって、ああ気^き六^むずかしくつちや、駄目ですよ。細君が可^{かわ}哀^{あい}想^{そう}だ」

「でも。御持ちになつたら癒^なるでしょう」

「少しは癒^かるかも知れないが、元^{がん}来^{らい}が性^し分^{よう}なんですからね。悲観する癖があるんです。

悲観病に罹^かつてるんです」

「ホホホどうして、そんな病気が出たんでしょう」

「どうしてですかね。遺伝かも知れません。それでなければ小供のうち何かあつたんでしょう」

「何か御聞^{おき}になった事はなくって」

「いいえ、僕ああまりそんな事を聞くのが嫌^きだから、それに、あの男はいつこ^{なん}う何にも打ち明けない男でね。あれがもっと淡泊^{たんぱく}に思つた事を云う風だと慰めようもあるんだくれども」

「困っていらつしやるんじゃないって」

「生活にですか、ええ、そりゃ困ってるんです。しかし無暗^{むやみ}に金をやろうなんていったら擲^たきつきますよ」

「だって御自分で御金がとれそうなものじゃありませんか、文学士だから」

「取れるですとも。だからもう少し待ってると思いますが、どうも性急^{せうかち}で卒業したあくる日からして、立派な作家になって、有名になって、そうして楽に暮らそうって云うのだから六^むずかしい」

「御国は一体どこなの」

「国は新潟県です」

「遠い所なのね。新潟県は御米の出来る所でしよう。やっぱり御百姓なの」

「農^{のう}、なんでしょう。——ああ新潟県で思い出した。この間あなたが御出^{おいで}のとき行き違^{ちが}いに出て行った男があるでしょう」

「ええ、あの長い顔の髭^{ひげ}を生^はやした。あれはなに、わたしあの人の下駄を見て吃驚^{びっくり}したわ。随分薄っぺらなのね。まるで草履^{ぞうり}よ」

「あれで泰然たるものですよ。そうしてちつとも愛嬌^{あいぎょう}のない男でね。こっちから何か話

しかけても、何にも応答をしない」

「それで何しに來たの」

「江湖雜誌の記者と云うんで、談話の筆記に來たんです」

「あなたの？ 何か話しておやりになつて？」

「ええ、あの雑誌を送つて來ているからあとで見せましょう。——それであの男について妙な話があるんです。高柳が国の中学にいた時分あの人に習つたんです——あれで文学士ですよ」

「あれで？ まあ」

「ところが高柳なんぞが、いろいろな、いたずらをして、苛めて追い出してしまつたんです」

「あの人を？ ひどい事をするのね」

「それで高柳は今となつて自分が生活に困難しているものだから、後悔して、さぞ先生も追い出されたために難義をしよう、逢つたら謝罪するつて云つてましたよ」

「全く追い出されたために、あんなに零落したんでしようか。そうすると氣の毒ね」

「それからせんだつて江湖雜誌の記者と云う事が分つたでしょう。だから音楽会の帰り

に教えてやったんです」

「高柳さんはいらしたでしよつか」

「行ったかも知れませんが」

「追い出したんなら、本当に早く御詫^{おわび}をなさる方がいいわね」

善人の会話はこれで一段落を告げる。

「どうです、あっちへ行つて、少しみんなと遊^{あそ}ぼうじゃありませんか。いやですか」

「写真は御やめなの」

「あ、すっかり忘れていた。写真は是非取らして下さい。僕はこれでなかなか美術的な奴を取るんです。うん、商売人の取るのは下等ですよ。——写真も五六年この方^{かた}大變進歩してね。今じゃ立派な美術です。普通の写真はだれが取ったって同じでしょう。近頃のは個人個人の趣味で調子がまるで違ってくるんです。いらないものを抜いたり、いったいの調子を和^{やわ}げたり、際^{きわ}どい光線の作用を全景にあらわしたり、いろいろな事をやるんです。早いものでもう景色専門家や人物専門家が出来てるんですからね」

「あなたは人物の専門家なの」

「僕？　僕は——そうさ、——あなただけの専門家になろうと思うのです」

「厭いやなかつたね」

金剛石ダイヤモンドがきらりとひらめいて、薄紅うすくれなゐの袖そでのゆるる中から細い腕かいなが男の膝ひざの方に落ちて来た。軽くあつたのは指先ばかりである。

善人の会話は写真撮影に終る。

八

秋は次第に行く。虫の音はようやく細ほそる。

筆硯ひつげんに命を籠こむる道也どうや先生は、ただ人生の一大事いちだいじいんねん因縁ちやくに着して、他たを顧かえりみるの暇いとまなきが故ゆゑに、暮るる秋の寒きを知らず、虫の音の細るを知らず、世の人のわれにつれなきを知らず、爪の先に垢あかのたまるを知らず、蛸寺たこでらの柿の落ちた事は無論知らぬ。動くべき社会をわが力にて動かすが道也先生どうやの天職である。高く、偉おおいなる、公おおやけなる、あるものの方に一歩なりとも動かすが道也先生どうやの使命である。道也先生はその他を知らぬ。

高柳君はそうは行ゆかぬ。道也先生どうやの何事をも知らざるに反して、彼は何事をも知る。往来の人の眼つきも知る。肌寒はださむく吹く風の鋭どきも知る。かすれて渡る雁かりの数も知る。

美しくしき女も知る。黄金おうごんの貴たつときも知る。木屑きくずのごとく取り扱わるる吾身わがみのはかなくて、浮世の苦しみの骨に食い入る夕々ゆうべゆうべを知る。下宿の菜さいの憐れにして芋いもばかりなるはもとより知る。知り過ぎたるが君の癖にして、この癖を増長せしめたるが君の病である。天下に、人間は殺しても殺し切れぬほどある。しかしこの病を癒なしてくれるものは一人もない。この病を癒なしてくれぬ以上は何千万人いるも、おらぬと同様である。彼は一人坊ひとりぼっちになった。己おのれに足りて人に待つ事なき呑気のんきな一人坊ひとりぼっちではない。同情に餓うえ、人間に渴かわしてやるせなき一人坊ひとりぼっちである。中野君は病氣と云う、われも病氣と思う。しかし自分を一人坊ひとりぼっちの病氣にしたものは世間である。自分を一人坊ひとりぼっちの病氣にした世間は危篤きとくなる病人を眼前に控うえて嘯ういている。世間は自分を病氣にしたばかりでは満足せぬ。半死の病人を殺さねばやまぬ。高柳君は世間を呪のろわざるを得ぬ。

道也先生から見た天地は人のためにする天地である。高柳君から見た天地は己れのためにする天地である。人のためにする天地であるから、世話をしてくれ手がなくても恨うらみとは思わぬ。己れのためにする天地であるから、己れをかまってくれぬ世を残酷うらと思う。

世話をするために生れた人と、世話をされに生れた人とはこれほど違う。人を指導す

るものと、人にたよるものとはこれほど違う。同じく一人坊っちでありながらこれほど違う。高柳君にはこの違いがわからぬ。

垢染あかじみた布団ふとんを冷やかに敷いて、五分刈ごぶりが七分ほどに延びた頭を薄ぎたない枕の上に横よつたえていた高柳君はふと眼を挙あげて庭前ていぜんの梧桐ごとうを見た。高柳君は述作をして眼がつかれると必ずこの梧桐を見る。地理学教授法を訳して、くさくさすると必ずこの梧桐を見る。手紙を書いてさえ行き詰まるときつとこの梧桐を見る。見るはずである。三坪ほどの荒庭あれにわに見るべきものは一本の梧桐を除いてはほかに何にもない。

ことにこの間から、気分がわるくて、仕事をする元気がないので、あやしげな机ぼろに頬杖づえを突いては朝な夕なに梧桐ごとうを眺めくらして、うつらうつらとしていた。

一葉落いちようちてと云う句は古い。悲しき秋は必ず梧桐から手を下くだす。ばつさりと垣にかかあわせる杓あわせの頃は、さまでに心を動かす縁よすがともならぬと油断する翌朝よくあさまたばさりと落ちる。うそ寒いからと早く繰る雨戸の外にまたばさりと音がする。葉はようやく黄ばんで来る。

青いものがしだいに衰える裏から、浮き上がるのは薄く流した脂やにの色である。脂は夜ごとを寒く明けて、濃く変って行く。婆娑たんせきたる命は旦夕せまに逼る。

風が吹く。どこから来るか知らぬ風がすうと吹く。黄ばんだ梢こずえは動ゆるぐとも見えぬ先に

一葉二葉がはらはら落ちる。あとはようやく助かる。

脂は夜ごとの秋の霜にだんだん濃くなる。脂のなかに黒い筋が立つ。箒で敲けば煎餅を折るような音がする。黒い筋は左右へ焼けひろがる。もう危うい。

風がくる。垣の隙から、椽の下から吹いてくる。危ういものは落ちる。しきりに落ちる。危ういと思う心さえなくなるほど梢を離れる。明らさまなる月がさすと枝の数が読まれるくらいあらわに骨が出る。

わずかに残る葉を虫が食う。渋色の濃いなかにぼつりと穴があく。隣りにもあく、その隣りにもぼつりぼつりとあく。一面が穴だらけになる。心細いと枯れた葉が云う。心細かろうと見ている人が云う。ところへ風が吹いて来る。葉はみんな飛んでしまう。

高柳君がふと眼を挙げた時、梧桐はすべてこれらの径路を通り越して、から坊主になつていた。窓に近く斜めに張った枝の先にただ一枚の虫食葉がかぶりついている。

「一人坊っちだ」と高柳君は口のなかで云った。

高柳君は先月あたりから、妙な咳をする。始めは気にもしなかった。だんだん腹に答えのない咳が出る。咳だけではない。熱も出る。出るかと思うとやむ。やんだから仕事をしようかと思うとまた出る。高柳君は首を傾けた。

医者に行つて見てもらおうかと思つたが、見てもらうと決心すれば、自分で自分を病氣だと認定した事になる。自分で自分の病氣を認定するのは、自分で自分の罪惡を認定するようなものである。自分の罪惡は判決を受けるまでは腹のなかで弁護するのが人情である。高柳君は自分の身体からだを医師の宣告にかからぬ先に弁護した。神経であると弁護した。神経と事実とは兄弟であると云う事を高柳君は知らない。

夜になると時々ねあせ寝汗をかく。汗で眼がさめる事がある。真暗まつくらななかで眼がさめる。この真暗さが永久続いてくれればいいと思う。夜があけて、人の声がして、世間が存在しているゐると云う事がわかると苦痛である。

暗いなかをなお暗くするために眼を眠ねむつて、夜着よぎのなかへ頭をつき込んで、もうこれぎり世の中へ顔が出したくない。このまま眠りに入つて、眠りから醒さめぬ間に、あの世に行つたら結構だろうと考えながら寝る。あくる日になると太陽は無慈悲にも赫奕かくえきとして窓を照らしている。

時計を出しては一日に脈みやくを何遍となく験けんして見る。何遍験しても平脈へいみやくではない。早く打ち過ぎる。不規則に打ち過ぎる。どうしても尋常には打たない。痰たんを吐はくたびに眼を皿のようにして眺ながめる。赤いものの見えないのが、せめてもの慰安である。

痰に血の交らぬのを慰安とするものは、血の交る時にはただ生きているのを慰安とせねばならぬ。生きているだけを慰安とする運命に近づくかも知れぬ高柳君は、生きているだけを厭う人である。人は多くの場合においてこの矛盾を冒す。彼らは幸福に生きるのを目的とする。幸福に生きんがためには、幸福を享受すべき生そのものの必要を認めぬ訳には行かぬ。単なる生命は彼らの目的にあらずとするも、幸福を享得る必須条件として、あらゆる苦痛のもとに維持せねばならぬ。彼らがこの矛盾を冒して塵界に流転するとき死なんとして死ぬ能わず、しかも日ごとに死に引き入れらるる事を自覚する。負債を償うの目的をもつて月々に負債を新たにしつつあると変りはない。これを悲酸なる煩悶と云う。

高柳君は床のなかから這い出した。瓦斯糸の蚊緋の綿入の上から黒木綿の羽織を着る。机に向う。やっぱり翻訳をする了簡である。四五日そのままにして置いた机の上には、障子の破れから吹き込んだ砂が一面に軽くたまっている。硯のなかは白く見える。高柳君は面倒だと見えて、塵も吹かずに、上から水をさした。水入に在る水ではない。五六輪の豆菊を挿した硝子の小瓶を花ながら傾けて、どつと硯の池に落した水である。さかに磨り減らした古梅園をしきりに動かすと、じやりじやり云う。高柳君は不愉快の

眉まゆをあつめた。不愉快の起る前に、不愉快を取り除く面倒をあえてせずして、不愉快の起った時に唇くちびるを嚙かむのはかかる人の例である。彼は不愉快を忍ぶべく余り鋭敏である。しかしてあらかじめこれに備うべくあまり自棄じきである。

机上に原稿紙を展のべた彼は、一時間ほど呻しん吟ぎんしてようやく二三枚黒くしたが、やがて打ちやるように筆を擱おいた。窓の外には落ち損そくなつた一枚の桐きりの葉が淋しく残つてゐる。

「一人坊ひとりぼつちだ」と高柳君は口のうちにまた繰り返した。

見るうちに、葉は少しく上に揺れてまた下に揺れた。いよいよ落ちる。と思う間に風ははたとやんだ。

高柳君は巻紙を出して、今度は故里ふるさとの御母おつかさんの所へ手紙を書き始めた。「寒氣かんき相加そふわり候処そうふにんづか如何御暮あてはにそし被遊候あいかわらずや。不相変御丈夫の事ようさつたてまつそと奉遥察候。私事も無事」とまでかいて、しばらく考えていたが、やがてこの五六行を裂いてしまった。裂いた反古ほごを口へ入れてくちやくちや嚙かんでいると思つたら、ぽつと黒いものを庭へ吐き出した。

一人坊ひとりぼつちの葉がまた揺れる。今度は右へ左へ二三度首を振る。その振りがようやく収おさまつたと思う頃、颯さつと音がして、病葉わづらばはぽたりと落ちた。

「落ちた。落ちた」と高柳君はさも落ちたらしく云った。

やがて三尺の押入を開けて茶色の中折を取り出す。門口へ出て空を仰ぐと、行く秋を重いものが上から囲んでいる。

「御婆さん、御婆さん」

はいと婆さんが雑巾を刺す手をやめて出て来る。

「傘をとって下さい。わたしの室の椽側にある」

降れば傘をさすまでも歩く考である。どこと云う目的もないがただ歩くつもりなのである。電車の走るのは電車が走るのだが、なぜ走るのだから電車にもわかるまい。高柳君は自分があるだけでは承知している。しかしなぜあるくのだから電車のごとく無意識である。用もなく、あてもなく、またあるきたくもないものを無理にあるかせるのは残酷である。残酷があるかせるのだから敵は取れない。敵が取りたければ、残酷を製造した発頭人に向うよりほかに仕方がない。残酷を製造した発頭人は世間である。高柳君はひとり敵の中をあるいている。いくら、あるいてもやつぱり一人坊っちである。

ぼつりぼつりと折々降ってくる。初時雨と云うのだろう。豆腐屋の軒下に豆を絞った殻が、山のように桶にもってある。山の頂がぼくりと欠けて四面から煙が出る。風に連

れて煙は往来へ靡く。塩物屋に鮭の切身が、渋びた赤い色を見せて、並んでいる。隣りに、しらす干がかたまつて白く反り返る。鯉節屋の小僧が一生懸命に土佐節をささらで磨いている。ぴかりぴかりと光る。奥に婚礼用の松が真青に景気を添える。葉茶屋では丁稚が抹茶をゆつくりゆつくり臼で挽いている。番頭は往来を睨めながら茶を飲んでゐる。――「えつ、あぶねえ」と高柳君は突き飛ばされた。

黒紋付の羽織に山高帽を被つた立派な紳士が綱曳で飛んで行く。車へ乗るものは勢がいい。あるくものは突き飛ばされても仕方がない。「えつ、あぶねえ」と拳突を喰わされても黙つておらねばならん。高柳君は幽霊のようにあるいている。

青銅の鳥居をくぐる。敷石の上に鳩が五六羽、時雨の中を遠近している。唐人髻に結つた半玉が渋蛇の目をさして鳩を見ている。あらい八丈の羽織を長く着て、素足を爪皮のなかへさし込んで立つた姿を、下宿の二階窓から書生が顔を二つ出して評している。柏手を打つて鈴を鳴らして御賽銭をなげ込んだ後姿が、見ている間にこちへ逆戻をする。黒縮緬へ三つ柏の紋をつけた意気な芸者がすれ違ふときに、高柳君の方に一瞥の秋波を送った。高柳君は鉛を背負つたような重い心持ちになる。

石段を三十六おりる。電車がごうごうと通る。岩崎の塀が冷酷に聳えている。あ

の塀へ頭をぶつけて壊してやろうかと思う。時雨はいつか休んで電車の停留所に五六人待っている。背の高い黒紋付が蝙蝠傘を畳んで空を仰いでいた。

「先生」と一人坊つちの高柳君は呼びかけた。

「やあ妙な所で逢いましたね。散歩かね」

「ええ」と高柳君は答えた。

「天氣のわるいによく散歩するですね。——岩崎の塀を三度周るといい散歩になる。

ハハハハ」

高柳君はちよつといい心持ちになった。

「先生は？」

「僕ですか、僕はなかなか散歩する暇なんかないです。不相変多忙でね。今日はちよつと上野の図書館まで調べ物に行ったです」

高柳君は道也先生に逢うと何だか元氣が出る。一人坊つちでありながら、こう平氣にしている先生が現在世のなかにあると思うと、多少は心丈夫になると見える。

「先生もう少し散歩をなさいませんか」

「そう、少しなら、してもいい。どっちの方へ。上野はもうよそう。今通つて来たばか

りだから」

「私はどっちでもいいのです」

「じゃ坂を上あがつて、本郷の方へ行きましょう。僕はあっちへ帰るんだから」

二人は電車の路を沿うてあるき出した。高柳君は一人坊つちが急に二人坊つちになつたような気がする。そう思うと空も広く見える。もう綱つな曳ひきから突き飛ばされる氣遣きづかいはあ
るまいとまで思う。

「先生」

「何ですか」

「さつき、車屋から突き飛ばされました」

「そりゃ、あぶなかった。怪けが我をしやしませんか」

「いいえ、怪我はしませんが、腹は立ちました」

「そう。しかし腹を立てても仕方がないでしょう。——しかし腹も立てようによるですな。昔し渡辺わたなべ崙山かさざんが松平侯の供先ともさきに粗忽そこつで突き当ってひどい目に逢あつた事がある。崙山がその時の事を書いてね。——松平侯御横行——と云つてるですが。この御・横・行の三字が非常に面白いじゃないですか。尊たつとんで御おんの字をつけてるがその裏に立派な反抗心があ

る。気概がある。君も綱引御横行と日記にかくさ」

「松平侯って、だれですか」

「だれだか知れやしない。それが知れるくらいなら御横行はしないですよ。その時発憤した崋山はいまだに生きてるが、松平某なるものは誰も知りやしない」

「そう思うと愉快ですが、岩崎の塀^{へい}などを見ると頭をぶつけて、壊^{こわ}してやりたくありません」

「頭をぶつけて、壊せりや、君より先に壊してるものがあるかも知れない。そんな愚^ぐな事を云わずに正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです」

「その創作をさせてくれないのです」

「誰が」

「誰がって訳じゃないですが、出来ないのです」

「からだでも悪いですか」と道也先生横から覗^{のぞ}き込む。高柳君の頬^{ほお}は熱を帯びて、蒼^{あお}い中から、ほてっている。道也は首を傾けた。

「君坂^{きみ}を上^あがると呼吸^{いき}が切れるようだが、どこか悪いじゃないですか」

強^しいて自分にさえ隠そうとする事を言いあてられると、言いあてられるほど、明白な事実であつたかと落胆^{がっかり}する。言いあてられた高柳君は暗い穴の中へ落ちた。人は知らず、かかる冷酷なる同情を加えて憚^{はば}からぬが多い。

「先生」と高柳君は往來に立ち留^{たど}まつた。

「何ですか」

「私は病人に見えるでしょうか」

「ええ、まあ、——少し顔色は悪いです」

「どうしても肺病でしょうか」

「肺病？ そんな事はないです」

「いいえ、遠慮なく云つて下さい」

「肺の氣^けでもあるんですか」

「遺伝です。おやじは肺病で死にました」

「それは……」と云つたが先生返答に窮した。

膀胱^{ぼうこう}にはち切れるばかり水を詰めたのを針ほどの穴に洩^もらせば、針ほどの穴はすぐ白銅ほどになる。高柳君は道也の返答をきかぬがごとくに、しゃべってしまう。

「先生、私の歴史を聞いて下さいますか」

「ええ、聞きますとも」

「おやじは町で郵便局の役人でした。私が七つの年に拘引こういんされてしまいました」

道也先生は、だまったまま、話し手といっしょにゆるく歩ほを運ばして行く。

「あとで聞くと官金を消費したんだそうで——その時はなんにも知りませんでした。母にきくと、おとっさんは今に帰る、今に帰ると云ってました。——しかしとうとう帰って来ません。帰らないはずです。肺病になつて、牢屋ろうやのなかで死んでしまったんです。それもずっとあとで聞きました。母は家を畳んで村へ引き込みました。……」

向むかから威勢いせいのいい車が二挺束髪にちようそくはつの女を乗せてくる。二人はちよつとよける。話はとぎれる。

「先生」

「何ですか」

「だから私には肺病の遺伝があるんです。駄目です」

「医者に見せたですか」

「医者には——見せません。見せたって見せなくなつたって同じ事です」

「そりゃ、いけない。肺病だつて癒なおらんとは限らない」

高柳君は気味の悪い笑いを洩もらした。時雨しぐれがはらはらと降つて来る。からたち寺でうらの門の扉に碧巖録へきがらんくろく提唱ていしょうと貼はりつけた紙が際立きわだつて白く見える。女学校から生徒がぞろぞろ出てくる。赤や、紫や、海老茶えびぢやの色が往来へちらばる。

「先生、罪惡も遺伝するものでしょうか」と女学生の間を縫いながら歩ほを移しつつ高柳君が聞く。

「そんな事があるものですか」

「遺伝はしないでも、私は罪人の子です。切せつないです」

「それは切ないに違いない。しかし忘れなくっちゃいけない」

警察署から手錠てじょうをはめた囚人が二人、巡査に護送されて出てくる。時雨しぐれが囚人の髪にかかる。

「忘れても、すぐ思い出します」

道也先生は少し大きな声を出した。

「しかしあなたの生涯しょうがいは過去にあるんですか未来にあるんですか。君はこれから花が咲く身ですよ」

「花が咲く前に枯れるんです」

「枯れる前に仕事をするんです」

高柳君はだまっている。過去を顧みれば罪である。未来を望めば病氣である。現在は麵麩のためにする写字である。

道也先生は高柳君の耳の傍へ口を持って来て云った。

「君は自分だけが一人坊っちだと思いかも知れないが、僕も一人坊っちですよ。一人坊っちは崇高なものです」

高柳君にはこの言葉の意味がわからなかった。

「わかったですか」と道也先生がきく。

「崇高——なぜ……」

「それが、わからなければ、とうてい一人坊っちでは生きていられません。——君は人より高い平面にいると自信しながら、人がその平面を認めてくれないために一人坊っちなのでしょうか。しかし人が認めてくれるような平面ならば人も上ってくる平面です。芸者や車引に理會されるような人格なら低いにきまっています。それを芸者や車引も自分と同等なものと思い込んでしまうから、先方から見くびられた時腹が立ったり、煩悶する

のです。もしあんなものと同等なら創作をしたって、やっぱり同等の創作しか出来ない訳だ。同等でなければこそ、立派な人格を発揮する作物さくぶつも出来る。立派な人格を発揮する作物が出来なければ、彼らからは見くびられるのはもつともでしょう」

「芸者や車引はどうでもいいですが……」

「例はだれだって同じ事です。同じ学校を同じに卒業した者だって変りはありません。

同じ卒業生だから似たものだろうと思うのは教育の形式が似ているのを教育の実体が似ているものと考え違ちがひした議論です。同じ大学の卒業生が同じ程度のものであったら、大学の卒業生はことごとく後世に名を残すか、またはことごとく消えてしまわなくてはならない。自分こそ後世に名を残そうと力りきむならば、たとい同じ学校の卒業生にもせよ、ほかのものは残らないのだと云う事を仮定してかからなければなりません。すでにその仮定があるなら自分と、ほかの人とは同様の学士であるにもかかわらずすでに大差別があると自認した訳じゃありませんか。大差別があると自任しながら他ひとが自分を解してくれんと云って煩悶するのは矛盾です」

「それで先生は後世に名を残すおつもりでやっていらっしゃるんですか」

「わたしのは少し、違います。今の議論はあなたを本位にして立てた議論です。立派な

作物を出して後世に伝えたいと云うのが、あなたの御希望のようだから御話しをしたのです」

「先生のが承る事が出来るなら、教えて頂けますまいか」

「わたしは名前なんてあてにならないものはどうでもいい。ただ自分の満足を得るために世のために働くのです。結果は悪名になろうと、臭名になろうと氣狂になろうと仕方がない。ただこう働かなくなつては満足が出来ないから働くまでの事です。こう働かなくなつて満足が出来ないところをもつて見ると、これが、わたしの道に相違ない。人間は道に従うよりほかにやりようのないものだ。人間は道の動物であるから、道に従うのが一番貴いのだらうと思つています。道に従う人は神も避けねばなんのです。岩崎の堀なんか何でもない。ハハハハ」

剥げかかった山高帽を阿弥陀に被つて毛繻子張りの蝙蝠傘をさした、一人坊っちの腰弁当の細長い顔から後光がさした。高柳君ははつと思う。

往來のものは右へ左へ行く。往來の店は客を迎え客を送る。電車は出来るだけ人を載せて東西に走る。織るがごとき街の中に喪家の犬のごとく歩む二人は、免職になりたての属官と、墮落した青書生と見えるだらう。見えても仕方がない。道也はそれでたくさ

んだと思う。周作はそれではならぬと思う。二人は四丁目の角でわかれた。

九

小春の日に温め返された別荘の小天地を開いて結婚の披露をする。

愛は偏狭を嫌う、また専有をにくむ。愛したる二人の間に有り余る情を挙げて、博く衆生を潤おす。有りあまる財を抛つて多くの賓格を会す。来らざるものは和楽の扇に摩く風を厭うて、寒き雪空に赴く鳧雁の類である。

円満なる愛は触れるところのすべてを円満にす。二人の愛は曇り勝ちなる時雨の空さえも円満にした。――太陽の真上に照る日である。照る事は誰でも知るが、だれも手を翳して仰ぎ見る事のならぬくらい明かに照る日である。得意なるものに明かなる日の嫌なものはない。客は車を駆つて東西南北より来る。

杉の葉の青きを挾んで、丸柱の太きを装い、頭の上一丈にて二本を左右より平に曲げて続き合せたるをアーチと云う。杉の葉の青きはあまりに厳に過ぐ。愛の郷に入るものは、ただおごそかなる門を潜るべからず。青きものは暖かき色に和げられねばならぬ。

裂けば煙る蜜柑の味はしらず、色こそ暖かい。小春の色は黄である。点々と珠を綴る杉の葉影に、ゆたかなる南海の風は通う。紫に明け渡る夜を待ちかねて、ぬつと出る旭日が、岡より岡を射て、万顆の黄玉は一時に耀く紀の国から、偷み来た香里と思われ。この下を通るものは酔わねば出る事を許されぬ掟である。

アーチ
緑門の下には新しき夫婦が立っている。すべての夫婦は新らしくなければならぬ。新しき夫婦は美しくなければならぬ。新しく美しき夫婦は幸福でなければならぬ。彼らはこの緑門の下に立って、迎えたる賓客にわが幸福の一分を与え、送り出す朋友にわが幸福の一分を与えて、残る幸福に共白髪の長き末までを耽るべく、新らしいのである、また美しいのである。

男は黒き上着に縞の洋袴を穿く。折々は雪を欺く白き手拭が黒き胸のあたりに漂う。女は紋つきである。裾を色どる模様の華やかなるなかから浮き上がるがごとく調子よくすらりと腰から上が抜け出でている。ヴィーナスは浪のなかから生れた。この女は裾模様
様のなかから生れている。

日は明かに女の頸筋に落ちて、角だたぬ咽喉の方はほの白き影となる。横から見るときその影が消えるがごとく薄くなって、判然としたやさしき輪廓に終る。その上に紫の

うずまくは一朵の暗き髪を束ねながらも額際に浮かせたのである。金台に深紅の七宝を鑲めたヌーボー式の簪が紫の影から顔だけ出している。

愛は堅きものを忌む。すべての硬性を溶化せねばやまぬ。女の眼に耀く光りは、光りそれ自からの溶けた姿である。不可思議なる神境から双眸の底に漂うて、視界に入る万有を恍惚の境に逍遙せしむる。迎えられたる賓客は陶然として園内に入る。

「高柳さんはいらっしやるでしょうか」と女が小さな声で聞く。

「え？」と男は耳を持つてくる。園内では楽隊が越後獅子を奏している。客は半分以上集まった。夫婦はなかへ這入って接待をせねばならん。

「そうさね。忘れていた」と男が云う。

「もうだいたい御客さまがいらしたから、向へ行かないじゃわるいでしょう」

「そうさね。もう行く方がいいだろう。しかし高柳がくると可哀想だからね」

「ここにいらっしやらないのですか」

「うん。あの男は、わたしが、ここに見えないと門まで来て引き返すよ」

「なぜ？」

「なぜって、こんな所へ来た事はないんだから——一人で一人坊つちになる男なんだか

ら——、ともかくもアーチを潜くぐらせてしまわないと安心が出来ない」

「いらっしやるんでしょうね」

「来るよ、わざわざ行つて頼んだんだから、いやでも来ると約束すると来ずにいられない男だからきつとくるよ」

「御お厭いやなんですか」

「厭いやつて、なに別に厭いやな事もないんだが、つまりきまりがわるいのさ」

「ホホホ妙ですわね」

きまりのわるいのは自信がないからである。自信がないのは、人が馬鹿にすると
からである。中野君はただきまりが悪いからだと言う。細君はただ妙ですわねと思う。
この夫婦は自分達のきまりを悪わるるが事は忘れている。この夫婦の境界きょうがいにある人は、い
くらきまりを悪わるるが性分しょうぶんでも、きまりをわるがらずに生涯しょうがいを済ませる事が出来る。

「いらっしやるなら、ここにいて上げる方がいいでしょう」

「来る事は受け合うよ。——いいさ、奥はおやじや何かだいぶいるから」

愛は善人である。善人はその友のために自家の不都合を犠牲にするを憚はばからぬ。夫婦
は高柳君のためにアーチの下に待っている。高柳君は来ねばならぬ。

馬車の客、車の客の間に、ただ一人高柳君は蹠踉そうろうとして敵地に乗り込んで来る。この海のごとく和氣の漲りたる園遊会——新夫婦の面に湛おもてえたる笑の波に酔うて、われ知らず幸福の同化を享くる園遊会——行く年をしばらくは春に戻して、のどかなる日影に、窮陰きゆういんの面のあたりなるを忘るべき園遊会が高柳君にとって敵地である。

富と勢と得意と満足の跋扈する所は東西球を極めて高柳君には敵地である。高柳君はアーチの下に立つ新しき夫婦を十歩の遠きに見て、これがわが友であるとはたしかに思わなかった。多少の不都合を犠牲にしてまで、高柳君を待ち受けたる夫婦の眼に高柳君の姿がちらと映じた時、待ち受けたにもかかわらず、待ち受け甲斐のある御客とは夫婦共に思わなかった。友誼ゆうぎの三分一は服装が引き受ける者である。頭のなかで考えた友達と眼の前へ出て来た友達とはだいぶ違う。高柳君の服装はこの日の来客中でもっとも憐れなる服装である。愛は贅沢ぜいたくである。美なるもののほかには価値を認めぬ。女はなおさらに価値を認めぬ。

夫婦が高柳君と顔を見合せた時、夫婦共「これは」と思った。高柳君が夫婦と顔を見合せた時、同じく「これは」と思った。

世の中は「これは」と思った時、引き返せぬものである。高柳君は蹠踉そうろうとして進んで

くる。夫婦の胸にはつきざした「これは」は、すぐと愛の光りに姿をかくす。

「やあ、よく来てくれた。あまり遅いから、どうしたかと思って心配していたところだった」偽りもない事実である。ただ「これは」と思った事だけを略したまでである。

「早く来ようと思ったが、つい用があつて……」これも事実である。けれどもやはり「これは」が略されている。人間の交際にはいつでも「これは」が略される。略された「これは」が重なると、喧嘩なしの絶交となる。親しき夫婦、親しき朋友が、腹のなかの「これは、これは」でなし崩しに愛想をつかし合っている。

「これが妻だ」と引き合わせる。一人坊うちに美しい妻君を引き合わせるのは好意より出た罪惡である。愛の光りを浴びたものは、嬉しさがはびこつて、そんな事に頓着はない。

何にも云わぬ細君はただしとやかに頭を下げた。高柳君はぼんやりしている。

「さあ、あちらへ——僕もいっしょに行こう」と歩を運らす。十間ばかりあるくと、夫婦はすぐ胡麻塩おやじにつらまつた。

「や、どうもみごとな御庭ですね。こう広くはあるまいと思つてたが——いえ始めてで。おとっさんから時々御招きはあつたが、いつでも折悪しく用事があつて——どう

も、よく御手入れが届いて、実に結構ですね……」

と胡麻塩はのべつに述べたてて容易に動かない。ところへまた二三人がやってくる。

「結構だ」「何坪ですか」「私も年来この辺を心掛けておりますが」などと新夫婦を取り捲いてしまう。高柳君は憮然として中心をはずれて立っている。

すると向うから、襷がけの女が駆けて来て、いきなり塩瀬の五つ紋をつらまえた。

「さあ、いらっしやい」

「いらっしやいたって、もうほかで御馳走になっちまったよ」

「ずるいわ、あなたは、他にこれほど馳けずり廻らせて」

「旨いものも、ない癖に」

「あるわよ、あなた。まあいいからいらっしやいてえのに」とぐいぐい引つ張る。塩瀬は羽織が大事だから引かれながら行く、途端に高柳君に突き当たった。塩瀬はちよつと驚ろいて振り向いたまでは、粗忽をして恐れ入ったと云う面相をしていたが、高柳君の顔から服装を見るや否や、急に表情を変えた。

「やあ、こりゃ」と上からさげすむように云って、しかも立って見ている。

「いらっしやいよ。いいからいらっしやいよ。構わないでも、いいからいらっしやい

よ」と女は高柳君を後目^{しりめ}にかけたなり塩瀬を引つ張つて行く。

高柳君はぼつぼつ歩き出した。若夫婦は遙^{はる}かあなたに遮^{さへぎ}られていつしよにはなれぬ。芝生^{しばふ}の真中に長い天幕^{テント}を張る。中を覗^{のぞ}いて見たら、暗い所に大きな菊の鉢^{はち}がならべてある。今頃こんな菊がまだあるかと思う。白い長い花卉が中心から四方へ数百片延び尽して、延び尽した端^{はじ}からまた随意に反^そり返りつつ、あらん限りの狂態を演じているのがあつた。背筋^{せすじ}の通つた黄な片^{ひら}が中へ中へと抱き合つて、真中に大切なものを守護することく、こんもりと丸くなつたのもある。松の鉢も見える。玻璃盤^{はりばん}に堆^{うずた}かく林檎^{りんご}を盛つたのが、白い卓布^{たくふ}の上に鮮^{あざ}やかに映る。林檎の頬が、暗きうちにも光っている。蜜柑を盛つた大皿もある。傍^{そば}でけけらと笑う声^{こゑ}がする。驚ろいて振り向くと、しるくはつとを被^{かぶ}つた二人の若い男が、二人共相好^{そうごう}を崩^{くず}している。

「妙だよ。実に」と一人が云う。

「珍だね。全く田舎者^{いなかもの}なんだよ」と一人が云う。

高柳君はじつと二人を見た。一人は胸開^{むねあき}の狭い。模様のある胴衣^{チョッキ}を着て、右手の親指を胴衣のぼつけつとへ突き込んだまま肘^{ひじ}を張っている。一人は細い杖^{つえ}に言訳^{いいわけ}ほどに身をもたせて、護謨^{ゴム}びき靴の右の爪先^{つまさき}を、豎^{たて}に地に突いて、左足一本で細長いからだの中心

を支^{ささ}えている。

「まるで給仕^{ウエーター}人だ」と一本足が云う。

高柳君は自分の事を云うのかと思った。すると色胴衣が

「本当にさ。園遊会に燕尾服^{えんびふく}を着てくるなんて——洋行しないだつてそのくらいな事はわかりそうなものだ」と相鎚^{あいづち}を打っている。向うを見るとなるほど燕尾服がいる。しかも二人かたまつて、何か話をしている。同類相集まると云う訳だろう。高柳君はようやくあれを笑つてゐるのだなと気がついた。しかしなぜ燕尾服が園遊会に適しないかはどうして想像がつかなかった。

芝生の行き当りに葭簀^{よしず}掛けの踊舞台^{おどりぶたい}があつて、何かしきりにやつている。正面は紅白の幕で庇^{ひさし}をかこつて、奥には赤い毛氈^{もうせん}を敷いた長い台がある。その上に三味線を抱えた女が三人、抱えないのが二人並んでいる。弾^ひくものと唄^{うた}うものと分業にしたのである。舞台の真中に金紙^{きんがみ}の烏帽子^{えぼし}を被^{かぶ}つて、真白に顔を塗^ぬりたてた女が、棹^{さお}のようなものを持つたり、落したり、舞扇^{まいあふぎ}を開いたり、つばめたり、長い赤い袖^{そで}を翳^{かざ}したり、翳さなかつたり、何でもしきりに身振^{しな}をしている。半紙に墨黒々と朝妻船^{あさづまふね}とかいて貼^はり出しているから、おおかた朝妻船と云うものだろうと高柳君はしばらく後ろの方から小さく

なつて眺めていた。

舞台を左へ切れると、御影の橋がある。橋の向の築山の傍手には松が沢山ある。松の間から暖簾のようなものがちらちら見える。中で女がききと笑っている。橋を渡りかけた高柳君はまた引き返した。楽隊が一度に満庭の空気を動かして起る。

そろそろと天幕の所まで帰つて来る。今度は中を覗くのをやめにした。中は大勢でがやがやしている。入口へ回つて見ると人で埋つて皿の音がしきりにする。若夫婦はどこにいるか見えぬ。

しばらく様子を窺つていると突然万歳と云う声がした。楽隊の音は消されてしまふ。石橋の向うで万歳と云う返事がある。これは迷子の万歳である。高柳君はのそりと疳違をした客のように天幕のうちに這入った。

皿だけ高く差し上げて人と人の間を抜けて来たものがある。

「さあ、御上んなさい。まだあるんだが人が込んでて容易に手が届かない」と云う。高柳君は自分にくれるにしては目の見当が少し違ふと思つたら、後ろの方で「ありがとう」と云う涼しい声がした。十七八の桃色縮緬の紋付をきた令嬢が皿をもらつたまま立っている。

傍にいた紳士が、天幕の隅から一脚の椅子を持って来て、

「さあこの上へ御乗せなさい」と令嬢の前に据えた。高柳君は一聞ばかり左へ進む。天幕の柱に倚りかかつて洋服と和服が煙草をふかしている。

「葉巻はやめたのかい」

「うん、頭にわるいそうだから——しかしあれを吞みつけると、何だね、紙巻はどうてい吞めないね。どんな好い奴でも駄目だ」

「そりゃ、価段だけだから——一本三十銭と三銭とは比較にならないからな」

「君は何を吞むのだい」

「これを一つやって見たまえ」と洋服が鱉皮の煙草入から太い紙巻を出す。

「なるほどエジプシアンか。これは百本五六円するだろう」

「安い割にはうまく吞めるよ」

「そうか——僕も紙巻でも始めようか。これなら日に二十本ずつにしても二十円ぐらいであるからね」

二十円は高柳君の全収入である。この紳士は高柳君の全収入を煙にするつもりである。

高柳君はまた左へ四尺ほど進んだ。二三人話をしている。

「この間ね、野添のぞえが例の人造肥料会社を起すので……」と頭の禿はげた鼻の低い金齒を入れた男が云う。

「うん。ありや当ったね。旨うまくやったよ」と真四角な色の黒い、煙草入の金具のような顔が云う。

「君も賛成者のうちに名が見えたじゃないか」と胡麻塩頭ごましおたまの最前中野君さいぜんを途中で強奪ごうだつしたおやじが云う。

「それさ」と今度は禿はげの番である。「野添が、どうです少し持つてくれませんかと云うから、さようさ、わたしは今回はまあよしましようと思つたのさ。ところが、まあ、そう云わずと、せめて五百株でも、実はもう貴所あなたの名前にしてあるんだからと云うのさ、面倒だからいい加減に挨拶あいさつをして置いたら先生すぐ九州へ立つて行つた。それから二週間ほどして社へ出ると書記が野添さんの株が大変あが上りました。五十円株が六十五円になりました。合計三万二千五百円になりましたと云うのさ」

「そりや豪勢だ、実は僕も少し持つてたんだが」と四角が云うと

「ありや實際意外だった。あんなに、とんとん拍子びょうしにあがろうとは思わなかった」と胡

麻塩ましおがしきりに胡麻塩頭かを搔く。

「もう少し踏み込んで沢山僕の名にして置けばよかった」と禿はげは三万二千五百円以外に残念がつている。

高柳君は恐る恐る三人の傍そばを通り抜けた。若夫婦に逢あつて挨拶して早く帰りたいと思つて、見廻わすと一番奥の方に二人は黒いフロックと五色そでの袖に取り巻かれて、なかなか寄りつけそうもない。食卓はようやく人数が減つた。しかし残っている食品はほとんどない。

「近頃は出掛けるかね」と云う声がする。仙台平せんだいひらをずるずる地びたへ引きずつて白足袋しろたびに鼠緒ねずおの雪駄せったをかすかに出した三十恰好がっこうの男だ。

「昨日須崎すさきの種田家たねだけの別荘へ招待されて鴨獵かもりようをやつた」と五分刈ごぶがりの浅黒いのが答えた。

「鴨にはまだ早いだろう」

「もういいね。十羽ばかり取つたがね。僕が十羽、大谷おおたにが七羽、加瀬かせと山内やまのうちが八羽ずつ」

「じゃ君が一番か」

「いいや、斎藤は十五羽だ」

「へえ」と仙台平は感心している。

同期の卒業生は多いなかに、たった五六人しか見えん。しかもあまり親しくないものばかりである。高柳君は挨拶だけして別段話もしなかったが、今となって見ると何だか恋しい心持ちがする。どこぞにおりはせぬかと見廻したが影も見えぬ。ことによると帰ったかも知れぬ。自分も帰ろう。

主客は一である。主を離れて客なく、客を離れて主はない。吾々が主客の別を立てて物我の境を判然と分割するのは生存上の便宜である。形を離れて色なく、色を離れて形なき強いて個別するの便宜、着想を離れて技巧なく技巧を離れて着想なきをしばらく両体となすの便宜と同様である。一たびこの差別を立したる時吾人は一の迷路に入る。ただ生存は人生の目的なるが故に、生存に便宜なるこの迷路は入る事いよいよ深くして出づる事いよいよかたきを感じず。独り生存の欲を一刻たりとも擺脫したるときにこの迷は破る事が出来る。高柳君はこの欲を刹那も除去し得ざる男である。したがって主客を方寸に一致せしむる事のできがたき男である。主は主、客は客としてどこまでも膠着するが故に、一たび優勢なる客に逢うとき、八方より無形の太刀を揮って、打ちのめさるるがごとき心地がする。高柳君はこの園遊会において孤軍重囲のうちに陥ったのである。

蹠跟そうろうとしてアーチを潜くぐった高柳君はまた蹠跟としてアーチを出いざるを得ぬ。遠くから振り返って見ると青い杉の環わの奥の方に天幕テントが小さく映って、幕のなかから、奇麗きれいな着物がかたまつてあらわれて来た。あのなかに若い夫婦も交つてるのである。

夫婦の方では高柳をさがしている。

「時に高柳はどうしたろう。御前おまえあれから逢あつたかい」

「いいえ。あなたは」

「おれは逢わない」

「もう御歸りになつたんでしうか」

「そうさ、——しかし歸るなら、ちつとは歸る前に傍そばへ来て話でもしそうなものだ」

「なぜ皆さんのいらっしゃる所へ出ていらっしゃらないのですしう」

「損だね、ああ云う人は。あれで一人じゃやっぱり不愉快なんだ。不愉快なら出てくれ
ばいいのになおなお引き込んでしまふ。気の毒な男だ」

「せっかく愉快にしてあげようと思つて、御招きするのにな」

「今日は格別色がわるかつたようだ」

「きつと御病氣ですよ」

「やつぱり一人坊^{ひとりぼ}つちだから、色が悪いのだよ」

高柳君は往来をあるきながら、ぞつと悪寒^{おかん}を催^{もよお}した。

十

道也^{どうや}先生長い顔を長くして煤竹^{すすだけ}で囲^{まる}った丸火桶^{ひおけ}を擁^{よう}している。外^{こからし}を木枯^{こからし}が吹いて行く。

「あなた」と次の間^まから妻君が出てくる。紬^{つむぎ}の羽織の襟^{えり}が折れていない。

「何だ」とこつちを向く。机の前^{しゅうじつこからし}におりながら、終日^{しゅうじつ}木枯^{こからし}に吹き曝^{さら}されたかのごとくに見える。

「本は売れたのですか」

「まだ売れないよ」

「もう一カ月も立てば百や貳百の金^はは這入^{はい}る都合だとおっしゃったじゃありませんか」

「うん言った。言ったには相違^{ちが}ないが、売れない」

「困るじゃござんせんか」

「困るよ。御前おまえよりおれの方が困る。困るから今考えてるんだ」

「だって、あんなに骨を折って、三百枚も出来てるものを――」

「三百枚どころか四百三十五頁ある」

「それで、どうして売れないんでしょう」

「やっぱり不景気なんだろうよ」

「だろぅよじゃ困りますわ。どうか出来ないでしょうか」

「南溟堂なんめいどうへ持つて行った時には、有名な人の御序文があればと云うから、それから足立あだちなら大学教授だから、よかろうと思って、足立にたのんだのさ。本も借金と同じ事で保証人がないと駄目だぜ」

「借金は借りるんだから保証人もいるでしょうが――」と妻君頭のなかへ人指ひとさしゆびを入れてぐいぐい搔かく。束髪そくはつが揺れる。道也はその頭を見ている。

「近頃の本は借金同様だ。信用のないものは連帯責任でないと出版が出来ない」

「本当につまらないわね。あんなに夜遅くまでかかって」

「そんな事は本屋の知らん事だ」

「本屋は知らないでしょうさ。しかしあなたは御存じでしょう」

「ハハハハ当人は知ってるよ。御前も知ってるだろう」

「知ってるから云うのでさあね」

「言ってくれても信用がないんだから仕方がない」

「それでどうなさるの」

「だから足立の所へ持つて行つたんだよ」

「足立さんが書いてやるとおっしゃって」

「うん、書くような事を云うから置いて来たら、またあとから書けないって断わつて来た」

「なぜでしょう」

「なぜだか知らない。厭いやなのだろう」

「それであなはそのままにして御置きになるんですか」

「うん、書かんのを無理に頼む必要はないさ」

「でもそれじゃ、うちの方が困りますわ。この間御兄おあにいさんに判を押して借りて頂いた御金ももう期限が切れるんですから」

「おれもその方を埋うめるつもりでいたんだが——売れないから仕方がない」

「馬鹿馬鹿しいのね。何のために骨を折ったんだか、分りやしない」

道也先生は火桶ひおけのなかの炭団たどんを火箸ひばしの先で突つつつきながら「御前から見れば馬鹿馬鹿しいのさ」と云った。妻君はだまつてしまう。ひゅうひゅうと木枯こからしが吹く。玄関しやうじの障子の破れが紙鳶たこのうなりのように鳴る。

「あなた、いつまでこうしていらつしやるの」と細君は術じゆなげに聞いた。

「いつまでもとは考はない。食えればいつまでこうしていたつていいじゃないか」

「二言目ふたことめには食えれば食えればとおつしやるが、今こそ、どうにかこうにかして行きませうけれども、このぶんで押して行けば今に食べられなくなりますよ」

「そんなに心配するのかい」

細君はむつとした様子である。

「だって、あなたも、あんまり無考むかんがえじゃござんせんか。楽に暮せる教師の口はみんな断ことわつておしまいなすつて、そうして何でも筆で食うと頑固がんこを御張りになるんですもの」

「その通りだよ。筆で食うつもりなんだよ。御前もそのつもりにするがいい」

「食べるものが食べられれば私だってそのつもりになりますわ。私も女房ですもの、あなたの御好きでおやりになる事とやかく云うような差し出口はききやあしません」

「それじゃ、それでいいじゃないか」

「だって食べられないんですもの」

「たべられるよ」

「随分ね、あなたも。現に教師をしていた方が楽で、今の方がよっぽど苦しいじゃないか。あなたはやっぱり教師の方が御上手なんですよ。書く方は性に合わないんですよ」

「よくそんな事がわかるな」

細君は俯向いて、袂から鼻紙を出してちいんと鼻をかんだ。

「私ばかりじゃ、ありませんわ。御兄さんだって、そうおっしゃるじゃありませんか」

「御前は兄の云う事をそう信用しているのか」

「信用したっていいじゃありませんか、御兄さんですもの、そうして、あんなに立派にしていらいっしゃるんですもの」

「そうか」と云ったなり道也先生は火鉢の灰を丁寧に掻きならす。中から二寸釘が灰だらけになって出る。道也先生は、曲った真鍮の火箸で二寸釘をつまみながら、片手に障子をあけて、ほいと庭先へ抛り出した。

庭には何にもない。芭蕉ばしやうがずたずたに切れて、茶色ながら立往生りつじやうせいをしている。地面は皮むが剥むけて、蓆むしろを捲まきかけたように反そっくり返っている。道也先生は庭の面おもてを眺ながめながら

「だいぶ吹いてるな」と独語ひとりごちのように云った。

「もう一遍足立さんに願ねがって御覧ごらんになつたらどうでしょう」

「厭いやなものに頼たのんだって仕方がないさ」

「あなたは、それだから困るのね。どうせ、あんな、豪えらい方かたになれば、すぐ、おいそれと書いて下さる事はないでしょうから……」

「あんな豪い方かたって——足立あだちがかい」

「そりゃ、あなたも豪いでしょうさ——しかし向むかはともかくも大学の先生ですから頭を下げたつて損はないでしょう」

「そうか、それじゃおおせに従したがって、もう一返いっぺん頼たのんで見ようよ。——時に何時かな。や、大變だ、ちょっと社まで行いって、校正けいしやうをしてこなければならぬ。袴はかまを出でしてくれ」

道也先生は例のごとく茶の千筋せんすじの嘉平治かへいじを木枯こからしにぺらつかすべく一着して飄然ひょうぜんと出て

行つた。居間の柱時計がぼんぼんと二時を打つ。

思う事積んでは崩す炭火かなと云う句があるが、細君は恐らく知るまい。細君は道也先生の丸火桶まるひおけの前へ来て、火桶の中を、丸く掻きならしている。丸い火桶だから丸く掻きならす。角な火桶なら角に掻きならすだろう。女は与えられたものを正しいものと考ええる。そのなかで差し当りのないように暮らすのを至善しぜんと心得ている。女は六角の火桶を与えられても、八角の火鉢を与えられても、六角にまた八角に灰を掻きならす。それより以上の見識は持たぬ。

立つてもおらぬ、坐つてもおらぬ、細君の腰は宙に浮いて、膝頭ひざかしらは火桶の縁ふちにつきつけられてゐる。坐すわるには所を得ない、立つては考えられない。細君の姿勢は中途半把ちゆうとはんぱで、細君の心も中途半把である。

考えると嫁に來たのは間違つてゐる。娘のうちの方が、いくら氣楽で面白かつたか知れぬ。人の女房はこんなものと、誰か教えてくれたら、來ぬ前によすはずであつた。親でさえ、あれほどに親切を尽してくれたのだから、二世にせの契ちぎりと掟おきてにさえ出ている夫は、二重にも三重にも可愛がつてくれるだろう、また可愛がつて下さるよと受合うあわれて、住み馴れた家いえを今日限りと出た。今日限りと出た家うちへ二度とは歸られない。歸ろう

と思つてもおとっさんもお母^{つか}さんも亡くなつてしまつた。可愛^{あて}がられる目的ははずれて、可愛^{あて}がつてくれる人はもうこの世にいない。

細君は赤い炭^{たどん}団の、灰の皮を剥^むいて、火箸^{ひばし}の先で突^つつき始めた。炭火なら崩^{くず}しても積む事が出来る。突^つついた炭団は壊^{こわ}れたぎり、丸い元の姿には歸らぬ。細君はこの理を心得^{こころえ}ているだろうか。しきりに突^つついている。

今から考えて見ると嫁に來た時の覺悟が間違^{まちが}つてゐる。自分が嫁に來たのは自分のために來たのである。夫のためと云う考はすこしも持たなかつた。吾^わが身が幸福になりた**い**ばかりに祝言^{しゅげん}の盃^{さかずき}もした。父、母もそのつもりで高砂^{たかさご}を聴^きいていたに違^{ちが}ない。思^{おも}う事はみんなはずれた。この頃の模様を父、母に話したら定めし道也はけしからぬと怒^{おこ}るであらう。自分も腹の中では怒^{おこ}つてゐる。

道也は夫の世話をするのが女房の役だと済ましているらしい。それはこつちで云いた**い**事である。女は弱いもの、年の足らぬもの、したがつて夫の世話を受^うくべきものである。夫を世話する以上に、夫から世話されるべきものである。だから夫に自分の云う通^とりになれと云う。夫はけつして聞き入れた事がない。家庭の生涯^{しょうがい}はむしろ女房の生涯である。道也は夫の生涯と心得^{こころえ}ているらしい。それだから治^{おさ}まらない。世間の夫は皆道也

のようなものかしらん。みんな道也のようだとすれば、この先結婚をする女はだんだん減るだろう。減らないところで見るとほかの旦那様は旦那様らしくしているに違ない。

広い世界に自分一人がこんな思おもいをしてゐるかと思つくと生涯の不幸である。どうせ嫁に來たからには出る訳わけには行かぬ。しかし連れ添う夫がこんなでは、臨終まで本当の妻と云ふ心持こもちが起らぬ。これはどうかせねばならぬ。どうにかして夫を自分の考え通りの夫にしなくては生きてゐる甲斐かいがない。——細君はこう思案しながら、火鉢をいじくつてゐる。風が枯芭蕉かればしやうを吹き倒すほど鳴る。

表に案内がある。寒そうな顔を玄関の障子から出すと、道也の兄が立っている。細君は「おや」と云った。

道也の兄は会社の役員である。その会社の社長は中野君のおやじである。長い二重廻しを玄関へ脱いで座敷へ這入ってくる。

「だいぶ吹きますね」と薄い更紗さらさの上へ坐まつて抜け上さかがった額ひたいを逆さかに撫なでる。

「御寒いによく」

「ええ、今日は社の方が早く引けたものだから……」

「今御歸り掛けですか」

「いえ、いったんうちへ帰ってね。それから出直して来ました。どうも洋服だと坐つてるのが窮屈で……」

兄は糸織の小袖こそでに鉄御納戸てつおなんどの博多はかたの羽織を着ている。

「今日は——留守ですか」

「はあ、たった今しがた出ました。おっつけ帰りましょう。どうぞ御緩ごゆっくり」と例の火鉢を出す。

「もう御構おかまいなさるな。——どうもなかなか寒い」と手を翳かざす。

「だんだん押し詰りましてさぞ御忙おいそがしゅう、いらっしやいましょう」

「へ、ありがとう。毎年暮になると大頭痛、ハハハハ」と笑った。世の中の人はおかしい時ばかり笑うものではない。

「でも御忙がしいのは結構で……」

「え、まあ、どうか、こうかやつてるんです。——時に道也はやはり不相変あいかわらずですか」

「ありがとう。この方はただ忙がしいばかりで……」

「結構でないかね。ハハハハ。どうも困った男ですねえ、御政おまささん。あれほど訳わけがわからないとまでは思わなかったが」

「どうも御心配ばかり懸けまして、私もいろいろ申しますが、女の云う事だと思つてちつとも取り上げませんので、まことに困り切ります」

「そうでしょう、私の云う事だつて聞かないんだから。——わたしも傍にいとつい氣になるから、ついとやかく云いたくなつてね」

「ごもつともでございますとも。みんな当人のためにおつしやつて下さる事ですから：

…」

「田舎にいりや、それまでですが、こつちにこうしていると、当人の氣にいつても、い
らなくつても、やっぱり兄の義務でね。つい云いたくなるんです。——するとちつとも
寄りつかない。全く変人だね。おとなしくして教師をしていりやそれまでの事を、どこ
へ行つても衝突して……」

「あれが全く心配で、私もあのためには、どんなに苦勞したか分りません」

「そうでしょうとも。わたしも、そりやよく御察し申しているんです」

「ありがとうございます。いろいろ御厄介にばかりなりまして」

「東京へ来てからでも、ことなくだらん事をしないでも、どうにでも成るんでさあ。それ
をせっかく云つてやると、まるで取り合わない。取り合わないでもいいから、自分だ

け立派にやって行けばいい」

「それを私も申すのでござんすけれども」

「いざとなると、やつぱりどうかしてくれと云うんでしょう」

「まことに御気の毒さまで……」

「いえ、あなたに何も云うつもりはない。当人がさ。まるで無鉄砲ですからね。大学を卒業して七八年にもなつて筆耕ひつこうの真似まねをしているものが、どこの国にいるのですか。

あれの友達の足立なんて人は大学の先生になつて立派にしているじゃありませんか」

「自分だけはあれでなかなかえらいつもりでおりますから」

「ハハハハえらいつもりだって。いくら一人でえらがったって、人が相手にしなくっちゃしようがない」

「近頃は少しどうかしているんじゃないかと思ひます」

「何とも云えませんか。——何でもしきりに金持やなにかを攻撃するそうじゃありませんか。馬鹿ですなあ。そんな事をしたってどこが面白い。一文にやならず、人からは擯ひん斥せきされる。つまり自分の錆さびになるばかりでさあ」

「少しは人の云う事でも聞いてくれるといいんですけれども」

「しまいにや人にまで迷惑をかける。——実はね、きょう社でもって赤面しちまったんですがね。課長が私^{わたし}を呼んで聞けば君の弟だそうだが、あの白井道也とか云う男は無暗^{むやみ}に不穏な言論をして富豪などを攻撃する。よくない事だ。ちつと君から注意したらよろうって、さんざん叱られたんです」

「まあどうも。どうしてそんな事が知れましたんでしよう」

「そりゃ、会社なんてものは、それぞれ探偵が届きますからね」

「へえ」

「なに道也なんぞが、何をかいたって、あんな地位のないものに世間が取り合う氣遣^{きづかい}はないが、課長からそう云われて見ると、放^{ほう}つて置けませんからね」

「ごもつともで」

「それで実は今日は相談に来たんですがね」

「生憎^{あいにく}出まして」

「なに当人はいない方がかえっていい。あなたと相談さえすればいい。——で、わたしも今途中でだんだん考えて来たんだが、どうしたものでしょう」

「あなたから、とくと異見^{いけん}でもしていただいて、また教師にでも奉職したら、どんなも

のでございましょう」

「そうなればいいですとも。あなたも仕合せだし、わたしも安心だ。——しかし異見^{いけん}でおいそれと、云う通りになる男じゃありませんよ」

「そうでござんすね。あの様子じゃ、とても駄目^{だめ}でございましょうか」

「わたしの鑑定じゃ、とうてい駄目だ。——それでここに一つの策があるんだが、どうでしょう当人の方から雑誌や新聞をやめて、教師になりたいと云う気を起させるようにするのは」

「そうなれば私は実にありがたいのですが、どうしたら、そう旨^{うまい}い具合に参りましよう」

「あのこの間中^{あいだじゅう}当人がしきりに書いていた本はどうなりました」

「まだそのままになっております」

「まだ売れないですか」

「売れるどころじゃございません。どの本屋もみんな断わりますそうです」

「そう。それが売れなけりゃかえって結構だ」

「え？」

「売れない方がいいんですよ。——で、せんだってわたしが周旋した百円の期限はもうじきでしょう」

「たしかこの月の十五日だと思います」

「今日が十一日だから。十二、十三、十四、十五、ともう四日よっかですね」

「ええ」

「あの方を手厳てきびしく催促させるのです。——実はあなただから、今打ち明けて御話するが、あれは、わたしが印を押している体たいにはなっているが本当はわたしが融通したのです。——そうしないと当人が安心していけないから。——それであの方を今云う通り責める——何かほかに工面くめんの出来る所がありますか」

「いいえ、ちつともございません」

「じゃ大丈夫、その方でだんだん責めて行く。——いえ、わたしは黙って見ている。証文の上の貸手が催促に来るのです。あなたも済すましていなくっちゃいけません。——何を云つても冷淡に済ましていなくっちゃいけません。けっしてこちらから、一言ひとことも云わないのです。——それで当人いくら頑固がんこだって苦しいから、また、わたしの方へ頭を下げて来る。いえ来なけりやならないです。その、頭を下げて来た時に、取おさって抑えるので

す。いいですか。そうたよつて来るなら、おれの云う事を聞くがいい。聞かなければおれは構わん。と云いやあ、向むかひでも否こたへとは云われんです。そこでわたしが、御政おまささんだつて、あんなに苦勞してやっている。雑誌なんかで法螺ほらばかり吹き立てていたつて始まらない、これから性根しょうねをいれかえて、もっと着実な世間に害のないような職業をやれ、教師になる気なら心当りを奔走ほんそうしてやろう、と持ち懸もけるのですね。——そうすればきつと我々の思わく通りになると思うが、どうでしょう」

「そうなれば私はどんなに安心が出来るか知れません」

「やつて見ましょうか」

「何分宜なにぶんよろしく願います」

「じゃ、それはきまつたと。そこでもう一つあるんですがね。今日社の帰りがけに、神田を通つたら清輝館せいきかんの前に、大きな広告があつて、わたしは吃驚びっくりさせられましたよ」

「何の広告でござんす」

「演説の広告なんです。——演説の広告がいいが道也が演説をやるんですぜ」

「へえ、ちつとも存じませんでした」

「それで題が大きいから面白い、現代の青年に告ぐと云うんです。まあ何の事やら、あ

んなものの云う事を聞きにくる青年もなさそうじゃありませんか。しかし剣呑^{けんのかん}ですよ。やけになって何を云うか分らないから。わたしも課長から忠告された矢先だから、すぐ社へ電話をかけて置いたから、まあ好いですが、何なら、やらせたくないものですね」「何の演説をやるつもりでござんしょう。そんな事をやるとまた人様に御迷惑^{ごめいわく}がかかりましようね」

「どうせまた過激な事でも云うのですよ。無事に済めばいいが、つまらない事を云おうものなら取って返しがつかないからね。——どうしてもやめさせなくっちゃ、いけないね」

「どうしたらやめるでござんしょう」

「これもよせったって、頑固^{がんこ}だから、よす氣遣^{きづかい}はない。やっぱり欺^{だま}すより仕方がないでしょう」

「どうして欺したらいいでしょう」

「そうさ。あした時刻にわたしが急用で逢^あいたいからって使をよこして見ましようか」

「そうでござんすね。それで、あなたの方へ参るようだと宜^{よろ}しゅうございますが……」

「聞かないかも知れませぬね。聞かなければそれまでさ」

初冬はつふゆの日はもう暗くなりかけた。道也先生は風のなかを帰ってくる。

十一

今日もまた風が吹く。汁気しるけのあるものをことごとく乾鮭からぎけにするつもりで吹く。

「御兄おあにいさんの所から御使です」と細君が封書を出す。道也は坐ったまま、体たいをそらして受け取った。

「待ってるかい」

「ええ」

道也は封を切って手紙を読み下す。やがて、終りから巻き返して、再び状袋のなかへ収めた。何にも云わない。

「何か急用でもござんすか」

道也は「うん」と云いながら、墨を磨すって、何かさらさらと返事を認しただめている。

「何の御用ですか」

「ええ？　ちよつと待った。書いてしまうから」

返事はわずか五六行である。宛名あてなをかいで、「これを」と出す。細君は下女を呼んで渡してやる。自分は動かない。

「何の御用なんですか」

「何の用かわからない。ただ、用があるから、すぐ来てくれとかいてある」

「いらっしゃるでしょう」

「おれは行かない。なんならお前行って見てくれ」

「私が？ 私は駄目ですわ」

「なぜ」

「だって女ですもの」

「女でも行かないよりいいだろう」

「だって。あなたに來いと書いてあるんでしょう」

「おれは行かないもの」

「どうして？」

「これから出掛けなくっちゃならん」

「雑誌の方なら、一日ぐらい御休みになってもいいでしょう」

「編輯へんしゅうならいいが、今日は演説をやらなくっちゃならん」

「演説を？ あなたがですか？」

「そうよ、おれがやるのさ。そんなに驚ろく事はなからう」

「こんなに風が吹くの、よしになさればいいのに」

「ハハハハ風が吹いてやめるような演説なら始めからやりやしない」

「ですけれども滅多めったな事はなさない方がよござんすよ」

「滅多な事とは。何がさ」

「いいえね。あんまり演説なんかなさらない方が、あなたの得とくだと云うんです」

「なに得な事があるものか」

「あとが困るかも知れないと申すのです」

「妙な事を云うね御前は。——演説をしちゃいけないと誰か云ったのかね」

「誰がそんな事を云うものですか。——云いやしません、御兄おにいさんからこうやって、

急用だつて、御使が来ているんですから行つて上げなくつては義理がわるいじゃありませんか」

「それじゃ演説をやめなくっちゃならない」

「急に差支さしつかえが出来たって断わったらいいでしよう」

「今さらそんな不義理が出来るものか」

「では御兄さんの方へは不義理をなすつても、いいとおっしゃるんですか」

「いいとは云わない。しかし演説会の方は前からの約束で——それに今日の演説はただの演説ではない。人を救うための演説だよ」

「人を救うって、誰を救うのです」

「社のもので、この間の電車事件を煽動せんどうしたと云う嫌疑けんぎで引つ張られたものがある。――

——ところがその家族が非常な惨状おちいに陥おちいつて見るに忍びないから、演説会をしてその収入をそちらへ廻してやる計画なんだよ」

「そんな人の家族を救うのは結構な事に相違ないでしょうが、社会主義だなんて間違えられるとあとが困りますから……」

「間違えたって構わないさ。国家主義も社会主義もあるものか、ただ正しい道がいいのさ」

「だって、もしあなたが、その人のようになったとして御覧なさい。私はやつぱり、その人の奥さん同様な、ひどい目に逢わなければならぬでしょう。人を御救いなさるの

も結構ですが、ちつとは私の事も考えて、やって下さらなくっちゃ、あんまりですわ」
道也先生はしばらく沈吟ちんぎんしていたが、やがて、机の前を立ちながら「そんな事はないよ。そんな馬鹿な事はないよ。徳川政府の時代じゃあるまいし」と云った。

例の袴はかまを突っかけると支度したくは一分たたぬうちに出来上った。玄関へ出る。外はいまだに強く吹いている。道也先生の姿は風の中に消えた。

清輝館せいきかんの演説会はこの風の中に開かれる。

講演者は四名、聴衆は三百名足らずである。書生が多い。その中に文学士高柳周作がいる。彼はこの風の中を襟巻えりまきに顔を包んで咳せきをしながらやって来た。十銭の入場料を払って、二階に上った時は、広い会場はまばらに席をあましてむしろ寂寞せきばくの感があった。彼は南側のなるべく暖かそうな所に席をとった。演説はすでに始まっている。

「……文士保護は独立しがたき文士の言う事である。保護とは貴族的時代に云うべき言葉で、個人平等の世にこれを云々するうんぬんのは恥辱きよくの極である。退いて保護を受くるより進んで自己に適當なる租税を天下から払わしむべきである」と云ったと思つたら、引き込んだ。聴衆は喝采かっさいする。隣りに薩摩緋さつまがすりの羽織を着た書生がいて話している。

「今のが、黒田東陽くろだとうようか」

「うん」

「妙な顔だな。もっと話せる顔かと思った」

「保護を受けたら、もう少し顔らしくなるだろう」

高柳君は二人を見た。二人も高柳君を見た。

「おい」

「何だ」

「いやに睨^{にら}めるじゃねえか」

「おっかねえ」

「こんだ誰の番だ。——見ろ見ろ出て来た」

「いやに、ひよろ長いな。この風にどうして出て来たろう」

ひよろながい道也先生は綿服^{めんぷく}のまま壇上^{だんじょう}にあらわれた。かれはこの風の中を金釘^{かなくぎ}のごとく直立して来たのである。から風に吹き曝^{さら}されたる彼は、からからの古瓢箪^{ふるびょうたん}のごとくに見える。聴衆は一度に手をたたく。手をたたくのは必ずしも喝采^{かくさい}の意と解すべからざる場合がある。独り^{ひと}高柳君のみは肅然^{しゅくぜん}として襟^{えり}を正した。

「自己は過去と未来の連鎖^{れんさ}である」

道也先生の冒頭は突如として来た。聴衆はちよつと不意撃を食った。こんな演説の始め方はない。

「過去を未来に送り込むものを旧派と云い、未来を過去より救うものを新派と云うのであります」

聴衆はいよいよ惑った。三百の聴衆のうちには、道也先生をひやかす目的をもつて入場しているものがある。彼らに一寸の隙でも与えれば道也先生は壇上に嘲殺されねばならぬ。角力は呼吸である。呼吸を計らんでひやかせばかえって自分が放り出されるばかりである。彼らは蛇のごとく鎌首を持ち上げて待構えている。道也先生の眼中には道の一字がある。

「自己のうちに過去なしと云うものは、われに父母なしと云うがごとく、自己のうちに未来なしと云うものは、われに子を生む能力なしという一般である。わが立脚地はここにおいて明瞭である。われは父母のために存在するか、われは子のために存在するか、あるいはわれそのものを樹立せんがために存在するか、吾人生存の意義はこの三者の一を離るる事が出来ものである」

聴衆は依然として、だまつている。あるいは煙に捲かれたのかも知れない。高柳君は

なるほどと聴いている。

「文芸復興は大なる意味において父母のために存在したる大時期である。十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味において父母のために存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫派を生まんがために存在した時期である。すなわち子孫のために存在したる時期である。自己を樹立せんがために存在したる時期の好例はエリザベス朝の文学である。個人について云えばイブセンである。メレジスである。ニイチエである。ブラウニングである。耶蘇教徒は基督のために存在している。基督は古えの人である。だから耶蘇教徒は父のために存在している。儒者は孔子のために生きている。孔子も昔えの人である。だから儒者は父のために生きている。……」

「もうわかった」と叫ぶものがある。

「なかなかわかりません」と道也先生が云う。聴衆はどつと笑った。

「あわせ給は単衣のために存在するですか、綿入のために存在するですか。または給自身のために存在するですか」と云つて、一応聴衆を見廻した。笑うにはあまり、奇警である。慎しむにはあまり飄きんである。聴衆は迷うた。

「六ずかしい問題じゃ、わたしにもわからん」と済ました顔で云つてしまふ。聴衆はま

た笑った。

「それはわからんでも差支さしかえない。しかし吾々われわれは何のために存在しているか？　これは知らなくてはならん。明治は四十年立った。四十年は短かくはない。明治の事業はこれ一段落を告げた……」

「ノー、ノー」と云うものがある。

「どこかでノー、ノーと云う声がする。わたしはその人に賛成である。そう云う人があるだろうと思うて待っていたのである」

聴衆はまた笑った。

「いや本当に待っていたのである」

聴衆は三たび関しぎを揚げた。

「私わたしは四十年の歳月を短かくはないと申した。なるほど住んで見れば長い。しかし明治以外の人から見たらやはり長いだろうか。望遠鏡の眼鏡めがねは一寸の直径である。しかし愛宕山ごやまから見ると品川の沖がこの一寸のなかに這入はいってしまう。明治の四十年を長いと云うものは明治のなかに齷齪あくせくしているものの云う事である。後世から見ればずっと縮まってしまう。ずっと遠くから見ると一弾指いちだんしの間に過ぎん。——一弾指の間に何が出来る」

と道也はテーブルの上をとんと敲たたいた。聴衆はちよつと驚ろいた。

「政治家は一大事業をしたつもりでいる。学者も一大事業をしたつもりでいる。実業家も軍人もみんな一大事業をしたつもりでいる。したつもりでいるがそれは自分のつもりである。明治四十年の天地に首を突き込んでゐるから、したつもりになるのである。——一弾指の間に何が出来る」

今度は誰も笑わなかつた。

「世の中の人は云うてゐる。明治も四十年になる、まだ沙翁さおうが出ない、まだゲーテが出ない。四十年を長いと思えばこそ、そんな愚痴ぐちが出る。一弾指の間に何が出る」

「もうでるぞ」と叫んだものがある。

「もうでるかも知れん。しかし今までに出ておらん事は確かである。——一言にして云えば」と句を切つた。満場はしんとしている。

「明治四十年の日月じつげつは、明治開化の初期である。さらに語ごを換かえてこれを説明すれば今日の吾人ごじんは過去かこを有もたぬ開化のうちに生息せいそくしている。したがって吾人は過去を伝つへべきために生れたのではない。——時は昼夜ちゅうやを舍すてず流れる。過去のない時代はない。——諸君誤解してはなりません。吾人は無論過去を有もしている。しかしその過去は老耄ろうもうした

過去か、幼稚な過去である。則^{のつ}とるに足るべき過去は何にもない。明治の四十年は先例のない四十年である」

聴衆のうちにそうかなあと云う顔をしている者がある。

「先例のない社会に生れたものほど自由なものはない。余は諸君がこの先例のない社会に生れたのを深く賀するものである」

「ひや、ひや」と云う声が所々^{しょしょ}に起る。

「そう早^{はや}合^{がてん}点に賛成されては困る。先例のない社会に生れたものは、自から先例を作らねばならぬ。束縛のない自由を享^うけるものは、すでに自由のために束縛されている。この自由をいかに使いこなすかは諸君の権利であると同時に大^{だい}なる責任である。諸君。偉大なる理想を有せざる人の自由は墮落であります」

言い切った道也先生は、両手を机の上に置いて満場を見廻した。雷^{らい}が落ちたような気^け合^{あい}である。

「個人について論じてもわかる。過去を顧^{かえり}みる人は半白^{はんぱく}の老人である。少壮の人に顧みるべき過去はないはずである。前途に大^{だい}なる希望を抱くものは過去を顧みて恋々^{れんれん}たる必要がないのである。——吾人^{ごじん}が今日生きている時代は少壮の時代である。過去を顧みる

ほどに老い込んだ時代ではない。政治に伊藤侯や山県侯を顧みる時代ではない。実業に
渋沢男や岩崎男を顧みる時代ではない。……」

「大気焰」と評したのは高柳君の隣りにいた薩摩拵である。高柳君はむっとした。

「文学に紅葉氏一葉氏を顧みる時代ではない。これらの人々は諸君の先例になるがために生きたのではない。諸君を生むために生きたのである。最前の言葉を用いればこれらの人々は未来のために生きたのである。子のために存在したのである。しかして諸君は自己のために存在するのである。——およそ一時代にあつて初期の人は子のために生きる覚悟をせねばならぬ。中期の人は自己のために生きる決心が出来ねばならぬ。後期の人は父のために生きるあきらめをつけなければならぬ。明治は四十年立つた。まず初期と見て差支なからう。すると現代の青年たる諸君は大に自己を發展して中期をかたちづくらねばならぬ。後ろを顧みる必要なく、前を氣遣う必要もなく、ただ自我を思のままに發展し得る地位に立つ諸君は、人生の最大愉快を極むるものである」

満場は何となくどよめき渡つた。

「なぜ初期のものが先例にならん？ 初期はもつとも不秩序の時代である。偶然の跋扈する時代である。僥倖の勢を得る時代である。初期の時代において名を揚げたるもの、

家を起したるもの、財を積みたるもの、事業をなしたるものは必ずしも自己の力量に由^よつて成功したとは云われぬ。自己の力量によらずして成功するは士のもつとも恥辱とするところである。中期のものはこの点において遥^{はる}かに初期の人々よりも幸福である。事を成すのが困難であるから幸福である。困難にもかかわらず僥倖が少ないから幸福である。困難にもかかわらず力量しだいで思うところへ行けるほどの余裕があり、発展の道があるから幸福である。後期に至るとかたまつてしまう。ただ前代を祖^そ述^{じゆつ}するよりほかに身動きがとれぬ。身動きがとれなくなつて、人間が腐^{くさ}つた時、また波瀾^{はらん}が起る。起らねば化石するよりほかにしようがない。化石するのがいやだから、自^{みづ}から波瀾^{はらん}を起すのである。これを革命と云うのである。

「以上は明治の天下にあつて諸君の地位を説明したのである。かかる愉快な地位に立つ諸君はこの愉快に相当する理想を養^いわねばならん」

道也先生はここにおいて一^{いっ}転^{てん}語^ごを下した。聴衆は別にひやかす気もなくなつたと見える。黙^{もく}つてゐる。

「理想は魂である。魂は形がないからわからない。ただ人の魂の、行為に発現するところを見て髣髴^{ほうふつ}するに過ぎん。惜しいかな現代の青年はこれを髣髴^{ほうふつ}することが出来ん。こ

れを過去に求めてもない、これを現代に求めてはなおさらない。諸君は家庭に在^あつて父母を理想とする事が出来ますか」

あるものは不平な顔をした。しかしだまっている。

「学校に在^あつて教師を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「社会に在^あつて紳士を理想とする事が出来ますか」

「ノー、ノー」

「事実上諸君は理想をもつておらん。家に在^あつては父母を輕蔑^{けいべつ}し、学校に在^あつては教師を輕蔑し、社会に出^でては紳士を輕蔑している。これらを輕蔑し得るのは見識である。しかしこれらを輕蔑し得るためには自己により大^{だい}なる理想がなくてはならん。自己に何らの理想なくして他を輕蔑するのは墮落である。現代の青年は滔^{とう}々として日に墮落しつつある」

聴衆は少しく色めいた。「失敬な」とつぶやくものがある。道也先生は昂然^{こうぜん}として壇下を睥睨^{へいげい}している。

「英国風を鼓吹^{こすい}して憚^{はば}からぬものがある。気の毒な事である。己^{おの}れに理想のないのを明

かに暴露ばくろしている。日本の青年は滔々として墮落するにもかかわらず、いまだここまでは墮落せんと思う。すべての理想は自己の魂である。うちより出いでねばならぬ。奴隷の頭脳に雄大な理想の宿りようがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隷である。奴隷をもつて甘んずるのみならず、争つて奴隷たらんとするものに何らの理想が脳裏のうりに醗酵はっこうし得る道理があろう。

「諸君。理想は諸君の内部から湧わき出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血となり肉となりついに諸君の魂となった時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃つけやきばは何にもならない」

道也先生はひやかされるなら、ひやかして見ると云わぬばかりに片手の拳骨げんこつをテーブルの上に乗せて、立っている。汚ない黒木綿くろもめんの羽織に、べんべらの袴はかまは最前さいぜんほどに目立たぬ。風の音がごとと鳴る。

「理想のあるものは歩くべき道を知っている。大なる理想のあるものは大なる道がある。迷子まいごとは違う。どうあつてもこの道があるかねばやまぬ。迷いたくても迷えんのである。魂がこちらこちらと教えるからである。

「諸君のうちには、どこまで歩くつもりだと聞くものがあるかも知れぬ。知れた事であ

る。行ける所まで行くのが人生である。誰しも自分の寿命を知ってるものはない。自分に知れない寿命は他人にはなおさらわからない。医者在家業にする専門家でも人間の寿命を勘定する訳には行かぬ。自分が何歳まで生きるかは、生きたあとで始めて言うべき事である。八十歳まで生きたと云う事は八十歳まで生きた事実が証拠立ててくれねばならぬ。たとい八十歳まで生きる自信があつて、その自信通りになる事が明瞭であるにしても、現に生きたと云う事実がない以上は誰も信ずるものはない。したがつて言うべきものでない。理想の黙示を受けて行くべき道を行くのもその通りである。自己がどれほどに自己の理想を現実にし得るかは自己自身にさえ計られぬ。過去がこうであるから、未来もこうであろうぞと臆測するのは、今まで生きていたから、これからも生きるだろうと速断するやうなものである。一種の山である。成功を目的にして人生の街頭に立つものはすべて山師である」

高柳君の隣りにいた薩摩絋は妙な顔をした。

「社会は修羅場である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。四十年前の志士は生死の間に入出して維新の大業を成就した。諸君の冒すべき危険は彼らの危険より恐ろしいかも知れぬ。血を見ぬ修羅場は砲声剣光の修羅場よりも、より深刻に、より悲惨である。

諸君は覺悟をせねばならぬ。勤王の志士以上の覺悟をせねばならぬ。斃^{たお}るる覺悟をせねばならぬ。太平の天地だと安心して、拱手^{きようしゅ}して成功を冀^{こいねが}う輩^{はい}は、行くべき道に躓^{つまず}いて非^{ひど}業^うに死したる失敗の児^じよりも、人間の価値は遙^{はる}かに乏しいのである。

「諸君は道を行かんがために、道を遮^{さへ}ぎるものを追わねばならぬ。彼らと戦うときに始めて、わが生涯^{しょうがい}の内生命^{ないせいめい}に、勤王の諸士があえてしたる以上の煩悶^{はんもん}と辛慘^{しんさん}とを見出し得るのである。——今日は風が吹く。昨日^{きのう}も風が吹いた。この頃の天候は不穩である。しかし胸裏^{きょうり}の不穩はこんなものではない」

道也先生は、がたつく硝子窓^{ガラスまど}を通して、往来の方を見た。折から一陣の風が、会釈^{えしやく}なく往来の砂を捲^まき上げて、屋の棟^{むね}に突き当って、虚空^{こくう}を高く逃^{のが}れて行つた。

「諸君。諸君のどれほどに剛健なるかは、わたしには分らん。諸君自身にも知れぬ。ただ天下後世が証拠^{しやうこ}だてるのみである。理想の大道^{たいどう}を行き尽して、途上に斃^{せつな}るる刹那^{せつな}に、わが過去を一瞥^{いちべつ}のうちに縮め得て始めて合点^{がてん}が行^ゆくのである。諸君は諸君の事業そのものに由^よって伝えられねばならぬ。單に諸君の名に由^よって伝えられんとするは輕薄である」

高柳君は何となくきまりがわるかった。道也の輝やく眼が自分の方に注^{そそ}いでいるよう

に思^{おも}れる。

「理想は人によつて違^{ちが}う。吾々は學問をするもの。理想は何であらう」
聴衆は默然^{もくねん}として応^{こた}ずるものがない。

「學問をするものの理想は何であらうとも——金でない事だけはたしかである」

五六カ所に笑聲^{しょうせい}が起る。道也先生の裕福^{ゆうふく}ならぬ事はその服裝を見たものの心から取り除^のけられぬ事實である。道也先生は羽織^{うぎ}のゆきを左右の手に引^ひつ張りながら、まず徐^{おもむ}ろにわが右の袖^{そで}を見た。次に眼を轉じてまた徐ろにわが左の袖を見た。黒木綿^{くろもめん}の織目のなかに砂がいっぱいたまつてゐる。

「随分きたない」と落ちつき払^{はら}つて云つた。

笑聲^{しょうせい}が満場に起る。これはひやかしの笑聲ではない。道也先生はひやかしの笑聲を好意^{こうい}の笑聲で揉^もみ潰^{つぶ}したのである。

「せんだつて學問を専門にする人が来て、私^{わたし}も妻^{さい}をもろうて子が出来た。これから金を溜^ためねばならぬ。是非共子供に立派な教育をさせるだけは今のうちに貯蓄^{ちそく}して置かねばならぬ。しかしどうしたら貯蓄が出来るでしょうかと聞いた。

「どうしたら學問で金がとれるだろうと云う質問ほど馬鹿氣た事はない。學問は學者に

なるものである。金になるものではない。学問をして金をとる工夫くふうを考えるのは北極へ行つて虎狩をするようなものである」

満場はまたちよつとどよめいた。

「一般の世人は労力と金の関係について大なる誤謬ごびやうを有している。彼らは相応の学問をすれば相応の金がとれる見込のあるものだと思う。そんな条理は成立する訳がない。学問は金に遠ざかる器械である。金がほしければ金を目的にする実業家とか商人になるがいい。学者と町人とはまるで別途の人間であつて、学者が金を予期して学問をするのは、町人が学問を目的にして丁稚でっぢに住み込むようなものである」

「そうかなあ」と突飛とつびな声を出す奴やつがいる。聴衆はどつと笑つた。道也先生は平然として笑わらいのしずまるのを待っている。

「だから学問のことは学者に聞かなければならん。金が欲しければ町人の所へ持つて行くよりほかに致し方はない」

「金が欲しい」とまぜかえす奴が出る。誰だかわからない。道也先生は「欲しいでしよう」と云つたぎり進行する。

「学問すなわち物の理がわかると云う事と生活の自由すなわち金があると云う事とは独

立して関係のないのみならず、かえって反対のものである。学者であればこそ金がないのである。金を取るから学者にはなれないのである。学者は金がない代りに物の理がわかるので、町人は理窟がわからないから、その代りに金を儲ける」

何か云うだろうと思つて道也先生は二十秒ほど絶句して待つてゐる。誰も何も云わない。

「それを心得んで金のある所には理窟もあると考えてゐるのは愚の極である。しかも世間一般はそう誤認してゐる。あの人は金持ちで世間が尊敬してゐるからして理窟もわかつてゐるに違ない、カルチュアーもあるにきまつてゐると——こう考える。ところがその実はカルチュアーを受ける暇がなければこそ金をもうける時間が出来たのである。自然は公平なもので一人の男に金ももうけさせる、同時にカルチュアーも授けると云うほど最屑にはせんのである。この見やすき道理も弁ぜずして、かの金持ち共は己惚れて……」

「ひや、ひや」「焼くな」「しつ、しつ」だいふ賑やかになる。

「自分達は社会の上流に位して一般から尊敬されているからして、世の中に自分ほど理窟に通じたものはない。学者だろうが、何だろうがおれに頭をさげねばならんと思うの

は憫然びんぜんのしだいで、彼らがこんな考を起す事自身がカルチュアーのないと云う事実を証明している」

高柳君の眼は輝やいた。血が双頬そうちきょうに上つてくる。

「訳わけのわからぬ彼らが己惚うぬぼれはどうてい濟度さいどすべからざる事とするも、天下社会から、彼らの己惚をもつともだとは認するに至つては愛想あいその尽きた不見識と云わねばならぬ。よく云う事だが、あの男もあのくらいな社会上の地位にあつて相応の財産も所有している事だから万更そんな訳のわからない事もなからう。豈計あにはからんやある場合には、そんな社会上の地位を得て相当の財産を有しておればこそ訳がわからないのである」

高柳君は胸の苦しみを忘れて、ひやひやと手を打った。隣の薩摩緋さつまがすりはえへんと嘲弄ちやうろう的な咳払せきはらいをする。

「社会上の地位は何できまると云えば——いろいろある。第一カルチュアーできまる場合もある。第二門閥もんぱつできまる場合もある。第三には芸能できまる場合もある。最後に金できまる場合もある。しかしてこれはもつとも多い。かようにいろいろの標準があるのを混同して、金で相場がきまった男を学問で相場がきまった男と相互に通用し得るようめくらに考えている。ほとんど盲目同然である」

エヘン、エヘンと云う声が散らばって五六カ所に起る。高柳君は口を結んで、鼻から呼吸いきをはずませている。

「金で相場のきまつた男は金以外に融通は利きかぬはずである。金はある意味において貴重かも知れぬ。彼らはこの貴重ようなものを擁ようしているから世の尊敬を受ける。よろしい。そこまでは誰も異存はない。しかし金以外の領分において彼らは幅はばを利かし得る人間ではない、金以外の標準をもつて社会上の地位を得る人の仲間入は出来ない。もしそれが出来ると云えば学者も金持ちの領分へ乗り込んで金銭本位の区域内で威張つても好い訳になる。彼らはそうはさせぬ。しかし自分だけは自分の領分内におとなしくしている事を忘れて他の領分までのさばり出ようとする。それが物のわからない、好い証拠である」

高柳君は腰を半分浮かして拍手をした。人間は真似まねが好すきである。高柳君に誘い出されて、ぱちぱちの聲が四方に起る。冷笑党は勢いきおいの不可なるを知つて黙した。

「金は労力の報酬である。だから労力を余計にすれば金は余計にとれる。ここまでは世間も公平である。否いなこれすらも不公平な事がある。相場師などは労力なしに金を攫つかんでいる）しかし一步進めて考えて見るが好い。高等な労力に高等な報酬が伴うであろう

か——諸君どう思います——返事がなければ説明しなければならん。報酬なるものは眼前の利害にもつとも影響の多い事情だけできめられるのである。だから今の世でも教師の報酬はこあきんど小商人の報酬よりも少ないのである。眼前以上の遠い所高い所に労力を費やすものは、いかに将来のためになろうとも、国家のためになろうとも、人類のためになろうとも報酬はいよいよ減ずるのである。だによつて労力の高下こうげでは報酬の多寡たかはきまらない。金銭の分配は支配されておらん。したがつて金のあるものが高尚な労力をしたとは限らない。換言すれば金があるから人間が高尚だとは云えない。金を目安めやすにして人物の価値をきめる訳には行かない」

とうとう滔々として述べて来た道也はちよつとここで切つて、満場の形勢を觀望した。活版に押した演説は生命がない。道也は相手しだいで、どうとも変わるつもりである。満場は思つたより静かである。

「それを金があるからと云うてむやみにえらがるのは間違っている。学者と喧嘩けんかする資格があると思つてるのも間違っている。氣品のある人々に頭を下げさせるつもりでいるのも間違っている。——少しは考えても見るがいい。いくら金があつても病氣の時は医者に降参しなければなるまい。金貨を煎せんじて飲む訳には行かない……」

あまり熱心な滑稽こっけいなので、思わず嘖げんき出したものが三四人ある。道也先生は気がついた。

「そうでしょう——金貨を煎せんじたつて下痢げりはとまらないでしょう。——だから御医者に頭を下げる。その代り御医者は——金に頭を下げる」

道也先生はにやにやと笑った。聴衆もおとなしく笑う。

「それで好いいのです。金に頭を下げて結構です——しかし金持はいけない。医者に頭を下げる事を知つてながら、趣味とか、嗜好しこうとか、気品とか人品とか云う事に関して、学問のある、高尚な理窟りくつのわかった人に頭を下げることを知らん。のみならずかえつて金の力で、それらの頭をさげさせようとする。——盲目蛇めくらへびに怖おじずとはよく云つたものですねえ」

と急に会話調になったのは曲折があつた。

「学問のある人、訳のわかった人は金持が金の力で世間に利益を与えると同様の意味において、学問をもつて、わけの分つたところをもつて社会に幸福を与えるのである。だからして立場こそ違え、彼らはとうてい冒おかし得べからざる地位に確たる尻しりを据すえているのである。

「学者がもし金銭問題にかかれば、自己の本領を棄てて他の縄張内に這入るのだから、金持ちに頭を下げるが順当であろう。同時に金以上の趣味とか文学とか人生とか社会とか云う問題に関しては金持ちの方が学者に恐れ入って来なければならぬ。今、学者と金持の間に葛藤が起るとする。単に金銭問題ならば学者は初手から無能力である。しかしそれが人生問題であり、道德問題であり、社会問題である以上は彼ら金持は最初から口を開く権能のないものと覚悟をして絶対的に学者の前に服従しなければならぬ。岩崎は別荘を立て連ねる事において天下の学者を圧倒しているかも知れぬが、社会、人生の問題に関しては小児と一般である。十万坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の学者を凹ましたと思うのは凌雲閣を作ったから仙人が恐れ入ったろうと考えるようなものだ……」

聴衆は道也の勢と最後の一句の奇警なのに氣を奪われて黙っている。独り高柳君がたまらなかつたと見えて大きな声を出して喝采した。

「商人が金を儲けるために金を使うのは専門上の事で誰も容喙が出来ぬ。しかし商買上に使われないで人事上にその力を利用するときは、訳のわかつた人に聞かねばならぬ。そうしなければ社会の悪を自ら醸造して平氣でいる事がある。今の金持の金のある一部分

は常にこの目的に向つて使用されている。それと云うのも彼ら自身が金の主であるだけで、他の徳、芸の主でないからである。学者を尊敬する事を知らんからである。いくら教えても人の云う事が理解出来んからである。災は必ず己れに帰る。彼らは是非共学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。耳を傾けねば社会上の地位が保てぬ時期がくる」

聴衆は一度にどつと関を揚げた。高柳君は肺病にもかかわらずもつとも大なる関を揚げた。生れてから始めてこんな痛快な感じを得た。襟巻に半分顔を包んでから風のなかをここまで来た甲斐はあると思う。

道也先生は予言者のごとく凜として壇上に立っている。吹きまくる木枯は屋を撼かして去る。

十二

「ちつとは、好い方かね」と枕元へ坐る。

六畳の座敷は、畳がほけて、とんと打ったら夜でも埃りが見えそうだ。宮島産の丸盆

薬瓶くすりびんと驗温器けんおんきがいっしょに乗っている。高柳君は演説を聞いて帰ってから、とうとう喀血かっけつしてしまった。

「今日はいよいよ」と床の上に起き返って後から搔卷うしろかひまきを背せの半分までかけている。

中野君は大島紬おおしまつむぎの袂たもとから魯西亜皮ロシアがわの卷蓆まきたはこいれ入を出しかけたが、

「うん、煙草たばこを飲んじゃ、わるかったね」とまた袂のなかへ落す。

「なに構わない。どうせ煙草ぐらいで癒なおりやしないんだから」と慚然ぶぜんとしている。

「そうでないよ。初はじめてが肝心かんじんだ。今のうち養生しないといけない。昨日きのう医者へ行つて聞いて見たが、なに心配するほどの事もない。来たかい医者は」

「今朝あした来た。暖かにしていると云った」

「うん。暖かにしているがいい。この室へやは少し寒いねえ」と中野君は佻わびし氣げに四方あたりを見廻した。

「あの障子しょうじなんか、宿の下女にでも張らしたらよかろう。風が這入はいって寒いだろう」

「障子だけ張ったって……」

「転地でもしたらどうだい」

「医者もそう云うんだが」

「それじゃ、行くがいい。今朝そう云ったのかね」

「うん」

「それから君は何と答えた」

「何と答えるったって、別に答えようもないから……」

「行けばいいじゃないか」

「行けばいいだろうが、ただはいかない」

高柳君は元氣のない顔をして、自分の膝頭へ眼を落した。瓦斯双子の端から鼠色のフラネルが二寸ばかり食み出している。寸法も取らず別々に仕立てたものだろう。

「それは心配する事はない。僕がどうかする」

高柳君は潤のない眼を膝から移して、中野君の幸福な顔を見た。この顔しだいで返答はきまる。

「僕がどうかするよ。何だって、そんな眼をして見るんだ」

高柳君は自分の心が自分の両眼から、外を覗いていたのだなと急に気がついた。

「君に金を借りるのか」

「借りないでもいいさ……」

「貰うのか」

「どうでもいいさ。そんな事を気に掛ける必要はない」

「借りるのはいいやだ」

「じゃ借りなくってもいいさ」

「しかし貰う訳には行かない」

「六^むずかしい男だね。何だってそんなにやかましくいうのだい。学校にいる時分は、よく君の方から金を借せの、西洋料理を奢^{おご}れのとせびつたじゃないか」

「学校にいた時分は病氣なんぞありやしなかったよ」

「平^{ふだん}生ですら、そうなら病氣の時はおおさらだ。病氣の時に友達が世話をするのは、誰から云ったっておかしくはないはずだ」

「そりゃ世話をする方から云えばそうだろう」

「じゃ君は何か僕に対して不平な事でもあるのかい」

「不平はないさありがたいと思ってるくらいだ」

「それじゃ心快^{こころよく}く僕の云う事を聞いてくれてもよからう。自分で不愉快の眼鏡を掛けて世の中を見て、見られる僕らまでを不愉快にする必要はないじゃないか」

高柳君はしばらく返事をしない。なるほど自分は世の中を不愉快にするために生きるのかも知れない。どこへ出ても好かれた事がない。どうせ死ぬのだから、なまじい人の情を恩に着るのはかえって心苦しい。世の中を不愉快にするくらいな人間ならば、中野一人を愉快にしてやったって五十歩百歩だ。世の中を不愉快にするくらいな人間なら、また一日も早く死ぬ方がましである。

「君の親切を無^むにしては気の毒だが僕は転地なんか、したくないんだから勘弁^{かんべん}してくれ」

「またそんなわからずやを云う。こう云う病気は初期が大切だよ。時期を失^{しつ}すると取り返しがつかないぜ」

「もう、とうに取り返しがつかないんだ」と山の上から飛び下りたような事を云う。

「それが病気だよ。病気のせいでそう悲観するんだ」

「悲観するって希望のないものは悲観するのは当り前だ。君は必要がないから悲観しないのだ」

「困った男だなあ」としばらく匙^{さじ}を投げて、すいと起^たつて障子をあける。例の梧桐^{ごとう}が坊^{ぼう}主^ずの枝を真直^{まっすぐ}に空に向って曝^{さら}している。

「淋^{さび}しい庭だなあ。桐^{きり}が裸で立っている」

「この間まで葉が着いてたんだが、早いものだ。裸の桐に月がさすのを見た事があるかい。凄^{すご}い景色^{けしき}だ」

「そうだろう。——しかし寒いのに夜る起きるのはよくないぜ。僕は冬の月^{きいづき}は嫌だ。月は夏がいい。夏のいい月夜に屋根舟に乗って、隅田川から綾瀬^{あやせ}の方へ漕^こがして行^いって銀^{ぎん}扇^{せん}を水に流して遊んだら面白いだろう」

「気楽云つてらあ。銀扇を流すたどうするんだい」

「銀泥^{ぎんでい}を置いた扇を何本も舟へ乗せて、月に向って投^なげるのさ。きらきらして奇麗^{きれい}だろう」

「君の発明かい」

「昔^{むか}しの通人^{つうじん}はそんな風流をして遊んだそうだ」

「贅^{ぜいたく}沢な奴らだ」

「君の机の上に原稿があるね。やっぱり地理学教授法か」

「地理学教授法はやめたさ。病気になって、あんなつまらんものがやれるものか」

「じゃ何だい」

「久しく書きかけて、それなりにして置いたものだ」

「あの小説か。君の一代の傑作か。いよいよ完成するつもりなのかい」

「病気になる、なおやりたくなる。今まではひまになったらと思っていたが、もうそれまで待つちゃいけない。死ぬ前には非書き上げないと気が済まない」

「死ぬ前は過激な言葉だ。書くのは賛成だが、あまり凝るとかえって身体がわるくなる」

「わるくなっても書けりゃいいが、書けないから残念でたまらない。昨夜は続きを三十枚かいた夢を見た」

「よつぽど書きたいのだと見えるね」

「書きたいさ。これでも書かなくっちゃ何のために生れて来たのかわからない。それが書けないときまった以上は穀潰し同然ださ。だから君の厄介にまでなつて、転地するものはないんだ」

「それで転地するのがいやなのか」

「まあ、そうさ」

「そうか、それじゃ分つた。うん、そう云うつもりなのか」と中野君はしばらく考えて

いたが、やがて

「それじゃ、君は無意味に人の世話になるのが厭いやなんだろうから、そのところを有意味にしようじゃないか」と云う。

「どうするんだ」

「君の目下もっかの目的は、かねて腹案のある述作を完成しようと云うのだろう。だからそれを条件にして僕が転地の費用を担任しようじゃないか。逗子ずしでも鎌倉かまくらでも、熱海あたみでも君の好な所すきへ往いって、呑氣のんきに養生する。ただ人の金を使って呑氣に養生するだけでは心が済まない。だから療養かたがた気が向いた時に続きをかくさ。そうして身体からだがよくなつて、作さくが出来上つたら帰ってくる。僕は費用を担任した代り君に一大傑作を世間へ出して貰う。どうだい。それなら僕の主意も立ち、君の望のぞみも叶かなう。一挙兩得じゃないか」

高柳君は膝頭ひざしらを見詰めて考えていた。

「僕が君の所へ、僕の作を持って行けば、僕の君に対する責任は済む訳なんだね」

「そうさ。同時に君が天下に対する責任の一分いちぶが済むようになるのさ」

「じゃ、金を貰おう。貰いつ放しに死んでしまうかも知れないが——いいや、まあ、死ぬまで書いて見よう——死ぬまで書いてら書けない事もなからう」

「死ぬまでかいちゃ大変だ。暖かい相州^{そうしゅうへん}辺へ行って氣を樂^{らく}にして、時々一頁二頁ずつ書く——僕の条件に期限はないんだぜ、君」

「うん、よしきつと書いて持つて行く。君の金を使って茫然^{ぼうぜん}としていちゃ濟まない」

「そんな濟むの濟まないのと考えてちやいけない」

「うん、よし分つた。ともかくも転地しよう。明日^{あした}から行こう」

「だいぶ早いな。早い方がいいだろう。いくら早くつても構わない。用意はちゃんと出^で来^きてるんだから」と懷中^{ななこ}から七子の三折^{みつお}れの紙入を出して、中から一束の紙幣^{しへい}をつかみ出す。

「ここに百円ある。あとはまた送る。これだけあつたら当分はいいだろう」

「そんなにいるものか」

「なにこれだけ持つて行くがいい。実はこれは妻^{さい}の發議^{はつぎ}だよ。妻の好意だと思つて持つて行つてくれたまえ」

「それじゃ、百円だけ持つて行くか」

「持つて行くがいいとも。せっかく包んで来たんだから」

「じゃ、置いて行つてくれたまえ」

「そこで、じゃ明日立つね。場所か？ 場所はどこでもいいさ。君の気の向いた所がよからう。向へ着いてからちよつと手紙を出してくればいいよ。——護送するほどの大病人でもないから僕は停車場へも行かないよ。——ほかに用はなかったかな。——なに少し急ぐんだ。実は今日は妻を連れて親類へ行く約束があるんで、待つてゐるから、僕は失敬しなくっちゃならない」

「そうか、もう帰るか。それじゃ奥さんによろしく」

中野君は欣然として歸つて行く。高柳君は立つて、着物を着換えた。

百円の金は聞いた事がある。が見たのはこれが始めてである。使うのはもちろんの事始めてである。かねてから自分を代表するほどの作物を何か書いて見たいと思つていた。生活難の合間合間に一頁二頁と筆を執つた事はあるが、興が催すと、すぐやめねばならぬほど、饑は寒は容赦なくわれを追うてくる。この容子では当分仕事らしい仕事は出来そうもない。ただ地理学教授法を訳して露命を繋いでいるようでは馬車馬が秣を食つて終日馳けあるくと変りはなさそうだ。おれにはおれがある。このおれを出さないでぶらぶらと死んでしまうのはもったいない。のみならず親の手前世間の手前面目ない。人から土偶のようにうとまれるのも、このおれを出す機会がなくて、鈍根にさえ立

派に出来る翻訳の下働きなどで日を暮らしているからである。どうしても無念だ。石に
噛みついてともと思う矢先に道也の演説を聞いて床についた。医者は大胆にも結核の初期
だと云う。いよいよ結核なら、とても助からない。命のあるうちにとまた旧稿に向つて
見たが、縛る縄は遅く、逃げる泥棒は早い。何一つ見やげも置かないで、消えて行くか
と思うと、熱さえ余計に出る。これ一つ纏めれば死んでも言訳は立つ。立つ言訳を作る
には手当もしなければならん。今の百円は他日の万金よりも貴い。

百円を懐にして室のなかを二度三度廻る。気分も爽かに胸も涼しい。たちまち思い
切つたように帽を取つて師走の市に飛び出した。黄昏の神楽坂を上ると、もう五時に近
い。気の早い店では、はや瓦斯を点じている。

毘沙門の提灯は年内に張りかえぬつもりか、色が褪めて暗いなかで揺れている。門前
の屋台で職人が手拭を半纏にとつて、しきりに寿司を握っている。露店の三馬は光るほ
どに色が寒い。黒足袋を往来へ並べて、頬被りに懷手をしたのがある。あれでも足袋は
売れるかしらん。今川焼は一銭に三つで婆さんの自製にかかる。六銭五厘の万年筆は安
過ぎると思う。

世は様々だ、今ここを通っているおれは、翌の朝になると、もう五六十里先へ飛んで

行く。とは寿司屋の職人も今川焼の婆さんも夢にも知るまい。それから、この百円を使い切ると金の代りに金より貴いあるものを懷にしてまた東京へ歸つて来る。とも誰も思うものはあるまい。世は様々である。

道也先生に逢つて、実はこれこれだと云つたら先生はそうかと微笑するだろう。あす立ちますと云つたらあるいは驚ろくだろう。一世一代の作を仕上げてかえるつもりだと云つたらさぞ喜ぶであろう。——空想は空想の子である。もつとも繁殖力に富むものを脳裏に植えつけた高柳君は、病の身にある事を忘れて、いつの間にか先生の門口に立つた。

誰か来客のようであるが、せつかく来たのをとわざと遠慮を抜いて「頼む」と声をかけて見た。「どなた」と奥から云うのは先生自身である。

「私です。高柳……」

「はあ、御這入り」と云つたなり、出てくる景色もない。

高柳君は玄関から客間へ通る。推察の通り先客がいた。市楽の羽織に、くすんだ縞ものを着て、帯の紋博多だけがいちじるしく眼立つ。額の狭い頬骨の高い、鈍栗眼である。高柳君は先生に挨拶を済ました、あとで鈍栗に黙礼をした。

「どうしました。だいぶ遅く来ましたね。何か用でも……」

「いいえ、ちよつと——実は御暇乞おいとまごに上がりました」

「御暇乞？ 田舎いなかの中学へでも赴任ふにんするんですか」

間の襖ふすまをあけて、細君が茶を持って出る。高柳君と御辞儀おじぎの交換をして居間しりぞへ退く。

「いえ、少し転地しようかと思ひまして」

「それじゃ身体からだでも悪いんですね」

「大した事もなからうと思ひますが、だんだん勧める人もありますから」

「うん。わるけりや、行くがいいですとも。いつ？ あした？ そうですか。それじゃまあ緩ゆるくり話したまえ。——今ちよつと用談を済ましてしまうから」と道也先生は鈍栗の方へ向いた。

「それで、どうも御氣の毒だが——今申す通りの事情だから、少し待つてくれませんか」

「それは待つて上げたいのです。しかし私の方の都合もありまして」

「だから利子を上げればいいでしょう。利子だけ取つて元金は春まで猶予ゆうよしてくれませんか」

「利子は今まででも滞りなくちようだいしておりますから、利子さえ取れば好い金なら、いつまでも御用立てて置きたいのですが……」

「そうはいかんでしょか」

「せっかくの御頼だから、出来れば、そうしたいのですが……」

「いけませんか」

「どうもまことに御気の毒で……」

「どうしても、いかんですか」

「どうあっても百円だけ拵えていただかなくっちゃならんので」

「今夜中にですか」

「ええ、まあ、そうですね。昨日が期限でしたね」

「期限の切れたのは知ってるです。それを忘れるような僕じゃない。だからいろいろ奔走して見たんだが、どうも出来ないから、わざわざ君の所へ使をあげたのです」

「ええ、御手紙はたしかに拝見しました。何か御著述があるそうで、それを本屋の方へ御売渡しになるまで延期の御申込でした」

「さよう」

「ところがですて、この金の性質がですて——ただ利子を生ませる目的でないものですから——実は年末には是非入用だがと念を押して御兄さんおにいに伺ったくらいなのです。ところが御兄さんが、いやそりゃ大丈夫、ほかのものなら知らないが、弟に限ってけつして、そんな不都合はない。受合う。とおっしゃるものですから、それで私も安心して御用立て申したので——今になって御違約ではなはだ迷惑します」

道也先生は默然もくねんとしている。鈍栗どんぐりは煙草たばこをすばすば呑む。

「先生」と高柳君が突然横合から口を出した。

「ええ」と道也先生は、こつちを向く。別段赤面した様子も見えない。赤面するくらいなら用談中と云って面会を謝絶するはずである。

「御話し中はなはだ失礼ですが。ちよつと伺つても、ようございましょうか」

「ええ、いいです。何ですか」

「先生は今御著作をなさつたと承うけたまりましたが、失礼ですが、その原稿を見せていただく訳には行きますまいか」

「見るなら御覧、待つてゐるうち、読むのですか」

高柳君は黙っている。道也先生は立つて、床の間に積みかさねた書籍の間から、厚さ

三寸ほどの原稿を取り出して、青年に渡しながら

「見て御覧」という。表紙には人格論と楷書かいしょでかいてある。

「ありがとう」と両手に受けた青年は、しばしこの人格論の三字をしけじけと眺ながめていたが、やがて眼を挙あげて鈍栗の方を見た。

「君、この原稿を百円に買って上げませんか」

「エへへへ。私は本屋じゃありません」

「じゃ買わないですね」

「エへへへ御冗談ごじやうだんを」

「先生」

「何ですか」

「この原稿を百円で私に譲って下さい」

「その原稿? ……」

「安過ぎるでしょう。何万円だって安過ぎるのは知っています。しかし私は先生の弟子だから百円に負けて譲って下さい」

道也先生は茫然ぼうぜんとして青年の顔を見守っている。

「是非譲って下さい。——金はあるんです。——ちゃんここに持っています。——百円ちゃんとあります」

高柳君は懐ふちから受取ったままの金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から……」と道也先生は押し返そうとする。

「いいえ、いいんです。好いから取って下さい。——いや間違ったんです。是非この原稿を譲って下さい。——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいじめて追い出した弟子の一人です。——だから譲って下さい」

愕然がくぜんたる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去った。彼は自己を代表すべき作物さくぶつを転地先よりもたらし帰る代りに、より偉大なる人格論ぶかくろんを懐ふちにして、これをわが友中野君に致いたし、中野君とその細君の好意に酬むくいんとするのである。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
